
消えない昨日、失う明日。

霜月 沙羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消えない昨日、失う明日。

【Nコード】

N9143A

【作者名】

霜月 沙羅

【あらすじ】

私には消してしまいたい過去がある。失いたくない未来がある。高校生の私は、美咲とまた親友に戻りたいと思っている。一方、今はいない中崎くんのことと忘れない。ある日、中崎くんのお兄さんが話しかけてきた。そして、私の運命が変わり始める。黄昏症候群（<http://ip.tosp.co.jp/innovembersara>）との重複投稿です。

ブログ。(前書き)

携帯から読みやすいように改行が多めとなっております。ご了承ください。

プロローグ。

私は、罪を犯した。

起きている時はそのことから目を背けていられるが、夜布団に入り目をつぶると、二人の姿が脳裏にフラッシュバックされるのだ。

美咲と、中崎くんの姿が。

すると私は眠れなくなる。特に美咲は、最近頻繁に私の頭に出てきた、夢の中にまで。

時計の針がカチカチ動く。眠れないときに限って、その音が気になってしまう。

そうして夜が更けてゆく。

第1話 憂鬱な朝。

暗闇に浮かび上がった建物、その屋上に人影があった。ここはどこなのか分らない。周りには誰もいなく、冷たい風が草木を揺らして音を立てていた。人影の顔は見えないはずなのに、何故か私はそれが中崎くんだと分かっていた。

「中崎くん、駄目！」

私は叫んだ。人影がふらふらと屋上の縁へ近付いてゆく。既につま先ははみ出ていた。

地面へ吸い込まれるかのように、中崎くんが落ちていった。ぐしやり、と身体のひしゃげる音と共に鮮血が飛び散る。顔を覆いたくなるような光景なのに、私は脇目もふらず仰向けに倒れている中崎くんに駆け寄った。

「中崎くん……」

つぶやくと、つむっていた中崎くんの目がいきなり見開かれた。憎悪に燃えた瞳、そう感じた。そして私をまっすぐ見ながら、口を開いた。

「お前のせいだ！」

空間が歪み、私の意識は遠のいていった。

* * *

飛び起きると背中にべったりと汗をかいていた。息が乱れている。カーテンの開かれた窓からは明るい陽光が差し込んでいて、あれが夢だと分かり私はほっと息をついた。

私は目をこすると、枕元にある時計に目をやった。六時二十七分、アラームがなる三分前だ。けたたましい目覚ましの音に起こされるより目覚めは良いが、やはり今日も軽い吐き気がする。

布団に横になったままあくびをしながら伸びを試みる。しかし頭は全く覚醒せず、私は掛け布団をあげまで引き寄せた。瞼を閉じると頭がぼうつとしてきて、心地よい眠気に襲われる。

明け方に一度目が覚めたせいか、二つの夢を見たことを覚えていた。一つは美咲と喋っている夢。彼女の長い髪も、目の下にあるほくろも手を伸ばせば届くほどの距離にあった。そしてもう一つが中崎くんの夢だ。彼の瞳が頭に焼き付いて離れない。夢の続きを見た、そう切実に願う。もちろん美咲の夢をね。中崎くんの夢の続きなんて絶対に見たくない。

うとうとし始めたとき、時計が大音量で鳴り響き私を現実の世界へと引き戻した。目覚ましを止めて仕方なく布団から起き上がると少しめまいがした。これも寝不足のせいだろう。最後に時計を見たのは三時半頃だっただろうか。

美咲も私の夢を見ることはあるのかな、とふと思った。学校で彼

女とすれ違う度、私の心はちくりと痛む。どうして同じ高校に入学してしまったのだろう。違う高校ならば、もう会うこともなく美咲なんて忘れられたのに。

丈の長いパジャマのズボンを引きずりながら、部屋を出て裸足で廊下をぺたぺたと歩く。突き当たりのガラスがはめ込まれたドアの向こうには、台所とローテーブルの置かれたリビングがある。中の様子を横目で見ながら、私は手前のトイレに入った。

芳香剤の匂いが強すぎるトイレは、私の吐き気を増長させる。なのに何だかここから出たくなって、用を足した後もしばらくの間、私は便座に座っていた。

リビングのドアを開けると、香ばしい香りが漂っていた。入ってすぐの台所には母が立っている。おはよう、などという挨拶をするのは何だか照れくさい、代わりに、

「めちゃくちゃ眠いー」

と口に出す。母は振り向いて、

「今、パン焼いているから」

と言った。血色の良い肌にはつちりと開いた瞳、眠気のかけらもない顔だ。朝に強い人。私だって昔はそうだった。中崎くんと美咲の夢を見るようになるまでは。

母の横をすり抜けて顔を洗い、タオルでごしごしと拭く。袖をめくり上げていなかったので、少しパジャマが濡れてしまった。眠気まなこのまま冷蔵庫の扉を開けたら、扉の角が額を襲い、思わず声を出す。

「痛っ」

そんな私を見て母は軽やかに笑った。その時、間近にあるオーブンレンジがチンと鳴りパンが焼き上がったことを知らせた。額をさすりながらコップに麦茶を注ぐ。そうしている内に、母はパンをお皿に移し替えてくれていた。

私は再び冷蔵庫を開け、マーガリンを取り出して銀色のバターナイフで食パンに塗る。食パンの上のマーガリンはあっという間に溶けてゆく。

私はテーブルの前に座り、テレビのチャンネルを換える。ブラウン管には、さっきまでの堅苦しいニュースから一変、上品なドレスを身にまとって笑顔を浮かべた芸能人が映っている。

テレビに視線を向けたまま食パンを一口かじってみるが、どうも入っていない。口に入れる度、高い吐き気の波がやってくる。食べるペースの遅い私に母は気づき、濡らしたふきんをテーブルに持って来ながら、

「食欲ないの？」

と訊いてきた。私は食パンを口に含んだままこくりとうなずいた。

「でも、今日体育あるんでしょ？ 半分くらい食べられたら無理しなくても食べた方が良くないよ」

吐いてもいいのかよ、と心の中で毒づく。

その時、壁にかけてある時計が『エリーゼのために』を鳴らした。滑らかなピアノ演奏、七時の到来だ。あと三十分で私は家を出ない

といけない。そういえば、中学一年生の頃、休み時間に音楽室にあるピアノで美咲がこの曲を引いていたな。たどたどしくも、綺麗なメロディーだった。

だから、余計この音楽が嫌いなんだ。

どうにか半分ほど食べると、私は自分の部屋に戻る。学校の支度を始めなければいけない。はあ、憂鬱だ。乱れた布団の真上にかけてある制服をとって床に置き、パジャマを脱ぎ捨てる。そしてシャツを羽織り、第一ボタン以外を留める。入学当時は第一ボタンも苦勞しながら留めていたが、次第にルーズになってゆくのだ、みんな

ふと美咲の姿が頭をよぎった。あの子は、第二ボタン辺りまで開けていたなあ。髪も、いつのまにか茶色くなっている。本当は、校則違反。しかしきちんと守っている生徒はなかなかいない。私はというと、未だに髪も真っ黒だし、というか中学生の頃から見た目が変わってないしで、何だか置き去りにされたようだ。しかし美咲は随分変わった。

そこまで考えたところで慌てて首を振った。考えたら駄目だ、だって。

もう、彼女は親友じゃないんだから。

第2話 登校風景。

朝の電車は混んでいて身動きがほとんどとれない。さぞかし空気は、濃厚な二酸化炭素に支配されていることだろう。出来ることなら乗りたくない、しかし乗らないと学校にはたどり着かない。

隣には太った中年の男性、額にかいた汗を格子模様のハンカチで拭いている。見ていて気持ちが悪かった。人に押される度、一つにしばった髪の毛束から、中途半端な長さの髪が数本落ちてくる。私はため息をついた。

窓の外を流れる景色はどれも無表情だ、何の感情も沸いてこない。
ビルも。家も。人も。

中学生の頃は、電車通学に憧れていたっていうのに。とはいえ、いつもは自転車通学だ。今日はたまたまタイヤがパンクしていて、電車に乗らざるを得なかった。

突然、ブレザーのポケットに入れてある携帯電話が震えた。私は携帯電話を取り出し、ディスプレイに目をやる。機種変更したばかりの、新品同様の真っ白なケータイ。

新着メール：あっちゃん

と表示されていたので、私は周りの人に見られないよう片手で画面を覆うようにしながら、メールを開く。

本文を見て私は動揺した。私はそんなの聞いていない、あやうく携帯電話を落としそうになる。

『今日朝練あつたのにどうして来なかったの？』

次の駅を知らせる車掌の声がいつもより耳障りに感じた。

朝練だなんて聞いていませんよ、絶対。脈が速まってくるのは、彼女の顔を思い出したからだ。私は卓球部に所属している。中学生から続けてきたから、少しだけ腕には自信があつた。しかし、やはり自分より上手い人というのはいる。

美咲も、その一人だつた。

卓球は上手だし何よりもしつかり者だから、一年生の部員の長、学年部長に任命されていた。先輩との交流はあまりないので、今日の部活もきつと一年生だけの自主的なものだろう。

私が食パンを食べている頃、私を除いた一年の女子部員八名はあのカビ臭い卓球室でプレーしていたのだ。

電車が止まり、その反動で右隣に立つ中年男性が私の足を踏む。

「失礼」

その言葉と一緒に唾が飛び、私の頬にかかった。すぐさま頬をこする。嫌悪感でいっぱいになり、だから私は何も言わずにそっぽを向いてやった。

さて、私は返信をしなければいけない。光るディスプレイを見つめ、本当のこと　そんなの聞いていないよ　を打ったが、どうしても送信する勇気が出なかった。親指に力をいれ、消去を選ぶ。

『消去しますか？』

過去もボタン一つで消去出来たらいいのに。心の中だけで自嘲気味に笑った。

結局、『ごめん、寝坊しちゃった』という文面を送信した。携帯電話を閉じると、胸の前で両手で包み込む。携帯は少しだけ温かくなっていた。襲ってくる感情の波に歯をくいしばって耐える。

部員に朝練のことを伝えるのは、学年部長の役目だ。それなら、何故美咲は私に教えてくれなかったのだろうか？ 本当は分かっている。

でも、そこまで避けられているとは思っていなかった。携帯電話にぶら下げた青いイルカのストラップが、異様な存在感を発している。中学三年生のときに買った、美咲と色違いのストラップ。

車掌のアナウンスにはつとした。次が、私の降りる駅だ。私はどこまで後悔を引きずれば気が済むのだろう。右手にこぶしをつくり自分の頭を軽く叩いてみた。

すると例の中年の男性は怪訝そうな目つきで私を見る。さすがにちよつと恥ずかしくなり、口を強くむすぶと通学バッグを肩にかけ直した。

駅は行き交う人で溢れかえっている。この光景を見る度、人ごみに紛れてしまい自分の存在が薄くなってしまうようで、くらぐらする。しかも私は背が小さいのだ。感じてしまう威圧感。

だから私はいつもよりしっかりした足取りで、歩く。確か、学校は駅から徒歩十分ほどだ。

駅から離れてゆくにつれ、通行人も少なくなる。途中、路上に止められた車のウィンドウにちらりと目をやる。映るのは、少し猫背

で冴えない自分の姿。背筋を伸ばすよう気をつけているんだけどなあ。こんな風に他人から見られているなんてサイアクだ。

私は背筋をぴんと伸ばし、脇目もふらずに歩く。以前にも電車で通学したことがあるのだが、この時間帯は同じ学校の人と出くわす可能性が大きい。今も、数メートル先に同じ制服をまとっているかはるかに私よりスカートの短い女の子が歩いている。

賑やかな駅前通りを過ぎると校舎が見えてきた。大きな横断歩道を渡ると、同じ学校の生徒が沢山いた。すぐ目の前に歩いているのは柔らかそうなくせ毛の髪の女の子、きっとクラスメイトだ。でも声をかけるのは恥ずかしい、私は歩く速度を遅めた。校門をくぐったちょうどその時、

「希里ちゃん？」

と誰かに私の名前を呼ばれた。立ち止まり辺りを見渡すと、校門の近くから女の子が私の方へ手を振って寄ってくる。目を細めてみるが、私は視力が悪いのでそれが誰だか判別出来ない。間近まで来たところで、やっと誰なのか分かった。

「おはよー。久しぶりだね」

山田さんは並びの悪い歯をのぞかせて言った。

「うん。同じ学校なのに合わないよね、意外と」

「元気だったあ？」

顔に浮かべた笑顔がひきつりそうになる。私は山田さんと一緒に

生徒玄関に向かいながら、

「まあまあ、ね」

「そつかあ。あ、そういえば希里ちゃんメアド変えた？ 送ってもエラー出るんだけど」

彼女はくりくりした瞳を向けてきた。私は目をそらしてローファ
ーを脱ぎながら、

「あ、ごめん。教えてなかったっけ」

と、さもうつかりしたかのように言った。もちろん演技だ。

「聞いてないよ。後で教えてね」

私は適当な返事を返し、げた箱を開けた。汚れた上履きを取り出すと靴底についた砂がぱらぱらと落ちる。すぐ先には、既に上履きに履き替えた山田さんがいた。私はちよつと急いで上履きに足を入れる。

私の隣を歩く山田さんとはとても可愛い。こぼれ落ちそうな大きな目に小さな口、まるで小動物みたいだ。しかし、モテるかといったら、それは絶対じゃない。これまた可愛い声が私の耳に入ってくる。

「今、うちに空メール送って」

抜け目ないな。私は観念し、片手で携帯電話を開くと空メールを送る。すぐにおどけた調子の着メロが鳴った。山田さんは通学バツ

グを開き、赤くて丸みの帯びた携帯電話を取り出した。

「ありがとう」

山田さんはメールを確認すると笑みを浮かべ言った。可哀想な子、と少しだけ思った。階段を上りきると、うつすらと汗をかいていた。無理もない、教室は四階なのだから。

山田さんはじゃあね、と短くいい左に曲がる。この私よりも長いスカートがひるがえった。私は山田さんの後ろ姿を見届け、自分の教室へと向かった。

第3話 教室という箱

教室に入ると何人かが私に視線を向けたが、自分には関係がないと判断したのか再びお喋りにふけた。

しかしそうでない人もいる。自分の机に通学バッグを置いた時、髪を二に結んだ女の子が仲間の輪から抜けてこちらに歩いてきた。私にメールを送ってきた卓球部のあっちゃん。ふくよかな身体をひねりながら、狭い机と机との間を通り抜けてくる。

「希里、どうしたの？」

とあっちゃんは始めに言った。

「寝坊だよ」

メールでも言ったじゃないか。私はバッグを開け、五冊ほど入った教科書やノートなんかを取り出した。

「うん、だけど……本当に聞いてた？ 学年部長から」

私の手からノートが滑り落ちた。パタンという音が響く。私は腰を曲げて床に落ちたノートを拾い、何気ないふうを装って訊く。

「え、どういう意味？」

「うーん、何か、希里って美咲ちゃんのこと……」

あっちゃんは語尾を濁す。

「……何」

私は続きをうながす。あっちゃんは言いづらそうな様子で、しかし決心したのか小声で言った。

「避けてるように見えるからさあ」

耳の奥がきーんと鳴った気がした。私は笑って否定する。

「そんなことないよ、全然」

「そう？　じゃあ、明日も朝練やるから来てね」

そう話を切り上げると、あっちゃんは自分の所属するグループへ帰ってゆく。私じゃあ、ない。

避けているのは、美咲の方なのに。

バッグを机の脇にかけると、教室の中を見回し『自分のグループを探す。しかしどこにも見あたらなく、血の気がひくような感覚に襲われた。』

まさか、いや、私は何もしていない。自分を落ち着かせようと席につき、生ぬるい机に顔を突っ伏した。何だか私、まるで友達のない子みたい。だからって本を読んだりするのは、もっとそれらしく見えてくる。

携帯電話をいじろうかなと考え始めた時、背中に軽い衝撃を受けた。私は顔を上げて振り向いた。

「びつくりした？」

私の所属するグループの三人が、笑顔を浮かべてたたずんでいた。

「まあ、ね」

自分の声色は淡々としていた。大抵のことでは私は驚かない、その心に決めていたから。

私の所属するグループは、化粧の濃いクラスでもリーダー格の子、大人しいが運動神経の良い卓球部の子、頭が良いのにふざけたり冗談ばかり言う子、そして自分、で成り立っている。どうやってこのメンバーになったかという、席が近かったり同じ部活だったりで、趣味も考え方も全く合わない。

でも別に不満はない、そこそこ楽しいから。

「トイレ行ってたからさー」

聞いてないのに彼女たちは説明し始める。私はその言葉を軽く流し、一番気になっていることを尋ねてみた。

「朝練、どうだった」

「ああ、中崎先輩と伊田先輩も隣の卓球台でラリーしてたよ」

卓球部の子、ナツエが爪をいじりながら答えた。中崎、と聞き私の胸がにわかに波立つ。別段珍しい名字でもない、

「そんな人いたっけ」

と私は首を傾げてみた。そしたら男子の二年生だよ、と教えてく

れた。中崎先輩の方はなかなかカッコいい、とも。

「もしかしてさー、中崎先輩って人のこと、好きなの？」

すかさず冗談好きが口を挟む。女子高生というものは、総じて恋愛話が好きなんだな。

「まさかっ！」

しかしナツエの耳はあからさまに赤くなっている。

「……マジなんだ」

と尋ねた本人も驚いた顔で呟いた。恋に興味があまりなさそうな子だったから、これには私もちょっと驚く。一斉に質問しだす仲間達、それは私も例外ではない。

男子の部員とはだいたいプレーする場所が分けられていて、日に暑さがつのってくるこの季節になっても一年男子はともかく、先輩となるとほとんど顔が浮かばなかった。私が入部してもうすぐ二ヶ月だ。

恋愛話も盛り上がってきた頃、予鈴が鳴ったとほぼ同時に担任が教室に入ってきた。口数が少なくなついでに髪も少ない、英語を受け持っている先生。ちなみに年齢不詳。

生徒達はまた後で、などと言葉を交わして渋谷席につく。私の席は窓際で、しかも後ろの方なのをいいことに、例え授業中でも窓の外をぼんやりと眺めることが多かった。

携帯電話が振動した。私は連絡事項を話す先生をちらちら見ながら、見つからないよう机の影で携帯電話を開いた。あっちゃんから

だった。

『今日は体育館で試合やるって』

とメールに書かれてある。斜め前の席に座るあつちゃんに視線を向けると、向こうも私の方を見ている。目が合うと、いたずらがばれた子どものようにニヤリと笑った。私は心の中でつぶやいた。

教えてくれて、ありがとう。

私が卓球を始めたのは、実は美咲の影響である。中学校に入学し、初対面ばかりのクラスで一番始めに話した女の子、それが美咲だった。私より一つ前の席で、後ろを振り向いて、

「よろしくね」

って言うてくれたっけ。あの頃は髪も肩辺りまでしかなく、色素の薄い髪の毛がとても綺麗だと思った。

美咲は小学校卒業と同時に父さんの仕事の都合で引っ越し、この地にやってきたらしい。だからこの中学に知っている人はまったくいなくて、私の方も新しいクラスに親しい人は一人もいなかったから、私達はだんだん親密になっていった。あれは、四月の終わりだったと思う。

「希里ちゃん何の部活に入る？」

美咲がそう訊いてきた。部活は全員加入しなければいけない。分からないなあ、と答えると美咲の瞳が輝いた。

「じゃあ、一緒に卓球部入ろうよ。あたし、小学生の時卓球部だった」

たの」

卓球部、地味だけど楽しそう。私は二つ返事で承知し、入部することになった。

そうして卓球部に入っても、私はなかなか上達しなかった。美咲はさすが小学生の頃からやっているだけあって、女卓の一年の中では一番始めに下回転サーブが出来るようになった。それに対して私は、フットワークやスマッシュについて顧問の先生に怒られるばかり。終いには補習なるものまでさせられた。嫌で嫌で、何度も辞めたくなった。

でも、美咲がいたおかげもあり私は卓球を辞めず、次第にラリーが続く楽しさや点を取れたときの快感なんかに気付いてしまつて、部活に入らなくてもよい高校生になつてまでも卓球を続けている。

いや、理由はそれだけじゃないんだ。美咲と同じ部活に入ったら、元の仲に戻るのではないかと密かに期待していたのだから。……そんなの、有り得ないのに。

チャイムが鳴り、朝読書の時間が終わる。私は全く本を読んでいなかった。机には最初と同じページが開かれている。

先生が教室から出ていくと、みんなはまたグループで固まつて喋り出す。私も席を立ち仲間の元へ行く。沈んだ気持ちを晴らすため、私はいつもより高いテンションで面白いことを言つてみんなを笑わせた。

第4話 テーブルテニス。

放課後、三々五々にクラスメイトは席を離れる。

「部活頑張つてねー」

先輩に恋心を抱いているらしいナツエ以外の友達は何部に入っていない。なので他の仲間は手を振って教室から出ていった。私の所属するグループ。遠くから見ると、何だか不思議な気持ちだ。

私は後ろにあるロッカーの鍵を開け、デイズニールランドに行った時に購入したお土産が入っていたカラフルな袋を取り出し、自分の机に置いた。窓の外を見ると、サッカー部がボールを蹴っていた。太陽に目がくらむ。卓球は室内スポーツなのが救いだ。

廊下側の席の女の子が扉を閉める。教室にはまだ女子数人が残っていて、それは全員、部活のために着替える人だ。この学校には何故か更衣室がない。だから、掃除が終わると男子は退散、というのが暗黙の了解だった。

袋から体育着を出してすっぽりとかぶる。みんなも真剣な顔をして着替え始めている、この時だけは異様な静けさだ。

「やだー、ボタンとれない」

声のあがった方を見ると、バスケット部の派手な女の子がYシャツを脱ぐのに苦戦している。その光景に私は無性に腹が立った。

馬鹿じゃないの？ 何を言っただって、どんなにもがいたって、駄目な時は駄目なんだから。

苛立った気持ちのまま着替え終わると、私は髪の毛のゴムを取って腕に通し、薄っぺらい百円シヨップに売っていたくしでとかして髪をしばり直した。あっちゃんが体育着の裾をハーフパンツの外に出しながら、こちらへ寄ってくる。

「希里、体育館まで一緒に行こう」

「うん。ちょっと待って」

通学バッグから靴下を出す。くるぶしソックスというやつだ。机に手をつき、片方ずつ紺ソックスを脱ぎ、くるぶしソックスに履き替える。ゴムの後がくつきりついていて嫌なのだけれど、紺ソックスのまま部活をやりとみんなから浮いてしまふ。開いたままのバッグに紺ソックスを突っ込み、脇にかけてある体育館履きの入った青い袋を手を持った。

あっちゃんはチョークの粉が落ちた黒板の脇を通り抜け、クリアム色の戸を開ける。ふとあることを思い出して私は振り返った。もう教室には私達しかいない、でも私のグループに所属する卓球部のあの子はどこへいった？ ナツエの机の横にはまだ体育館履きの袋がかけられている。

廊下に出ると、思ったよりたくさんの人達、いや、グループ達がたわむれていた。騒々しい。何となく後ろを向いた時、私は発見してしまった。ナツエがトイレから出たところを。あっちゃんとナツエの仲はあまり良くない。だからいくら同じグループだとはいえ、あっちゃんから離れることも、一緒に行こうと誘うことも出来なかった。

私はナツエと目が合わないように前を向き、体育館履きを引きずるあっちゃんの後を黙ってついて行った。

体育館は熱気がこもっていた。整然と緑色の卓球台が三台並んでいる。もちろんこれだけじゃ足りない。端であぐらをかいている先輩達にあいさつをして、奥にあるほの暗い倉庫に入ると、一年生がタイヤのついた卓球台を二人一組になって運び出しているところだった。

「希里ー、どうして朝練来なかったの？」

畳まれたマットの上に腰掛けている女の子が尋ねてきた。

「ごめんごめん」

申し訳なさそうに謝る。演じるのは得意だと、自分でも思う。

次に卓球台を運び出そうとしているのは美咲だった。いくらタイヤがついているとはいっても一人じゃ重すぎる、私は手伝おうと近寄った。すると、美咲は隣にいるあっちゃんに声をかける。

「温美、そっち持って」

火傷をしたみたいに胸がひりひりした。運ぼうとして出した手をひっこめて美咲を見たが、目を合わせないつもりらしく、顔をそらした。

「月岡、邪魔」

倉庫に入ってきた一年男子が立ちつくす私にふてぶてしく言い放つ。月岡、というのは私の姓。美咲に良い名字だね、と言われて嬉

しかった記憶がある。私は体育館の様子を見て、もうこれ以上卓球台はいらないだろうと判断した。

倉庫から出ると後ろから肩を叩かれた。ナツエが微笑みを浮かべている。

「来て」

そう言って背を向け歩き出す。私は仕方なくついてゆく。女子の先輩とは正反対の端っこに、男子の先輩が固まっていた。そこからかなり離れたところで立ち止まり、小さく言う。

「あの人。中崎先輩」

「どの人？」

「あの、左の方に座ってる。あ、今ボール触ってる」

分かった。眉毛がきりつとしていて、鼻が外国人並みに高い二年生。そして、内心ほっとした。

中崎くんとは、全然違う顔だから。名字が一緒なだけだ、私は確信した。

「確かにカッコいいね」

と言ってあげる。ほら、嬉しそうな顔。恋する乙女、か。私だって、恋くらいしたことはある。ただ、告白するだのされただの、その辺りは私にとって未知の領域だ。

「そこの二人、遊んでないでネット出して」

いつの間にか部長が来ていて声を飛ばす。私達は返事をし早足で倉庫に行きネットの入ったかごを取りに行った。

部員は一枚の紙を覗き込む。マスに部員の名前が書いてある、試合表だ。普通は同じ学年同士で試合をするはずなのだが、この紙には女子一年、男子一年、そして男子二年の名前が書いてある。無理もない、男子二年は二人しか部員がいないのだから。

三試合目に、中崎先輩とやらとぶつかる。そして、五試合目は。

美咲。

美咲は他の部員と笑顔で何か話したあと、端に立てかけてある黒い長方形のラケットケースからラケットを取り出した。グリップを握り器用にくるりと回す姿に、つい見とれてしまう。

私はラケットを部室に置きっぱなしのことに気が付き、もう一度試合表を見て一試合目は出る番ではないことを確認すると、誰にも気づかれないように体育館の隅を歩き出口に向かった。

出てからは小走りだ、だって部活にラケットを忘れてくるなんて情けなさすぎるではないか。体育館履きを履いたままだから先生に見つかったら怒られる。一段飛ばしで階段を降りる私を、すれ違う生徒が驚き顔で見ていた。体育館履きをきゅっとならし、階段が途

切れたところで曲がる。廊下は暗く、蛍光灯が点滅しているところもある。ひっそりと並ぶ戸の奥は、どれも今は使われていない教室なんかで、部室も元は教室だったと聞いている。

肩で息をしながら、手書きで『卓球室』と書かれた紙が窓に貼つてある戸を開ける。狭い部室には、木がところどころ腐っている卓球台が二つ置いてあり、壁一面を支配している棚には私のラケットケースだけが寂しげに置いてあった。

しっかりと胸に抱え出て行こうとした時、棚の片隅に何やら色とりどりの小さい文字が並んでいるのが目についた。

近づく、ああ、これは卓球部女子、通称『女卓』の名前が書いてあるのだと分かった。一年女卓の七つの名前が羅列している。もう一つ分かるのは、美咲の書いた文字だっていうこと。丸くて小さいのに漢字だけはやけに大きい、文字。赤色でみさき、と書かれた横には、

『1番のトラブルメーカー！ みんなゴメンね（＜人＞）』

だって。急いでいるくせに、私は全てのコメントに目を通す。あつちゃんの名前の横にはこう書かれている。

『天然ちゃんキター（。 。 ）ワラ 優しくていい子だよ』

ちょっと笑えた。ピンクの文字、あつちゃんに似合っている。最後に私は、一番下の黒い文字を黙読した。

『きり マジメな女の子 めっちゃ卓球うまいよ』

目頭が熱くなる。私は齒をくいしばり、逃げるように部室を後にした。来た時と同じように小走りで階段を上がった。途中腕で乱暴に目をこする。褒めたりなんかしないでよ、音符マークなんか使わないでよ……。

私に希望を抱かせないでよ。

「あつ、希里。どこ行ってたの？」

体育館に入るなり他の部員の横に座ってタオルで汗を拭いていたあつちゃんの声をかけてきた。ちょうど試合が終わった後なのだろう、頬が紅潮している。

「ラケット。取りに行ってたの」

ラケットケースを掲げて無理に笑う。

「マジで？ 希里ウケるしー」

私は苦笑した。こういう冗談にうまく反応できない。いつからだろう、こうやって人と接することに緊張するようになったのは。美咲に避けられ始めてから、のような気がする。

美咲の姿を探す。いた、女子二年と試合をしている。背中を向けているので顔は見えないが、動く度に舞い上がる茶色い髪につい見とれてしまう。

「月岡さん」

振り返ると、卓球台の横にある椅子に座った女子一年が得点板を持って私を見ていた。向こう側には女卓の先輩がボールを台の上でもてあそびながら立っている。私の試合相手だ、急いで用意する。

「よろしくお願いします」

頭を下げる。先輩も間延びした声で同じことを言い、さあ、試合が始まる。

試合中、すみませんと何回か謝ることがあった。それはたいいてい、ネットにボールがすれてぼろっと相手のコートに落ちて点を取った時や、エッジと呼ばれる台の端にボールがぶつかって跳ね、先輩が打ち返せなかった時、などだ。ずるい勝ち方が得意なんだよね、私。

結局私が勝利した。休む暇もなく他の人と二試合目、一年男子。高校生になってから始めたのだろう、勝つのは簡単だった。そして少し休んだ後、三試合目が始まる。相手は、中崎先輩だ。

第5話 運命の、試合。

思ったより背が低く、華奢な体型をした中崎先輩は左手にラケットを持っている。左利きと試合をするのは初めてだ。

私はラケットを台に置き、体育館履きの紐をきつくしばる。先輩に向き直り、よろしく願いますといつもあいさつをしようとした時、

「もしかして、相田中学校だった？」

先輩が低い声で質問してきた。

「そうですけど」

「フルネームは」

「月岡希里、です」

「……そうか」

私のことを知っているのだろうか。続く言葉を待っていたが、中崎先輩はぼそつとあいさつを口にしただけだった。

試合が始まってすぐに、実力の違いというものに気付いてしまった。男の先輩つて、こんなにも力が強いんだ。どんどん先輩に点数が加算されてゆく。あせると余計ミスが多くなり、ラケットを投げ出したくなった。こめかみを汗が流れる。

ちらりと得点板に目をやると、十対三。後一点入れられたら、負

ける。今日の試合は、夏の大会に出場するメンバーを決めるものでもあるのだ。私は大会に出たい。

だから、なるべく負けたくないんだ。

もし入らなかつたらと思うと、スマツシュもできない。私は今完全に守りの姿勢だ、飛んでくるボールをただ打ち返すだけ。一回くらは、負けても大丈夫かもしれない。しかし、それは私のプライドが許さなかつた。

ラリーが続く。回転はかかっていない、いつスマツシュを打ってきてもおかしくなかつた。ボールが台に当たる音が響く。

だんだん、中崎先輩の打つボールの威力が増してきた。後輩相手にムキになっちゃって、少しは手を抜いてくれたつていいのに。先輩が色々なところにボールを打ち込むので、私は左右に動き回る。いい加減、息がきれてくる。

その時、先輩が大きな動作でボールを卓球台に叩きつけた。

スマツシュだ。

まっすぐ向かってくるボールに私は思わず目をつぶる。後ろに下がりが、ラケットを正面で構えた。バックハンドで受け止めてやる。

しかし次の瞬間、私は左目を押さえていた。

だいたい色のボールが床をバウンドする。私はしゃがみ込んでいた。

「……ったー」

自然と声が漏れた。うつすらと目に涙が浮かんできた。審判をしていた女の子と中崎先輩が急いで駆け寄ってくる。

「希里、大丈夫？」「ごめん、大丈夫か」

二人の声が重なる。私は声が出なかったものの、心配されるのはあまり好きではないので大きくうなずいた。私の異変に気付いた部員が寄ってくるのが片目からうかがえる。試合を始めようとしていた美咲も、こちらを何ともいえない顔で見ていた。近寄ってきた部長が指示を出す。

「中崎くんは月岡さんを保健室に連れて行って」

空気を揺るがす冷たい声。私だって分かっている、別に心配なんかしていないんだ。

「立てるか？」

心配げな中崎先輩の声が頭に降りかかる。片手で左目を押さえたまま、卓球台につかまって立ち上がり私は先輩の後ろについて行った。

みんなの声が遠ざかってゆく。緊張した全身の筋肉がふつと緩んだ。私は中崎先輩の数歩後ろを、目を押さえたまま歩く。もう涙はかわいているけれど、ボールがヒットした方のまぶたがじんじんと脈を打っていた。

「ごめんな」

先輩が振り向いて言った。男の子、しかも先輩に謝られるのはくすぐったい。私は笑って首を振る。

先輩が保健室の扉を開ける。回転式の椅子に座った白衣を身にまとった先生が振り向いた。先輩が事の次第を説明すると、椅子に座るよう促される。

目を診せると、先生と私はいくつかの質問と応答を繰り返した。受け答えからそれほど怪我ではないと判断したのか、先生は手慣れた動作でビニール袋に氷を入れて口をしっかりとしばり、

「とりあえずそれで冷やしておきなさい」

と私に手渡した。そして少しベッドで休んでもいいから、と言に残し、先生は保健室を出ていった。

「じゃあベッドに横になる？」

男の子からベッド、という単語が出てきて少し恥ずかしくなり私は断った。それに、ほのかに消毒液の臭いがするしわ一つないベッドに横になるのは何だか気が引ける。

「体育館、戻っていいですよ」

こうやって側で立っていられるのは気が休まらない。

「いや」

そう言って先輩は目をそらし、机に置いてある本を手にとったり

した。

「でも、落ち着かないんで」

氷の入った袋はあまりにも冷たくて、押し付けていると感覚が麻痺してくる。私の心も麻痺し始めているのかもしれない。

「聞きたいことがあるんだ」

先輩はまっすぐ私を見ていた。だから私も先輩の目を見据えて、

「何ですか」

と訊いた。

「中崎弘樹、って知ってるよな」

「……知ってます」

「だよな」

忘れてくても忘れられないその名前。フルネームを漢字で書ける男の子は、後にも先にも中崎くんだけだ。そこから先は聞かないでも分かる。

「俺、弘樹の兄貴なんだ」

私は目をつぶる。押し当てた袋の中の氷が、私の体温で溶けてきていた。明るい蛍光灯も、窓から射す陽光も、今の私にとっては意味をなさない。

「……何で、私のこと知ってるんですか」

ゆっくりと目を開けながらかすれた声で訊いた。私のすぐ横に、中崎くんのお兄さんがいる。やはり、過去からは逃げられないのだろうか。先輩の視線を感じる。

「卒業アルバム」

私は深く息を吐いた。写真を撮ったのはちょうど前髪を切りすぎた直後で、おまけに写り具合がひどい。卒業後に卒業アルバムを見たのは一、二回だけだった。

中学生だった頃を忘れるよう努力をしていたし、何よりも美咲の照れくさそうな笑顔の写真が否応なしに目に入ってきてしまうからだ。

でも、卒業アルバムのどのページにも中崎くんの個人写真は載っていない。修学旅行の集合写真に小さく写っているくらいだ。

「今日、初めて気が付いた。今まで男卓と女卓が一緒に部活したことがなかったから。あれもいるんだな。ほら、誰だっけ」

私の口から言わせるなんて残酷だ。中崎先輩は私と彼女との間にあった出来事を知らないからだろうけど。

「……田島美咲、ですか」

「そう、その人。田島さんも卓球部だったんだな」

先輩は遠い眼差しをしている。私は何も答えなかった。ごめんなさいとでも謝った方がいいのだろうか。違う、とすぐさま思い直す。

そんな簡単なものじゃないんだ。私は半分ほど溶けた氷の入った袋を目から離し、膝に手を置いた。

「なあ、弘樹のこと……嫌いだったか？」

中崎先輩の声は震えていた。だから私はなるべく先輩の姿を見ないように、こぶしを作った手に目を落として言った。

「嫌いじゃ、ありませんでした」

本当だった。私は決して中崎くんのことを嫌いだったわけではない。

ただ、弱かったのだ。昔も、今も。
きっとこれからも。

「そっか。……サンキュ」

思わず先輩を見た。目が真っ赤、それでもけなげに笑みを浮かべている。私はこのままじゃ終われない。

「私、お礼なんて言われる立場じゃないです。私達のせいで、中崎くんは」

受け止めてほしかった。違うよ、って言って心に焼き付けられた烙印を消してほしかった。結局、誰かに甘えたいんだ私は。

「分かっているなら、何でもっと早くやめてくれなかった！」

机を叩く音がし、保健室に声が響いた。先輩の目尻から涙が一筋

流れる。私は言葉に詰まった。唇が小刻みに震える。男の子も泣くということに衝撃を受けていた。中崎くんも、泣いたりしたのだからか？

もう先輩と後輩なんて生ぬるい関係ではない。短絡的に言うならば、加害者と被害者の兄だ。

「もっと早くやめてくれたら、弘樹は死ななくて済んだんだ」

先ほどよりは落ち着いた声で先輩は言った。悲しみを必死にこらえてる様子だ。

その通りだと、自分でも思う。

第6話 消したいキオク。

そりゃあ、噂では聞いてましたけど。八の字眉毛で垂れ目、いかにも気弱そうな中崎くん。いじめとまではいなくても、よくからかわれていることは私も知っていた。

でも私には関係ないと思っていた節があり、同じクラスになっても別に何の感情もわかなかった、中学三年生の始業式。

私の隣の席だった。先生が話しているときも机に目を伏している男の子。休み時間になっても自分の殻にこもるように、見るからに小難しそうな本を読んでいた。

しかし、例えば英語の時間、教科書に載った対話文を隣の人と二人一組になって読まなければいけないとき。ぶっきらぼうな口調ではあったが、中崎くんは私の読めない単語の読み方をぼそと教えてくれた。

例えば理科の時間、プリントをノートに貼らなければいけないとき。

「のり持つてる？」

と訊いたら、筆箱から取り出して無言で私に渡してくれた。本当に小さくて些細なことではあるけれど、中崎くんを嫌いにはどうしてもなれなかったのだ。

でも、みんなは違ったらしい。

「中崎って暗くない？」

そう友達に尋ねられたことがある。否定はできない、私は同意した。まだ、この頃は安全だったのだ。この程度の陰口、学校という空間の中ではそこら中に充満している。

「あいつマジウザいんだけど。気持ち悪いし」

まだこれも大丈夫、普通の日常会話だ。

「確かにね」

と私は合わせておく。

「希里隣の席じゃん。どんな感じ？」

「数学の問題を教えてあげたりしても、お礼を言われたことがないね」

これくらいだ、私がちょっと不満なのは。でも、正直男の子の悪口にはあまり興味がない。私が陰口をたたくのは、大抵山田さんのことだった。けれど、これはまた別の話。

「なあ、中崎数学のテスト何点だった？」

少し柄の悪い、クラスではリーダー格の男の子が、卑下た笑みを浮かべて中崎くんに聞いた。

「教えねえよ」

彼はぼそつと答える。

「何だよ、ほら見せろよ」

無理やり中崎くんの手から解答用紙を奪う。点数を見ると男の子は大声で笑った。

「十八点かよ？ 俺より悪いじゃんか」

みんなに聞こえてしまっただろ、と私は思ったが女の子の点数公開よりは男の子のそれの方がまだ笑い話になる。クラスメイトの笑い声がちらほら聞こえてきた。こういう光景を見ると平和だなあ、と感じる。しかしぶち壊したのは、空気を読めていない中崎くんだった。

「俺のこと馬鹿にすんじゃねえよ」

笑いが止んだ。憎悪のこもった瞳で男の子のことを見ていた。これからどうなるのだろう。みんなもパフォーマンスを見るかのような目で中崎くん達に視線を向けている。

「あ？ 何だよその言い方」

男の子が細い目で睨みつける。しかし中崎くんはひるまなかった。

「お前よりは真面目なんだよ」

数秒の沈黙の後、男の子は吹き出した。

「何だそれ、自慢にもなんねえんだよ」

私もそう思う。真面目というのはときおり悪口を言われる一要素にもなりうるのだ。

中崎くんは席を立ち、乱暴に椅子をしまつと足で蹴った。お喋りに花を咲かせていた女の子達もその音に目をひかれる。そのまま、中崎くんは無言で教室を出ていった。

そんな一件があつた後、明らかに中崎くんに対するみんなの態度は変わった。もちろん、良い方ではなく。私も、今回の件で中崎くんがあまり好かれていない理由が分かった気がした。

でも、一人だけ一回も中崎くんの悪口を言わなかった人を私は知っている。

「中崎くんも、可哀想だよな」

同情的に言う、美咲。だから彼女の前だけでは私も本音を話せた。

「うん。確かにずれてるところはあるかもしれないけどさ、みんなもあそこまで言うことはないような気がする」

「だよなー」

二年生のときクラスが別れてしまつても部活ではいつも一緒だし頻繁に遊んだりもしていた。けれど、やっぱり同じクラスというのは良いものだ。

「中崎、明日の持ち物聞いてきてよ」

ある日、同じ国語係の男の子が言った。

「やだよ、俺昨日も聞いてきたじゃん」

「ネクラのくせに、そんな口聞いてんじゃねーよ。俺が連絡黒板に

書くからさ、なあ、いいだろ？」

一緒にいる他の男の子達が笑った。こういう光景を見る度、素直に言うことを聞いてればいいのになあ、と思う。でも、言っちゃうんだよね。

「ふざけんなよ。俺は絶対嫌だから」

そう吐き捨て、トイレへと逃げ込む。男の子達は口を歪ませて笑った。やっぱり、中崎くんはずれていると思った。

いつだっただろうか、中崎くんが一週間ほど学校を欠席したことがあった。クラスメイトは、

「ついに不登校なっちゃった？」

などと冗談めかす。しかし私は笑えない、だってそれは大いにあり得ることだから。

先日、決定的なことが起きた。

「中崎。この問題を解きなさい」

数学の時間指され、それは大して難しくない問題だったのに、中崎くんは銅像と化していた。

「分からないか？」

しかし中崎くんは耳まで真っ赤にしながら分かります！ と粘った。一向に答えは口から出てこない。こっそり教えてあげようかとも思ったが、あまりにも教室が静まっているので止めておいた。先生が助け舟を出す。

「これを移行すると、いくつになる？」

「……十八エックス」

「移行するんだから、記号が変わるだろう」

しかし中崎くんは押し黙ってしまったので、先生はため息をついて結局全て解いた。嫌な空気が教室を流れた。

この出来事自体は、すぐに忘れ去られることだろう。問題は、授業中先生が職員室へ忘れ物を取りに行ったときに起こった。

みんなが私語を交わし始める中、

「なあなあ」

と中崎くんの後ろの席の男の子が、背中をシャープペンシルで突っついた。

「何だよ」

「中崎さあ、あんな問題も解けなかったら入試とかヤバくないか？」

シャープペンシルをもてあそびながらも、私は会話に耳をかたむけていた。中崎くんのこと気がなるから、変な意味ではなくて。

「お前だけには言われたくないよ」

振り返っていた中崎くんはぷいと横を向く。

「心配してやってんのに。だから嫌われるんだよ、お兄ちゃま」

男の子は悪態をついた。つんつんと立ったその髪や整った眉毛は、中崎くんと全然違う。お兄ちゃま、というのは最近中崎くんが付けられたあだ名だった。噂によると、よくお兄さんの自慢話などを披露するらしい。だから、中崎くんは過剰に反応してしまったのだらう。

「ふざけんな」

いきなり席を立ち、男の子の胸ぐらをつかんだ。何かとみんなは一斉に目を向ける。

「おい、やめろよ」

学級委員が仲裁しようとするが、中崎くんはやめようとしなない。

「兄ちゃんを馬鹿にするな」

やっぱり、やっぱり何かがずれている。格好のつかないセリフだし、これじゃあ余計お兄ちゃまと呼ばれてしまうだろう。このもどかしい気持ちを、本人に伝えられたらどんなにすっきりすることか。

「大体、俺のどこが悪いんだよ」

そうつぶやいた姿は、可哀想というよりも滑稽だった。男がそん

な弱気を吐いてどうする、私は心の中で叫ぶ。

「全部だよ、お兄ちゃま」

傍観しているリーダー格の男の子が答え、くっくつと笑う。すると、

「もういい」

中崎くんは胸ぐらから手を離して席についた。丸まった背中がとても可哀想。ショックを受けてしまったのだろっな。胸ぐらをつかまれていた男の子は怒りの収まらない様子で舌打ちをした。

「あーあ、うざったいやつがいる」

みんなにも聞こえる声で、派手な女の子が言った。私は心拍数が早くなる。誰もが察知したと思う。

いじめが始まるのは時間の問題だ、と。

次の週、中崎くんは学校へ出てきた。顔色が目に見えて悪い。来なくていいのに、という声がいつ聞こえてこないか心配だった。そして美咲はどこまでもお人好しだ。

「風邪？」

思えば、ああいう男の子だったからこそ美咲は話しかけられたのかもしれない。中崎くんは、

「いや」

と視線をそらしたまま答えた。美咲は同情的な目を向けたままつぶやいた。

「……そっか」

「どうもな」

それは教室の喧騒にかき消されそうなほど小さな声だったが、一緒にいた私の耳に水のように染み渡った。

英語の時間、みんなより一足先に対話文中崎くんとペアになって読むのが終わった後、何を思ったのか唐突に言い出した。

「そういえば月岡さん、数学の小テスト九十三点だったんだってな」

「何で知ってるの？」

「田島さんと喋ってるの聞いたから」

他人のことにはあまり興味がない人だと思っていたのに。ページをめくる手を止めた。

「すごいよな」

付け足して笑みを浮かべる。私も笑い返したけど、心中は複雑だった。

褒められたら、君がいじめにあったときに私が苦しくなってしまうから。

第7話 二人の会話

気が付くと私は泣いていた。ひどい頭痛がし、ハーフパンツには斑点が出来ている。ここから先は、思い出したくもなかった。

「最初は、どんないじめだったんだ？」

保健室から外を眺めている中崎先輩が言った。

「勘弁して下さい」

「俺には知る権利がある。まだ、誰からも聞いていないんだ」

「それなら、美咲に聞いて下さい」

ずるい自分。けれど美咲は訊かれても絶対に言わないと思う。私なんかよりもずっと険しい位置にいたから。思えば、中崎くん的一件も私達の仲に亀裂が生じた原因の一つだろう。

いや、それでは語弊があるかもしれない。それ以前の出来事が問題で、それに伴って美咲との友情は壊れてゆき、そして中崎くんをいじめる側に回ったのだ。

「田島さんはどんな人？」

「優しい子です」

それは今も変わらない。なかなか卓球が上手くならない子には呆れるほど丁寧に教えてあげていたし、後片付けも率先してやってい

る。

「とりあえず、また話そう。そろそろ戻らないとヤバいし。ボールぶつけたのは本当に悪かった。弘樹のこと蒸し返したのも。けれど、他のやつらは終わったことでも家族にとっては忘れられないことなんだよ」

振り向いた顔は先ほどよりも少し穏やかになっていた。家族、という言葉が心にずしんとくる。

「……分かりました」

鼻をすすりながらやつとの思いで答える。先輩は深くうなずき窓枠から手を離すと、

「じゃあ、またな」

と保健室を出ていった。少し間を空け私はそつと戸から顔を出す。中崎先輩の後ろ姿が遠ざかってゆく。しかし彼は階段の前で立ち止まると、いきなり壁に顔を押し付け、かくれんぼの鬼が数を数えている時のような格好をした。背中が、震えている。

私は見たくないのに目を離せない。唇を噛みながら先輩が立ち去るのを、ただ、待っていた。

しばらくして私は体育館に戻った。こんな気持ちじゃ部活なんてやれない、早退するためだ。

「希里、大丈夫だった？」

あっちゃんがラケットで仰ぎながら寄ってきた。何だか、自分が

中崎くんのお兄さんと対話していたなんて嘘みたいだ。

「大丈夫。だけど、早退する。部長どこにいる？」

「えーっと、あれ、いないねえ。じゃあ学年部長に言って伝えてもらえば？」

一瞬、心臓が凍り付いた。気付いているんじゃないの？ 必死に目で自分の気持ちを伝えようとするが、あっちゃんは悪意のない笑みを浮かべているだけだ。仕方なくこう答えるしかなかった。

「うん……そうする」

美咲は顔にタオルをかけている。周りには私の苦手な派手な女の子達。何故あんな子達と付き合っているのだろう。どんどん自分から離れてゆくようだった。緊張しながら歩み寄り、

「美咲」

と声をかける。美咲は顔からタオルを取り私の顔を確認すると、かすかに表情が曇ったように見えた。思えば、高校に入って初めて自分から話しかけたような気がする。

「何？」

無表情な顔。それすらも無理しているのではないか。本当は返事なんかしたくないのではないか……。妄想はとどまることを知らない。

「あの、私早退するから、部長が来たら伝えてくれる？ 今、見あ

たらくて」

つかえながらも必死に話す。

「分かった」

と、美咲は目を合わせないまま答えるとまたタオルを顔にかけた。これ以上の会話を拒否しているかのように。周りにいる女の子達の視線が痛い。だから私は逃げるようにその場を立ち去った。

生徒玄関に行くと、自動販売機の前に見覚えのある女の子がいた。

「山田さん？」

ボタンを押そうと手を伸ばしていたその子は後ろを向く。やっぱり、正解だ。

「あれ、希里ちゃん。部活終わったの？」

「ううん。ボール目にぶつかっちゃったから、早退したの」

「そっかー。じゃあさ、これから一緒にジャスコ行こうよ」

「え、部活は？」

山田さんは確か茶道部だったと記憶している。

「今終わったところなんだあ」

屈託のない笑み、それが今はやけに鼻についた。

「でも、私怪我しているし」

「大丈夫だよ、全然腫れてたりしてないし」

この子は、本当に純粹というか、私の沈んだ声にさえまったく気づかないんだな。

「でも、今日電車で来たし」

「大丈夫だよー、歩いたって十分くらいだし」

彼女のあまりの鈍感さとしぐとさに、断るのが面倒臭くなった。

「じゃあ行こっか」

「うん！」

山田さんは床に置いてあった通学バッグを持ち、いかにも軽そうな足取りでこちらに歩いてくる。単純な人だ。それも当たり前かもしれない、だって、山田さんは私を友達と思っているらしいから。私も別に否定はしませんけど、ね。

山田さんがげた箱から大きなスニーカーを放り出すと、砂ぼこりが舞い上がった。女子高生でスニーカーというのはかなり珍しい。

「山田さんて何でローファーじゃないの？」

「中学生のときはみんなもスニーカーだったじゃん」

「そうだけど……」

別にスニーカーを履いているのを否定しているわけではない。しかし、切り替えというものをこの子は知らないのだろうか。ほとんど変わっていない私が言えることではないが、身だしなみなどには気を付けるようになった。山田さんは他の女子高生と比べると明らかに浮いていた。

「希里ちゃんと遊ぶのって久しぶりだね」

と言つて無邪気に笑う。私は自転車の鍵が入ったブレザーのポケットを探りながら適当に返事をし、しかし自転車で来ていないことを思い出す。

生徒玄関を出ると、生ぬるい風がスカートをめくり上げた。スパッツを履いていたから平気だけど、山田さんの方ははつきりと白い下着が見えてしまった。こっちが恥ずかしくなり慌てて目をそらして、駐輪場まで歩いてゆく。

山田さんは自転車の前かごに通学バッグを入れてサドルにまたがると、

「あちっ」

と声を出した。どうやら日に当たって熱くなっているらしい。ジヤスコは自転車で五分ちよつとのところにある。早歩きで歩く私の横を、自転車でゆっくりと走る山田さんがしきりに話しかけてくる。

「そついえばもうすぐテストだね。嫌だあー」

「うん」

「テスト勉強してる？」

「全然。山田さんは」

「結構しているよ。英語は一時間で、数学は一日三時間くらい」

「へえ、すごいね。でも山田さんは数学得意だから、勉強しなくても良いじゃん」

少しだけ皮肉を込めたつもりだった。勉強時間を言うのが自慢げに聞こえる私は、心が歪んでいるのかもしれない。数学『だけ』は得意なんだよね。

まっすぐ前を向いたまま角を曲がった。ピンクの背景にJUSCOと書かれた文字が目に入る。ふいに思い出した。中学三年生の頃、初めて山田さんと一緒にここに来たときのことを。隣には、美咲もいた。

「そつえば、中学生の頃一緒に来たことあったよねえ」

山田さんも同じことを考えていたらしい。しかしその出来事のとらえ方は、私とまるで違うと思う。

「田島美咲もいたよね」

彼女が低い声でフルネームで呼ぶのには、ちゃんとした意味がある。思い出すと切なくなる私と、忌々しくなる山田さん。その違いは歴然だ。

「前から訊こうと思っていたんだけど、美咲と喧嘩でもしたの？」

はたから見ても分かる。山田さんが美咲の悪口を言っているのを小耳に挟んだこともあった。

「喧嘩っていうわけじゃあないけど……。まあ、中に入ってから話そうよ」

山田さんが駐輪場に自転車をとめると、私達はジャスコに入つてゆく。冷房がききすぎていて寒いくらいだ。お店の並んだところにある座席に座り、昼休みのときに飲みきれなかった麦茶の入ったペットボトルをテーブルの上に置く。一口飲んでから、

「それで、何があつたの」

山田さんはテーブルの上に置いた携帯電話のストラップをいじっている。

「何かー、気が合わなかつたんだよね、結局さ」

何が『結局』なのか分からない。いらいらして麦茶を喉に流しながら、ペットボトルの飲み口をかじった。

「だって、美咲と山田さんあんなに仲良かったじゃない。何か合つたんじゃないの？」

言い方に熱を帯びてしまうのは仕方のないことだった。美咲ときくしゃくし始めたのは、この目の前にいるあどけない顔をした女の子が原因だというのに、そんな簡単に合わなかつただなんて言わないでほしかった。

無性に叫びたくなる、私達の仲を壊したのは何だったの？ って。

中学三年生のとき、中崎くん同様初めて同じクラスになった山田さん。好かれているのか、はたまた嫌われているのか私はまったく情報を持っていなかった。もし持っていたならば、なかなかクラスに馴染めない様子の彼女に話しかけることなどはしなかった。美咲にも耳打ちしていただろう。

「山田さんも、一緒に同じ係やろうよ」

と優しすぎる美咲が言ったのが、私にとっては運のつきだった。それから山田さんは私達にいつもまとわりついてきた。軽い人見知りをしてしまう私とは違い、愛想があり話しやすい美咲にはかなりなついていた、といっても過言ではない。

意外にも、美咲はそんな山田さんを好意的に思っていたようで、妹のように可愛がっていた。恋愛で例えたらまさに三角関係だ。

そんなこともあって、余計山田さんのことは好きになれなかった。

「私、やっぱり帰る」

そう言い放つと、山田さんは目を白黒させて呆気にとられた顔になる。私はいつもそうなんだ。心の中であれこれ考えるだけで、言語化ということをしてないから誰にも何も伝わらないのかもしれない。

自分の生き方に、私は、自信が持てずにいた。

「思い出したの。お母さん今具合悪くて、早く帰った方がいいから」

お母さん、ごめんなさい。嘘をつくのは苦手だったが、こう言う

しか手だてはない……と思う。

「本当？」

「本当だよ」

「でもさあ、まだ来たばかりだし、もうちょっと良いじゃん」

良くありませんから。そう思いつつも、

「じゃあ、五時までね」

言い負かされるのもいつものことだった。薬用のリップクリームを荒れた唇につけながら椅子に座り直す。

「希里ちゃんはさあ、最近どうなの。あの人と」

組んだ手の上にあごを乗せ、山田さんが尋ねた。私は言いよどんだ。真実を口にするのははばかれる。しかし嘘を言うのはやっぱり嫌だし、美咲のことを嫌っている山田さんなら大丈夫かもしれない。

正直に、言ってしまうのか。

「何か、避けられてるみたい」

笑ってはみたが余計に哀しくなってくる。気持ちをごまかすために私は前髪をいじった。

「マジで？ 最悪だねー、あんなに仲良かったのに。希里ちゃん、利用されていただけじゃない？」

これにはカチンときた。

「それはないよ」

「きつとそれ、気付いてないただだよ。そういえば中三の途中から、二人ともほとんど口きいてなかったもんね。うちと希里ちゃんは中三のときから仲良くなったけど」

頰杖をついて横を向き、ため息を一つついた。思い込みの激しい人には言い返しても無駄だ。山田さんと話していると、ときおりひどいむなしさに襲われる。

「だからさ、もう卓球やめちゃえば？」

「いや、何でそうなる」

「だってあの人も卓球部じゃん。一緒なのって嫌でしょ。うちとこは部活に入らなくても大丈夫だしさー。もしそんなに卓球好きってわけじゃなかったら、辞めちゃいなよ」

さすがに黙ってはいられなかった。山田さんをまっすぐ見つめる。

「好きだから卓球をやってるの。美咲がいるからなんて理由で辞めるなんて、そんなこと、私はしない」

山田さんの目玉がたじろいだように左右に動く。
勝った。

「じゃあ、もう五時過ぎちゃっているから帰るね。じゃあまた」

言葉を待たずに腰を上げる。

「あ、うん。ばいばい」

取って付けたような笑みで山田さんは小さく手を振った。

まだ明るくむしむしとした帰り道、バス停まで歩きながら考える。
もし、美咲が私に嫌なことを言ったりしていたら、とつくに卓球
なんてやめていただろうな。

私は弱い人間だ。

第8話 休日の午後。

十一時までたつぷり九時間寝ても、身体はだるかった。目覚める前に、生きているころの中崎くんの夢を見たからだ。

『何かこの辺臭くねえか？』

『お兄ちゃまがいるからだろ』

『そっかー、目障りだよなあ』

そんなことをクラスメイトが言う度、中崎くんの背中中は小さくなつてゆく。私の目に焼き付けられた記憶が、ビデオテープのように再生された形があ夢なのだ。

少し散らかった勉強机の上を見て、英語のノートがきれていたことを思い出した。木製の古臭いタンスの中から適当に服を選んでパジャマから着替える。

家の近くには文房具屋というものがない。コンビニに行けば売っているけど、気分転換もかねて高校の近くのジャスコまで買いに行こうと考えた。髪の毛は少々はねていたが別に友達と会うわけでもない、くしでとかすだけにした。

「ノート買いにジャスコ行ってくる」

台所に立つお母さんに声をかけた。

「あら、じゃあお母さんも一緒に行こうかな」

「ついて来んで良い！」

靴箱からサンダルを出し足を入れると、私は家を出ていった。本当は、一人で買い物をするのはあまり好きじゃない。話し相手がないと、店内を歩くときに挙動不審になってしまうのだ。だから、ジャスコの中に入ると文房具屋に直行し、前に使っていたものと同じノートを手にとってさっさと支払いを済ませた。

とはいっても、ここまで来ておいてすぐに帰ってしまうのもなんだかなあ。そう思い、小物の売っているお店をぶらつくことにする。

可愛いアクセサリーやペンなんかが並んだ小さな店内。私は買う気もないのにカチューシャを手にとってみたりした。そして隣の通路に移ろうとしたとき、すぐ先に知っている顔があった。化粧はいつもより濃いのが、分かるに決まっている。

「美咲ー、これ彼氏に買ってあげれば？」

「やだよ、恥ずかしいもん」

心臓が速い鼓動を打つ。美咲と一緒にいるのは卓球部員の女の子だ。お洒落が大好きで、派手で目立つ私と正反対の子。幸いにもまだ見つかっていないらしい、私は急いでその店を出た。

もう他のところをぶらぶらする気にもならない。今は、外の空気にあたりたい。ジャスコを出ると駐輪場の側にある自動販売機でコーラを買い、隣のベンチに腰掛けた。そこは運良く誰もいなく、更に日陰になっていてそれほど暑くない。快適空間だ。

美咲と一緒に遊ぶのは、私ではなく他の女の子なんだこれからもそのことに今更ながらショックを受けた。先ほど見た光景が頭から離れない。彼氏、という言葉がよみがえる。いつの間にか恋人までいたなんて、私の知らないところで美咲はどんどん新しいことを経験してゆくんだ。

コーラを一気に飲むと炭酸のせいで涙が出てきた。もう、このまま大泣きしてしまいたい。

ポケットティッシュで鼻をかんっていると、月岡さん？ と頭の上で聞こえた。まさかと思い顔を上げると……やっぱりだ。

「中崎先輩、ですか」

私服だから部活のときとは違う雰囲気だ。知っている人に会ってしまふなら、もう少しマシな服を着てくれば良かったと後悔する。子供服売り場で買ったこのＴシャツ。先輩の着ている服は大人っぽくて、年上の男の子ということを意識させるのには充分過ぎた。先輩が何も言ってくれないために思わず立ち上がると、

「いいよ、座ってて」

と妙に優しい声で言われたので、私はまた腰を下ろす。

「泣いてる」

さらりと言われた。表情も変えず、事実を述べただけという感じだ。しかし私は意地を張り、

「泣いてません」

「目尻に涙たまってる」

私は慌てて鼻をかんだティッシュで目をこする。

「コーラの炭酸のせいです」

嘘ではない。それだけが原因とは自信を持ってないけど。

「それも、あるだろうな」

見透かされている、と思った。中崎先輩はズボンのポケットからがま口の財布を取り出し、自動販売機に小銭を入れていった。ボタンを押して腰を折り、出口に手をつ込む。そんな一つ一つの行動が私の目に止まった。こうやって見ると、中崎くんと似ている気がしないでもない。

「隣、座るよ」

手には今買ったジュースが握られている。返事を返さない内に先輩は約一人分のスペースを空けて座った。プシュツと缶を開ける音が響く。私は膝の上に両手で抱えたコーラの缶に視線を落とした。

「ほらよ」

ぶら下げていた袋から、ビスケットの入った箱が出てきた。既に開封しており、上半分がクリーム色で丸い形をしたビスケット達が銀色の袋の中から顔をのぞかせている。遠慮がちに一つつまんで口に入れると、ホワイトチョコレートは溶けてゆき、濃厚な甘味が広がった。

「美味しい」

「だろ？ 新発売なんだ、これ」

大きな手のひらに乗った箱がぐらりと揺れる。何の用か、私はまだ訊けずにいた。大体予想はついている。というか、中崎先輩と話すことは一つしかない。

「中崎……弘樹くんのことですか」

しかしビスケットを噛み砕いていた先輩は、さも意外だというような表情になる。

「別に、そういうわけじゃない」

「じゃあ、話すことはありません」

口に出してみるとそれは思ったよりキツイ言葉に聞こえ、私は慌てた。何か付け足そうにも言葉が出てこない。買い物袋を提げた女の人が私達の前を通り過ぎた。

「いや、あるさ」

「え？」

「悩んで、あるか」

これは、何を意図した質問なのだろう。私の考えを読み取ったかのように、先輩がさかさず弁解する。

「別に、弘樹のこととは関係ない。ただ、何かあるんじゃないか。もしかしたら、部活のこととかで」

ぎくりとした。そんなに私、分かりやすい顔をしているのだろうか。

「どうしてそう思うんですか」

「覚えてないと思うけど、以前一回だけ月岡さんのプレーしたことがあるんだよ。ほら、一年が入部してすぐに体育館で二、三年が相手したことあったじゃん。俺ともちよこつと打ち合ったんだけどさ。それで、休憩時間のとき一人でぼつんと他の部員のことを哀しそうな顔で見えていただろ。」

あの時はまだ打ち解けてないからだと思ったけど、今は仲の良いやつもいるみたいなのに、その部員のことと同じ表情で見てるからさ」

先輩は一気に喋る。私の見ていた部員、というのは他でもない、美咲だ。卒業アルバムに載っている写真とずいぶん変わったから、先輩は気付いていないのだろう。

「その子が、田島美咲です」

もしかしたら言わなくても良かったかもしれない。しかし、心配してくれているというのに黙ったままでは心が痛んだ。

「え、あの人が」

「そうです」

「へえー、分からなかった。名前は試合表で見ただけだったから。」

……ずいぶんと変わっちゃったんだな」

先輩は苦笑した。私も髪をかきあげながらつられて笑う。初めて心が通い合ったような気がする。

「友達じゃないのか？」

どうなんだろう。友達をやめたつもりはないのだけど。私は曖昧に笑ってみせた。すると中崎先輩は、

「そっか……」

と言ったきり口を閉じた。深刻そうな表情をしている。こういうのって、何か嫌だ。可哀想な人に見られている感じがする。同情なんてまっぴらだ。

「違うんです。別にそれほど友達だったってわけじゃないし、別に……」

口に出してみると余計に情けない感じになった。コーラの缶を強く握ったら少しへこんだ。

「無理すんな」

先輩は微笑んだ。

「無理すんな、人間はみんな弱いんだから」

目頭が熱くなってくる。油断したら駄目だ、こんな言葉にだまされるな。だって、中崎先輩は。

「弘樹くんのこと、お話しします」

自然と口をついて出てきた。何故そんな気になったのだろう。き
つと、先輩の横顔が淋しそうだったからかもしれない。

第9話 告白。

私は辺りを見渡しながら、

「ここだと、ちょっと……」

「じゃあ、神社にでも行くか」

ベンチから腰を上げたので、慌てて私も立ち上がった。早くも脈が速くなっている。先輩はジュースを一気飲みすると、私の持っている空つぼの缶も一緒にごみ箱に捨ててくれた。

私は中崎先輩の後ろを自転車で走る。先輩の自転車は大きいから本当はもつとスピードが出るのだろうけれど、私に合わせてゆっくりとこいでくれていた。どこの神社か大体予想はついている。通っていた中学校の側にある人気のないあそこだ、きっと。

先輩は一言も話しかけてこない。今、何を考えているのだろう。私は何から先に言ったらいいか頭の中で整理していた。そんなことに気をとられてすぎてしまい、後ろから走ってくる車にクラクションを鳴らされてしまった。

走っている間は風を感じるのでまだ良いが、信号のところで止まったりするととても暑い。

止まっていたトラックが排気ガスを吐き出しながら走り出す。このまま、ひかれてしまったらどんなに楽だろうかと思ったことが何度もあった。しかし今は思わない。中崎先輩に真実を話すまでは。

懐かしい大通りを走ってゆくと、相田中学校が見えてきた。三年

間通った、私の母校。美咲と一緒にこの道を歩いた記憶がよみがえった。先輩は大きな美容院を右に曲がった。すると、木々の生い茂った小さな神社が見えてくる。

神社の脇に自転車を止め、塗装のはげた鳥居をくぐった。中はひっそりとしていて、陽光は寄りそって生えている木の葉で遮られているため、真っ昼間なのに薄暗かった。

誰もいないところで男の子と二人きりなんて、普段なら少女漫画に出てきそうな甘いシチュエーションのはずなのだけど、私が今から話すことを思うとそんな雰囲気になるわけがなかった。

石段までまっすぐ延びたコンクリートの地面を進む。先輩のスニーカーがする音と私のサンダルのかつかつと響く音が混ざり合い、一つの音楽のように聞こえた。黒いシャツの裏にあるぴんと伸びた背骨を見つめながら歩を進める。

石段の先にはさい銭箱が置いてあって、しかし先輩はそれには見向きもせず石段の真ん中辺りに腰を下ろした。私も隣に腰を下ろし足を投げ出した。石がひんやりとしていて気持ちいい。

どうやって切り出すか、私は悩んでいた。意味もなく水飲み場に視線を移したり、空を仰いだりした。沈黙を破ったのは中崎先輩だった。

「弘樹に、夢ん中で言われた。後輩の女子を困らせるなって」

後輩の女子とは私のことだろうか。先輩はこちらを向いて照れくさそうに微笑んだ。

「話せることだけでいいから」

「はい」

すべて、話すつもりでいた。一箇所を除いて。深く息を吐き、口を開く。

「前から、からかわれていたりはしてたんです。それで、三年生になって小さなことがきっかけで、いじめられるようになって……」

一生開けなくなかった記憶の引き出しを開け、慎重に言葉を選びながら話す。

「最初は、休み時間にクラスメイトが本人にも聞こえるように大声で『中崎気持ち悪い』とかって言ったりしていました。弘樹くんは言い返さなかったんですけど」

一つ嘘をついた。クラスメイトは悪口を言うときに『中崎』とは言っていない。代わりに使っていたのは『お兄ちゃま』だ。しかし、目の前にいるお兄さん本人が聞いたなら、絶対に良い気持ちはしないだろう。だから私は偽った。

「その内、言葉の内容がひどくなってきた。学校来るな、とか。その次に始まったのが、菌回しだったんです」

横目で先輩の様子をうかがった。眉間にしわを寄せて遠くを見ている。

菌回し。それは、今まで暴言を吐くクラスメイトを他人事のように見ていた私にとっては、本当に辛いものだった。あれは、菌を回されたものは参加を余儀なくされる。

誰かがわざと中崎くんにぶつかったり私物を触ったりして、触っ

た手を他の人になすりつける。これで、『菌』回しが始まる。菌を移された人はまた他の人に移し……という、無限に続くものだった。みんなは菌を移されないように逃げ回る。移された人は他の人に移すまで注目を浴びているから、途中でやめることはできなかった。私のところにも菌は回ってきた。その度に必死に他の人に移そうとした。いじめという罪から逃れるために。

「月岡さんのところにも菌は回ってきたよな？ 何で止めることができなかつたんだ？」

「怖かつたからです」

そう、私は怖かつたのだ。みんなと違うことをするのが。きつと、今もそうだと思う。

「弘樹は、そんなことをやられているのに気付いてた……よな」

「はい」

残念ながら。だって『お兄ちゃま菌が移る！』っておどけて騒いでいた人もいたから。その言葉を聞くと、中崎くんは顔を赤くしていた。

「あとは、みんなが聞こえるように陰口をたたいたり。仲間はずれみたいにすることもあって、弘樹くんは孤立していました」

この辺りはできるだけ淡々と話した。注意しないとため込んでいた感情が破裂しそうなのだ。ジャスコから移動したのは、他人に話を聞かれたら困るからなどではない。自分は泣いてしまう気がした

からだ。

鮮やかに記憶がよみがえってくる。掃除の時間に一つだけ誰にも運ばれない机、辛辣な悪口、そして続く菌回し。

でも、心のどこかではこれくらいいいじめ、テレビで取り上げられるものと比べたら大したことはないと考えていたふしがあった。これはいいじめなんかじゃない、とも。だって、物が隠されることも教科書のページを悪口で埋め尽くすことも、本格的な出来事はなかったように思う。

何よりも、自分は加害者ではないと思っていた。

ある日、中崎くんは言った。

「髪、切ったんだ」

昨日、胸までであった髪を肩辺りまで短くしたのだ。

「うん」

「そっちの方がいいかも」

笑った顔は、いつもと違う赤みをさしていた。

「そうかな」

と笑い返してはみたものの、内心泣き出しそうだった。私だって菌を回しているのに、悪口を言っているのに、何で笑って話しかけられるの。菌回しをしているときよりも心が痛んだ。そしてこんなにも感じる後ろめたさが、やっぱり私も加害者なのだということを

私に気付せた。

「そんなことがあって、弘樹くんは……」

言葉につまる。この一言を口にするのが、私は、ずっと怖かったんだ。いきなりのことだった。思ってもみなかった。その知らせを聞いたとき、ただただ愕然とした。

先輩は目をつぶり私の言葉を待っていた。まぶたに浮かんできた中崎くんの笑顔をかき消すように、勢いよく言った。

「自殺したんです」

鼻の奥がつんとした。口に出してみると短い言葉、だけど心の中を渦巻く感情は一言では現せない。後悔、罪悪感、そしてやるせないこの想い。

私達が、中崎くんを、殺したんだ。

「ああ」

ため息にも似た声を出し、先輩は頭をうなだれた。かける言葉が見つからない。

あれはいつ頃だっただろう。そうだ、九月だった。夏休みが明け、

もうすぐで体育祭だった。自宅で自ら命をたった中崎くん。詳しいことは知らない。先生の口から告げられたとき、誰も口を開こうとはしなかった。

黙っていれば分からなかったかもしれないのに、いじめていたことを明かした人が何人もいた。先生は泣きながら私達を叱った。

「お前らが中崎を殺したんだ！」

その言葉は、一生忘れることができないと思う。

そして中崎くんは、卒業できなかった。

「なあ、何で、弘樹はいじめられてしまったんだ？」

先輩は声を絞り出した。カラスが鳴きながら頭上を通過した。

「変わっていたから、だと思えます」

「それだけで……？」

「それだけです」

それだけでもいじめられる理由としては充分なんだ。私が学んだのは、みんなと同じじゃなきゃいじめられるということだ。

それと、もう一つ。人は、付き合う人によって変わってしまうということ。山田さんと仲良くなってから、美咲は中崎くんにいじめをするようになった。

「弘樹は、本当は自宅で死んだんじゃないんだ」

「……」

「厳密に言つと、自宅があるマンションの屋上から、飛び降りたんだよ。十階建てのマンションだった」

「やめて下さい！」

私は強くかぶりを振った。だって、それじゃあ私の見た夢と似ているじゃないか。今まで知らなかったのにあんな夢を見るなんて、まるで中崎くんが私に見せたように思えた。 怖い。

「聞きたくない……」

「逃げるなよ」

そう言つた先輩の目には、涙が浮かんでいた。

「逃げていたら、いつまでも苦しいままなんだよ！俺ら家族だって逃げたかったけど、認めないといけなかったんだ。もう弘樹はいないことを。月岡さんもそのことに真つ正面から向き合わない限り、いつまでも本当の涙は流せないんだよ」

電流が走つたみたいに心を打たれた。中崎くんのために先輩は泣いている。なら、私が流す涙は、誰のためのものなのだろう？後悔、罪悪感……結局、自分のためなんだ。中崎くんがいなくなったことを悲しむ涙なんて、一回も流してなんかいないんだ。

頬を生暖かいものが伝い、口の中がしょっぱくなった。これも自

分のための不浄な涙。私も、『お兄ちゃまが自殺なんかしたせいで怒られたじゃないか』と泣いていたクラスメイトと同じだ。
初めて、みんなと同じということが嫌になった。

第10話 帰る場所。

中崎先輩と別れたとき、時刻は二時を回っていた。自宅のドアを開けると良い匂いがもれてきて、母が顔を出した。

「希里、どこに行ってたの？」

「ジャスコ」

「二時間も何してたの」

「ノート買ってた」

「時間がかかりすぎなような気がするんだけど」

母の声は冗談混じりだ。だから笑って、

「色々あるんだよ」

自分の部屋に入ろうとすると肩をつかまれた。

「何かあったの？」

「……どうして」

「暗い顔してる」

思わず目をそらした。母親の目はごまかせないんだな。弱い私は

すべてを話そうと決めた。でも、

「とりあえず、昼御飯食べさせて」

母が作ってくれたのはオムライスだった。朱色のスプーンで赤い御飯をすくい、上に乗った固焼きの玉子と一緒に口に入れた。玉ねぎのシャリシャリという音がする。麦茶を飲み干し、最後の一口を飲み込んで、完食。食べた後はしばらく動きたくない。腹八分目なんて言葉、私の辞書には載っていないから。食べ終わったお皿を流し台に持っていくと、椅子に腰を下ろした。

「でね、お母さん」

母は台所に立って洗い物をしているが、しっかりと聞こえているだろう。

「ジャスコで卓球部の先輩と会っちゃって、今まで話してたの」

「先輩？」

「うん。男卓の」

「何、告白でもされた？」

「こっちが、違う意味での告白をしたんだけどね。なるべく明るく聞こえるように言った。」

「ううん。中崎くんのお兄さんなの」

返事は返ってこなかった。沈黙が重くのしかかる。聞こえなかったら、別にそれでもいいと思った。うつむいてテーブルにある濡れふきを伸びた爪でいじる。

母が正面の椅子に腰を下ろした。

「何を話したの」

珍しく真面目な声に私は驚いて顔を上げると、母は真顔だった。

「何か言われたの？」

「大丈夫だよ」

話し始めたのは自分なのに、何故だかいらいらした。

「希里は何も悪くないんだから、何を言われても気にしたら駄目だからね」

「だから何も言われてないって！」

今までは、優しい言葉をかけてくれる度、安心して泣きそうになった。けれど今はそれに抗う気持ちがふつふつと湧き上がってくる。私は中崎先輩にひどいことを言われたわけではない。先輩の声がよみかえる。

逃げていたら、いつまでも苦しいままなんだよ。

母は煙草を取り出し、ライターで火をつけた。口にくわえて煙を

吐くと、

「そんな言い方はないんじゃない？」

と言った。

「ほっといてよ」

自分で話しておきながら、これは矛盾だと思った。しかし怒りを抑える術を私は知らないし、反省をしようとも思わない。煙草の灰が灰皿に落ちたのを見届け、

「お母さんには分からないよ」

と言い席を立った。

「馬鹿じゃないの」

独り言のように母がつぶやいた。私は振り返らず勢いよく居間のドアを閉めて、大きなため息をついた。もう母とは口をきかないと心に誓ったのは、もうこれで何回目だろう。

ベッドに横になり、腕を額に乗せのっぺらな白い天井を見つめる。母と喧嘩をした後は、いつもどつと疲れが押し寄せる。そして感じる無力感。怒りをぶつけたって何も生まれない、無駄。全部無駄。分かっているのに、口を閉じることができなかった。

うつ伏せになり、枕に顔をうずめた。中崎先輩が脳裏に浮かぶ。

あの後、先輩は伸びをしながらお礼を言った。すっきりしたよう

な、そんな顔だった。最後にメールアドレスを教えてほしいと言われ、私は目をこすりながら携帯電話についた赤外線で自分のアドレスを送信した。

『そのイルカのストラップ、どこで買った？』

とその時訊かれ、私は動揺した。だって、このストラップは美咲とおそろい。何でそんなことを訊くのか尋ねたら、『弘樹も持っていたから』と答えた。中崎くんと同じものを持っていたなんて、と私は衝撃を受けた。

私はそこまで思い出すと起き上がって、ドアの前に放りっぱなしだったバッグの中からノートの入った袋と携帯電話を出した。やっぱり。新着メールが来ていた。ベッドに腰掛けてそのまま後ろに倒れると、メールを開く。

『中崎です。今日はありがとう。また、いつか話そう。田島さんのこととかも聞きたいから。迷惑かけて悪いとは思っているけど、まだ俺には知らないことがあるから。月岡さんには本当感謝しています。じゃあまた』

中崎、と書いてあって一瞬だけびくつとした。あの世からのメールなんて、そんな夢のあることは考えないけれど、そんなこと一度くらいはあってもいいのにな。

もし、そんなことがあったらまず謝りたい。思いつく限りの謝罪の言葉を並べて……駄目だ、これじゃあ所詮自分の罪悪感を軽くするための行為だ。

中崎くんが自殺してから、ときおり叫びたくなるほどの激しい感情に駆られることがあった。それは、小さいころ両親が死んだらど

うなるのだろつ、と考えたときの気持ちに似ている。どす黒いものが頭の中を支配して、呼吸が苦しくなるのだ。でも原因は分かっている、発作は中崎くんのことを考えたときに訪れるから。

私は窓の外を眺めた。ランドセルを背負った小学生が黄色い声を出して友達と下校している。三年生のときのクラスメイトは、もう中崎くんのこととはすっかり忘れて楽しい毎日を送っているのだろうか。中崎くんのこと嫌いだじゃなかったから、私は今苦しんでいるのかもしれない。

本当に、いつまで後悔すれば気が済むのだろつ。中崎くんのこと、美咲のことも。

私は机の本棚から、卒業アルバムを取り出した。青いカバーで、ずっしりと重い。ベッドに寝転がり足をぶらぶらさせながら適当にページを開いた。

最初に目に入ったのは、部活動の写真。女卓の集合写真は右側の下部にあった。九人の笑顔がこちらを向いている。前例の一番端にいる背の低いのが私だ。美咲は 後列の、真ん中。髪の毛を二つにしぼり、白い歯を見せている。

放課後別々に部室に行くようになったのは、三年生が引退する一ヶ月前くらいからだっただろつか。美咲が他の部員と笑い会う度、私は寂しさが増した。

次に見たのは修学旅行の写真。クラスごとに撮られたもので、私と美咲の間には顔を突き出した山田さんが写っている。写真の中の山田さんは重いまっすぐに切りそろえた前髪をしていて、当時の私はそれを悪口の引き合いに出していた。

自分勝手でしつこくて、何よりも私と美咲の仲に入り込んで来たのだから私は心底嫌っていた。

なのに、美咲はどこまで人が良いのか、

「寂しがり屋なんだよ」

とくつついてくる山田さんを受け入れた。

思えば、美咲は山田さんのことをよく知らなかったのかもしれない。だって、山田さんが本性を現すのは大体美咲がいないときだ。例えば彼女がトイレに行っていたり、宿題をやっていたりしたときに、山田さんトークは炸裂する。

「ね、ね。中崎くんってめちゃくちゃキモくない？ あーゆー人、死んでほしいんだけど」

「何で希里ちゃん、うちにメールあんまり送ってくれないの？」

「中間テスト、数学すごい良い点数だったんだけどー」

ここまで書けば、私が山田さんを好かない理由が分かってもらえらると思う。幾度となく美咲には説明した。山田さんがどんな人なのか、中崎くんのことをどう言っているのか。

それで、気が付いたら悪口ばかり言う人になってしまっていたんだよね。

誇張して話すこともあったから、そのせいで信じてもらえなくなつたのかもしれない。だんだん居心地が悪くなつていった。悪くなればなるほど、必死にどこへでもついていった。

なるべく美咲と山田さんを二人きりにしてはいけなかったから。

ついに限界というものが見えてきたとき、私はあの言葉を言ってしまった。その時の美咲の傷ついた顔は今でも忘れない。次の日から、私は二人の元に行かなくなった。

行けなくなった。

私はパタンと卒業アルバムを閉じる。自分でまいた種なんだよね、結局。でも、そこで謝ったら山田さんを認めることになってしまいうから、どうしてもできなかったんだよ。今更あのことを考えても仕方ない、私はぼさぼさになった髪をかきむしった。

希里、という声と共にドアがノックされた。

「何ー？」

返事をしながら私は急いで卒業アルバムを本棚に閉まった。

「夕飯、何か食べたいものある？」

いつもより優しい母の声。さっきはあんなにいらついていたくせに。母は、絶対に自分からは謝らない。私は許さないぞ、と思うのだけれど、そういう気持ちを保つのはかなり疲れるものだ。それに、母とまた笑い合いたい。だから、明るい声で答えた。

「オムライス！」

「昼に食べたばかりじゃない」

「だって、好きなんだもん」

やっぱり、私はお母さんが、この家が好きなんだと思った。安心
できる、私の失いたくない場所。

第11話 団体戦。

あっちゃんが部活を辞めると言い出した。

「いきなり何で？」

「大会まで後一ヶ月くらいじゃん」

「辞めないでよ」

狭い部室の中、部員達は口々に言った。あっちゃんは誰とも目を合わそうとせず、いじけた子供のように、

「だって、私下手だもん。卓球」

「とりあえず、座って色々と話そう？ みんなも、ほら」

美咲が優しく言い、部員は輪を作って棚の前に座った。あっちゃんの隣に座る美咲と私の間には三人が腰を下ろしていて、だから美咲には触れることすら出来ない。

「それで、下手だから辞めたいの？」

美咲があっちゃんに顔を向けると、耳にかけていた髪の毛がぱらりと落ちた。膝を抱えたあっちゃんはくぐもった声でうなずく。

「うん」

「温美は下手じゃないよ。高校に入ってから始めたわけだし、頑張ればまだまだ上手くなるって」

私も三年前に、美咲に言われたことがある。なかなか上達しなくて嫌になって『辞めたい』とこぼしたら、今と同じような優しい表情で彼女は諭してくれた。踏みとどまるようにと。でも、他の人にも同じ言葉をかけるなんて。私は二の腕を強く握った。

「そうだよ」

「あっちゃんならやればできるって」

部員達が励ましの言葉をかける中、隣に座るナツエが耳元に顔を近づけてきた。

「辞めればいいのにね」

その囁きは私にしか聞こえていないだろう。あっちゃんを嫌っているのはナツエだけではない、私のグループ全員だ。だから、教室ではなるべくあっちゃんと話さないように気を付けたりした。グループほど面倒なものはないと、つくづく思う。

辞めると言い張るあっちゃんに、美咲は話し出す。

「あのね、あたしが中一るとき、ある卓球部の人も今まで卓球をやったことのなかったらしいの。しばらく経って、その人も温美と同じように辞めたいって言ったんだ。でも辞めずに続けたらその内上手くなってきて、大会にもたくさん出れたの。」

だから、温美ももう少し頑張ってみない？」

即座に気が付いた。私のことだ。美咲の方を見たら一瞬だけ目が

合ったが、すぐに視線を泳がせ、二度と私を見ようとはしなかった。

「温美は素質あると思う。だから、辞めないで」

「そうそう」

あっちゃんは女卓の中では結構人気者だ。あっちゃんは心が動いたらしくみんなを一瞥し、

「辞めない方がいいのかな……」

と戸惑うように言った。辞めない方が絶対良いつて！ うん、そうだよ。等の声が飛び交う。美咲はあっちゃんの肩に手を置き、力強く言った。

「温美は、女卓に必要なだよ」

そしてあっちゃんは部活を続けることにした。馬鹿馬鹿しい、そんな他人の言葉に簡単に心が揺らぐなんて思いながらも、みんなの声を受け取って嬉しそうに微笑むあっちゃんから、私は目が離せなかった。し私が辞めると言ったら、引き止めてくれるのは一体何人いるのだろう？ 試す勇氣はない。

美咲の反応を見るのが怖かったから。

「じゃあ、そろそろ部活始めよう。今日は団体戦でもやる？」

美咲が提案した。

「賛成！」

この前、ジャスコで美咲と一緒にいた部員が勢いよく手を上げる。すると美咲と仲の良い部員達が次々と賛成の言葉を口にした。私はまだ何も言っていないのだが、そういう発言力のある子達が賛成すれば自動的に決まるのだ。まあ、そういう人がいなければ学校は成り立たないのだけど。

そしてグーかパーのどちらかを出す方法で、私達は二つのグループに分かれた。美咲とあっちゃんと同じグループになった。ジャンケンで順番を決め、さあ団体戦の開幕だ。

こちらのグループの一番はあっちゃんだ、緊張した面持ちで卓球台の前に立った。対戦相手のナツエが余裕そうにラケットを回転させ、不敵な笑みを浮かべる。私は柵の横にある太い柱に背中を付けて座った。ボールが飛んでくる危険性はあまりないし、この場所は身体がちょうど良い具合に角に収まるのだ。

同じグループの人は頑張れーと上辺だけの歓声を試合する二人にかけ、柵の前に人の輪を作りお喋りを始めた。私は身体を更に縮める。

ナツエもあっちゃんも試合中となると、お喋りするほどの相手が私にはいなかった。笑い声があがる度、孤独感が増した。美咲の方を極力見ないようにし、物思いにふける。点を取られるとあっちゃんは口をへの字に歪め、泣きそうな顔になった。

得点板を覗くと思った通り、五点もの差をつけられていた。すると派手な部員と喋っていた美咲が顔を向け、

「挽回できるよ、温美」

と声をかけた。あっちゃんは美咲を見て微笑みむと口を真一文字に結び、ラケットを構え直した。

すべて、私にとっては遠い出来事だった。

結局勝ったのはナツエだ。あっちゃんがごめんね、と今にも泣きそうな顔でグループの部員に謝ると、部員は何回もうなずきながら肩を叩く。反吐が出そうだ。あっちゃんが好きとか嫌いとかの問題ではなく、私がとうの昔に置いてきた光景なんて見たくないし、馬鹿らしい。

そして、私の順番がやって来た。

相手は美咲と仲の良い、化粧が落ちかけて目の周りが真っ黒になった女の子。負けたくない、私はグリップを強く握った。私は順調に点を入れてゆく。声援はまったく聞こえてこない、どれだけ女卓の友達が少ないかを思い知らされた。美咲に気を取られすぎて、気が付いたらあっちゃんとナツエしかいなくて。

試合が終わると、他の子と喋っていたあっちゃんが振り返って言った。

「お疲れー」

不覚にも、嬉しかった。

団体戦を締めくくるのは、美咲と人数の都合でもう一試合することになったナツエだ。現在四対四の引き分けて、この試合でグループの勝ち負けが決まる。いつの間にか私のすぐ側のドアに寄りかかったあっちゃんが、

「どっちが勝つか？」

とえくぼを浮かべて訊いてきた。

「ナツエかも」

私が答える。そう、ナツエは柔らかかそうな癖のある髪を一つに結って、更に垂れ目というおっとりとした風貌とは裏腹に、一年の中では一番卓球が上手いと言われているのだ。

「美咲ちゃんの応援してくるっ」

あっちゃんはいきなり立ち上がり、卓球台に近寄った。

「美咲ちゃん、サーブ慎重ー」

と、声をはる。するとそれにつられたかのようにお喋りをしていた美咲の友達も座ったまま、

「一本先だよ！」

「集中だよ、美咲」

と応援し出したもんだから私は戸惑った。だって、私は、応援なんてできない。白い目で見られたらどうしようとか、迷惑に思われるかもとか、色々な考えが頭の中を駆け巡り、私はたまらず部室を抜け廊下の一番奥にあるトイレへ駆け込んだ。

ドアを閉めると電球の切れたトイレはたちまち自分だけの空間になり、心が落ち着いた。白い陶器のようになめらかな洗面台の上に付いている鏡を見つめると、写るのは目の下に青いクマができた冴

えない私の顔。ちつとも生き生きとしていない、死んだ顔だ。最近つけるようになったマスカラのダマがまつげに固まっていた。

水道をひねると水が洗面台の上を滑る。私は生ぬるい水を両手ですくい、バシャバシャと顔を洗った。マスカラも美咲への想いもすべて流れてしまったらしい。

タオルを持ってきていなかったなので、個室にセットしてあるトイレトペーパーを巻き取り顔をこすった。他人が見たらさぞかし滑稽だろう。

「そろそろ、どうにかしないとなあ」

私はつぶやいた。でも、どうやって？ とりあえず今の私がすることは、こうやってトイレに逃げ込むことではなく、現実を直視することだと思う。

中崎先輩の言葉、逃げていたらいつまでも苦しいままなんだよ
そうなんだよね。

私は重い足を引きずり部室へと戻った。

三点差だった。ばつが悪そうに笑う美咲に部員達が励ましの言葉をかけている。勝てなかったのか。ナツエを見ると、当然だといわんばかりの顔で同じグループの部員の言葉を受け取っていた。壁にかけてある時計に目をやると、ちょうど部活の終わる時間だ。

「どこ行ってたの？」

驚いて振り返ると、そこにはあっちゃんが立っていた。

「美咲ちゃんが試合してるとき、いなかったよね」

「ああ、トイレ行ってたの」

「あれ、希里マスカラ落とした？」

これにはもつとびっくりして、

「え、気づいてたの？ マスカラ塗ってること」

と浮ついた声で尋ねた。

「うん」

あっちゃん、そんなに私の顔見てたんだ。クラスのグループ
その中にはナツエもいる　はまったく気が付いていない様子だっ
たのに。呆然とあっちゃんの顔を見つめていたら気づいた。今、初
めて。

あっちゃん、アイライン引いているんだ。　間近で見たらすぐ分
かることなのに、何故今まで気が付かなかったのだろう。多分私は、
他人の顔なんて見ていないんだ。美咲に気を取られすぎていると、
何か大切なものを失ってしまうような恐怖が沸いてきた。

「あっちゃん、いつか一緒に遊ばない」

自然とそんな言葉が出た。

「え、いきなり何だよー。でもそうだね、いつか遊ぼっか」

あっちゃんは笑顔で答えてくれたけど、本心から出た言葉なのか
は分からなかった。

「じゃあミーティングがあるからみんな二階に行って」

美咲がラケットをケースにしまいながら言った。

「行こ、希里」

あっちゃんは私の腕をつかんだ。私は、まだ失っていない。もうこれ以上、失いたくない。

「うん！」

そしてあっちゃんと一緒に部室を出た。

「そろそろ、夏の大会に出場するメンバーを決めたいと思う」

顧問が紙を見ながら言った。いつもより早いな。私は乾いた唇を舐めて唾を飲み込んだ。女卓全員がいるフロアーは重々しい沈黙に包まれる。

始めの方は二、三年生の出場メンバーだ、顧問が発表すると先輩達は騒ぎ出した。そして、一年生の出場メンバーは。私は耳に意識を集中させた。

「福山、新崎、田島、月岡。以上が団体戦の出場メンバーだ」

よっしゃと思い、私はこぶしを握った。声まであげそうになったが、隣に名前が呼ばれなかったあっちゃんがいるのを思い出し自分を制止する。次にダブルスなどのメンバーが呼ばれるわけだが、私

は嬉しくてほとんど上の空だった。

しかし、その言葉は聞き漏らさなかった。

「一年ダブルス出場メンバーは、田島・月岡のペアだ」

すぐには事態が飲み込めなかった。しかし、

「えっ、美咲と月岡さんが？」

という声が聞こえてきたので、どういうことを表すのかじわりと頭の中に浸透してきた。美咲は私の後ろに座っているはずだ。けれど、振り返ることはできなかった。美咲の声は聞こえない。

「先生ー、何で美咲と月岡さんなのー？」

と部員が尋ねた。あ、私ってあの子に嫌われてたんだ。しかしそんなことはどうでもいい。私も、何故？ という気持ちが大きかった。顧問なら交友関係くらい頭に入れておけよ、と叫びたい気持ちだ。

「田島は攻めが中心、月岡は守りが中心だろ。ちょうど飽和されるんだよ。相性の良いペアなんだ」

相性の良いペア、皮肉な言葉だ。そして既にどうやって大会当日休もうか考え始めていたのだから、やっぱり私は美咲から逃げているのだと感じた。

第12話 ダブルス。

「よろしく」

美咲から話しかけてきたのは何ヶ月ぶりだろう。こんなに近くに彼女が、いる。

「うん」

それしか言えなかった。自分の隣に美咲がいるのを何度も思い描いていたはずなのに、それが現実となった今、私は逃げ出したい気持ちでいっぱいだった。

ボールが飛んでくる。美咲が強く打ち返して素早く後ろに下がり、左斜め後ろにいた私は前面に出るとボールをバックハンドで打ち返す。ダブルスというのは、一人でやるよりプレッシャーがかかる。自分が失敗したら相手に悪いから。ましてや相手が美咲となれば私の心臓は押しつぶされそうだった。

「あっ」

私は小さく声を漏らした。打ち返したボールがネットを越えてくれなかったのだ。向こうのペアに点が加算される。

「ごめんね」

本当に申し訳なさそうに私は謝った。まだ美咲のことが好きなんだという、精一杯の訴え。

「うっん」

少しだけ笑ってくれた。急激に身体がほてり、叫びだしたいほどの衝動がせり上がってくる。

また親友に戻りたい。

「あ、」

今度は美咲が声を出した。ボールがラケットを持った手に当たり、卓球台の右側を通り過ぎて床でむなくバウンドした。すぐに拾いにいき相手のペアに投げる。そして前を見たまま言った。

「ごめん」

「いや、全然っ」

急いで答えたら舌がもつれた。美咲が謝ったことに驚いたわけではない、細くて不安げな声だったからだ。相手に悪いと思っているのは、もしかしたら美咲も同じなのではないか。

今度はボールがネットにすれてこちらのコートに落ち、打ち返すことができなかった。こういう場合は、点を取った方が『失礼しました』と謝るのが常識になっている。

「失礼しましたー」

ほらね。二人は満面の笑みで声をそろえて頭を下げた。

「ホントに失礼だよ」

美咲が冗談めかした。私は向こうのペアと仲は良くないのだけど、美咲はしいていうなら部員全員と仲良しなのだ。ただし、私以外。こんなにすぐ側にいるのに、美咲は遠いんだ。私は三人の笑顔を引っ込めさせるかのように、力強くサーブを打ち込んだ。

他の部員は和やかな雰囲気でラリーをしていた。大会の出場メンバーが決まってからは体育館で部活をすることが多くなり、メンバーに選ばれなかった人はお喋りが多くなる。やけになっているんだろうな、と選ばれなかった美咲の友達やあっちゃんのことを哀れになった。

田島・月岡組、顧問は相性が良いなどと言っていたけれど大して強くないペアに負けてしまったではないか。理由は分かっている、相手に気を使いすぎてプレッシャーが高まる結果、ミスが多くなってしまうのだ。それは美咲も同じだろう、サーブミスを二回もしていた。試合が終わると美咲はタオルで汗を拭きながらそっと私から離れた。

するといつの間にか体育館に来ていた顧問が、倉庫の前に立ったまま私と美咲を呼び出した。

「さっきの試合見ていたんだが、二人ともいつもよりミスが多かったな」

腕組みをしながら顧問は言った。

「はい……」

目を見ていると威圧感を感じるため、私は視線をあごに向けた。

「まあ、始めの内は息が合わないかもしれないけどなあ。大会まであまり時間がないんだからしっぴかり頑張れ」

私達は最後まで息が合うことはないと思った。

「分かりました」

美咲がしっぴかりとした口調で答えた。あまり校則を守ってはいないものの、責任感はあるし頭も良い方だしで教師から信頼されているのだ。昔は何をするのにも自信がなさそうだったのに、変わったなああと成長を見守る母親のような気持ちになった。

顧問の話が終わり美咲の後ろを歩いて一年女卓がプレーしているところに戻る際、試合が終わり休憩しようとしている中崎先輩が目に入った。壁にもたれラケットを見つめている。しかしいきなり顔を上げ、後ろを向いていた私と目が合った。私は意味もなく髪の毛を触りながら顔を前に戻す。

だけど、ペットボトルに入ったスポーツ飲料水を飲むあっちゃんに話しかけられるまで、中崎先輩の視線をいつまでも背中に感じていた。

「月岡さん」

一瞬誰に呼ばれたのか分からなかった。けれど斜め後ろに私に視線を向けた美咲がいて、久しぶりに名前を呼んでくれた嬉しさともう一つの事実にダメージを受けた。

美咲、私のこと名字で呼んだ。

前までは『希里』と発音の関係からか口角を上へ上げ、笑みを浮かべているように呼んでくれたのに。

「何、美咲」

私は数回まばたきをして平気な顔を装った。美咲、と言ったのは意図がある、親しみを込めるためだ。額に貼り付いた長い前髪を指で伸ばしながら、

「横回転、かけられる」

と、ほとんど抑揚のない声で訊いてきた。

「右回転ならできるけど、左回転はちょっと……」

私達のやり取りをみんなが見ているような気がして緊張し、固まった声になった。そう、という風に美咲がうなずく。

「じゃあ大会ではたまに横回転サーブを合図してから打ってくれる。あたし、横回転苦手だから」

知らなかった、美咲にも苦手なことがあるなんて。それよりも、私に頼み事をしてくれたのが嬉しくて、少しだけ微笑みながら深くうなずいた。

「よし、練習の続きやろう。誰かダブルスで試合してくれる人いる？」

美咲は周りを見渡ししながら声を出す。誰も反応がない。あぐらを

かいてお喋りをしている美咲と仲の良い部員が、

「だってうちら大会出ないし」

とひがみの混じった声で答えた。美咲は何か言い返そうとしたが、視線をそらして口を閉じた。そして小さなため息をつく。私も何か役に立てればと思い、美咲の次に強い子と打ち合っているナツエに声をかけた。

「ねえ、ダブルスの試合してくれない？」

「えー」

ナツエは嫌そうな顔になる。

「お願い！ 一試合だけでいいからさ、」

「月岡さん、いいよ別に」

近寄ってきた美咲の声にさえぎられ、私は閉口した。

「ダブルスの練習は終わりにしよう」

有無を言わせない口調。私の言葉を待たず、美咲はきびすを返し友達の元へ行く。ナツエが面白そうに、

「あーあ、希里、ふられちゃったね」

悪気があって言っているわけではないと思う。しかし今はナツエが、いや、すべてが目障り耳障りだった。

第13話 夕暮れ時。

部活が終わり、吹奏楽の楽器を吹く音が聞こえてくる階段を降りると、後ろから階段を駆け降りるかのような足音が近づいてきた。

「月岡さん」

私は立ち止まってゆっくりと後ろを向いた。すると白いエナメルバッグをかけた中崎先輩の姿が現れた。上の方のボタンを開けたYシャツの首元から、体育着が見えている。

「何ですか」

思ったよりも自分の声が薄暗い階段に響いた。

「話したいことがあって。ここじゃあれだから、どこかに移動しよう」

そう言つてズボンのポケットに片手を差し込みながら階段を下りる。勝手に決められたので反発してみたくなり、

「私、まだ話を聞くなんて言っていないんですけど」

しかし先輩は完全無視だ、振り返りもせず軽い足取りで階段を下りてゆき、ついには姿が見えなくなつた。だから仕方ない私も先輩に追いつこうと早足で降りる。楽器の音はだんだん聞こえなくなり、代わりに聞こえてくるのは自分の足音とかすかな女の子達の話声だけだつた。

先輩はげた箱を通り過ぎ、食堂の前で足を止めた。ガラスの扉の向こうには大きなテーブルと椅子がたくさん並んでいた。壁には『カレーライス三百円』と書かれた張り紙がある。いつもは騒がしい食堂も、電気の消えた無人の状態ではことなく不気味だった。

私は一回だけグループの子達に食堂に連れられて、具の少ないカレーライスを食べたことしかないのだけど。いつもはグループで輪を作り教室の床に座って、お母さんの作った弁当を口に行っている。

「で、何ですか」

私と同じく食堂をのぞいていた先輩がこちらを向いた。

「いや、別にそれほど大事な話があるってわけじゃないんだけどさ」

と言って頭をかいた。後ろからはしゃぎ声が聞こえてきて、思わず黙り込む。

「大丈夫だよ、こっちに来るやつはいないだろうし」

そうはいつでも、帰ろうとする人が視線を右に向ければ二人きりの男と女の姿が目に入るだろう。これだと何だかいやらしいな。とにかく、早く話を済ませてほしかった。

「月岡さん、大会のメンバーに選ばれたよな」

「はい、え、何で知っているんですか。発表したとき男卓とは別々だったじゃないですか」

ふと、上下関係を忘れ正直に思ったことを話している自分に気づ

き戸惑った。まして、目上の人に自分から質問するなんて、人生初だ。でも、既に泣き顔を見られているし、遠慮はいらなのかもしれない。先輩はあごを触り少し悩んだ素振りを見せながら、

「何となく、だな。前試合したとき、結構強いと感じたし」

「先輩は？」

「一応な」

彼はにやりと笑う。

「団体戦だけか？」

「いえ、ダブルスもです」

美咲の顔が頭をよぎった。ダブルスの練習はもうあまりしてほしくない。もっとも、美咲もしたがないだろう。

「あ、もしかして田島さん？」

そうです、と私が答える。

「だから今日一緒にいたのか」

先輩は納得したかのように何度もうなずいた。

「でも良かったね、大会出れて」

私は食堂のガラス戸に手を当てた。冷たさが伝わってくる。ガラ

スに写る自分の顔とその隣の先輩の顔を見ていたら勝手に口が動いた。

「それが良くないんですよ。だって私、美咲に避けられていて、だからお互いすごく気を使うし。それ以前に気まずいし」

早口でいっぺんに喋った。私を突き動かしたのは何だったのだろう。良かったね、と言われたことに反発したかったのか、それとも先輩なら分かってくれると思ったのか。口にしてみると、あまり深刻そうに聞こえない。もう少し暗いトーンで話せば良かったと後悔した。別に同情してもらいたいわけじゃないのだが、私にとっては寝不足になるほどの深刻な問題だ。先輩は何て答えるだろう。『それはきついよな』と同情を示す？ それとも笑い飛ばす？ 私には予想がつかない。

「何で？」

先輩は私の考えたどれとも違う言葉を口にした。だからつい、

「え？」

と聞き返してしまった。

「何で避けられてんの。理由があるんだろ」

先輩は眉をひそめている。そんな恐い顔で言わないでくださいよーと言ってもその顔を崩さなかった。だから私は笑いを引っ込め、とつとつと語り出した。

「中学三年生のとき、私達二人のグループに山田さんっていうのが

入り込んできたんです。山田さんっはなかなか友達ができないみたいで、美咲は優しいから声をかけてあげたらなついてしまっただけ」

「ああ、あの前髪ぱつっつんの子。卒業アルバムで見た」

「それです。でも、自分の自慢したり、聞いていて不愉快なことを言ったりするので嫌いになっていったんですけど、何故か美咲の前ではそんなこと全然言わなかったんです。だから、美咲は山田さんのこと好きみたいで。どんな人なのか説明しても分かってくれませんでした」

うまく言えなくてもどかしい。これじゃあ私が山田さんに焼き餅を焼いているみたいではないか。ガラス戸に寄りかかり先輩と向き合い、しかし目は見ずに、

「山田さんといえるの、嫌でした。美咲とはどんどん仲良くなってくし。だから　だから、美咲に言ったんです」

そこで言葉を切った。先輩は黙っている。肩幅に足を開いて立つたまま、少しも動かない。ポケットに差し込んだ手のごつごつとしたひじを見つめながら静かな声で言った。

「分かってくれないなら、美咲とはもう一緒にいたくない、って」

そう、避け始めたのは私の方だったんだ。

近寄らないようにして、目も合わさないようにして。嫌いになっただけじゃない、いつか私の元に戻ってきてくれると信じてたのだ。

最初美咲は哀しげな瞳で私を見ていたけれど、その内あきらめたのか山田さんと益々仲良くしていた。はたから見ても分かっていた。休日一緒に遊んでいるのも見かけたし。

独りになって初めて、美咲がどれほど大切な存在なのかを思い知らされた。でも、謝ることなんてできなかった。美咲のことを内心恨んでもいたし、もう二人の仲に割り込むには無理だと悟ったから。

あの頃と同じように、胃をかき回されているような感覚が身体を襲った。手を強く握ると皮膚に爪がくい込む。その痛みが私の心を安定させる唯一のもの。

いきなり先輩が私の手をとった。無理やり開かれた手のひらには、爪のあとが赤く浮き上がっている。

「人間はみんな弱いつて言ったよな？ だから、田島さんも弱かったんだよ。月岡さんだけの責任じゃない」

先輩の手は汗ばんでいた。

「痛いよ先輩、離して」

しかし先輩は指を強く握ったままで、離そうとしてくれない。中崎くん、というキーワード以外先輩とは何の関係もないと思っていたのに、触れられると私の心に入り込まれたようで怖くなった。

「あいつもそうだった。全部自分で抱え込んでしまって、結局は自分自身が壊れるんだ」

直後、チャイムが鳴り響いた。今、何時なんだろう。何故男の子に手をつかまれているんだろう。今の状況を外から冷静に見ている

もう一人の『私』がいた。

「あいつって？」

チャイムが鳴り止んでから尋ねた。すると先輩は力が抜けたように手を離す。

「弘樹」

ああ、やっぱりね。私の心はその事実をすんなりと受け入れた。

「弘樹は心配をかけるからとかの理由で家族に黙っていたわけじゃない。いじめられるのは自分が悪いと思っていたんだよ。だから、壊れてしまった。死を選んだ」

曇りガラスの向こうにいるようにおぼろげな輪郭だった中崎くんが、今はつきりとした存在になった。リアルな、生身の人間。

「弘樹くんは、強かったと思います。私なんかよりも、ずっと」

かすれた声で言った。

「一緒だよ。自分の辛いものを他人に押し付ける人間なんかよりはお前らの方が強いさ」

その言葉は、中崎くんにも向けられたものだと思う。

「でも、押し付けるのと分かち合うのは違うんだよ」

先輩は私を見据えた。薄暗がりの中でも瞳だけは静かに光ってい

る。私は分からないふりをした。

「どういう意味ですか」

折れそうな腕が伸びてきて、そして私の頭をポンポンと優しく叩いた。羽毛布団に寝たような、全身がふわりとした感覚に包まれる。

「だから、抱え込まないで何でも話せよ。俺は、弘樹みたいな被害者をこれ以上出したくないんだ。綺麗事とかではなくてさ」

こんなことを言われたのは初めてだ。しかも、私は恨まれても仕方のない立場なのに。私は今まで訊けなかったことを口にした。

「弘樹くんを救えなくて……後悔、していますか？」

「うん」

先輩は即答する。私も後悔をしている。小テストの点数を褒めてくれたのに。短く切った髪の毛を見て『そっちの方がいい』って言うてくれたのに。

部活帰りだろう、女の子数人が会話をしながら生徒玄関に向かうのが見えたので私は小声で呼んだ。

「先輩」

先輩は首を少しだけ前に突き出して、ぱんぱんに膨らんだエナメルバッグの位置をずらす。重いんだろうな。私も、ぎゅうぎゅうにペンやハサミを詰め込んだペンケースや汗で汚れた体育着、宿題の出ている教科の教科書などが入っている通学バッグが肩にくいこん

で痛くなり始めていた。

なるべく手短に話そうと、私はいきなり本題に入った。

「私、弘樹くんが自殺したのには、美咲が関係していると思っています
るんです」

ずっと前から薄々思っていた。いじめが原因ではある、けれど中
崎くんにとっては『美咲』にいじめられたのがショックだったので
はないか。空気がざわついた気がした。

「どういう意味？」

自分自身にも言い聞かせるように、一つ一つの言葉をしっかりと
発音する。

「まだ仲が良かった頃、美咲は色々言われる弘樹くんに同情してて、
何度か声をかけたことがあるんです。かけた言葉自体はたわいのな
いものだったんですけど、弘樹くんに女の子が話しかけることって
あまりなかったので、嬉しかったと思います。それなのに、山田さ
んの影響で弘樹くんをいじめるようになって……」

私は先輩の顔をうかがった。真剣な表情で、話を聞いてくれて
いる。

「弘樹くん、美咲のことが好きだったような気がするんです。私達
のこと、よく見ていたし」

中崎くんの話をしていると自然と視線が彼に向いてしまう。する
と、向こうもこちらを見ているのだ。目が合った。おそらくあれは、
美咲を見つめていたのだらう。あの頃はその事実が気が付かなかっ

ただのだけれど。

「それはないような気がするけどなあ」

先輩は口の中でつぶやいた。

「へ？」

すっかり間抜けな声を出してしまった。てっきり、うなずくものだと思っていたのに。否定する要素はどこにあるだろうか。先輩は突然胸ポケットから携帯電話を取り出すと、

「もう七時半過ぎてるな。そろそろ、帰ろつか」

ディスプレイが強い光を発している。時間を聞いて、私は青ざめた。

「やばい、門限八時なのに。今、何分ですか」

「三十一分だけど」

私の頭は計算を始める。いつもなら三十分ちよつとかかるが、夜なら交通量も少ない。今は一階にいるから階段を降りる時間もかからない。ぎりぎり間に合うはずだ！ 私は宣言した。

「私、先に走って帰ります！」

「あんまり急ぐと危ないぞ。つかごめん、俺のせいで。もし間に合わなくて叱られたら、先輩が帰らせてくれなかったとか何とか言っただけから」

お母さんみたいなことを言っただな。

「はい、さようなら」

私は走り出した。通学バッグが揺れて身体に当たる。後ろから、

「またな」

と声をかけられた。

生徒玄関から外を見ると真っ暗だった、少し前はまだ明るかったのに。浦島太郎の気持ちが今ならよく分かる。私はローファアを足に突っかけ、車のライトが光る夏の夜へと飛び出した。

第14話 亀裂。

思ってもみなかった。まさか、見られていたなんて。

教室に入ると、私のグループは窓際に固まっていた。彼女達は私の姿を視界にとらえるとちらりと視線を向けたが、露骨に目をそらし、何もなかったかのようにお喋りを再開した。

全身から血の気がひき、暗い穴にどこまでも落ちてゆくような気持ちになった。何で？ 私、何かした？ 叫びたかった。通学バッグを机の上に置き、脈が速くなってゆくのを抑えようと椅子に座り、深呼吸をした。教科書を机の中にしまいながら、どうしようかな、と考える。みんなの目が私に向けられているようで、後ろのロッカーまで行くのにもひどく緊張した。

しゃがんで一番下にあるロッカーの鍵の番号を合わせて扉を開き、教科書を数冊取り出して床に置き、ロッカーを閉める。教科書を胸に抱いて立ち上がると、すぐ後ろに彼女達がいて、心臓が飛び上がった。先頭にいるのはリーダー格の子だ、焼けた肌に真っ黒に縁取られたアイライン、その目で見つめられるとやっぱり怖い。彼女はしゃがれた声で言った。

「ねえ、希里さあ、昨日中崎先輩と一緒にいたんだって？」

そういうことか。リーダー格の子の後ろに隠れるようにして私を見ているナツエがいた。その瞳は、心なしかうるんでいた。私はリーダー格の子の言葉を無視してナツエに近寄った。威嚇するような瞳、けれど怯えているのは一目瞭然だった。まばたきが多くなっているし、この子は自分から何かを言える性格ではない。

「見てたの？」

ナツエが小さな口を開いた。

「うん。何でよ、だって希里……」

ナツエはこうやって語尾を濁すくせがある。直接責めることができないから、グループの子達に話したんだよね。

「希里、ナツエの気持ち知っているよね？ それなのに、最低だよお前」

リーダー格の子はナツエを隠すようにした。一步離れたところにいるもう一人の仲間の冗談好きは黙ってやり取りを見守っていた。

「違う、誤解だって。先輩が話があるって言って、話していただけないの」

「何が誤解だよ。暗いところで二人きりなんて、おかしすぎるんだよ。何やってたんだよ」

何もやっていませんから。どう説明すれば分かってもらえるのだろう。

ふと窓辺にいる派手な女の子達の五人グループに目をやると、小さなパックに入った飲み物を飲んだりしてお喋りをしながらも、こちらを興味津々な顔で見っていた。私達のことを話しているのかもね。ここで冗談好きが初めて口を開いた。

「しかも希里ちゃん、温美と仲良くしてるんでしょう？」

私はなるほどと思った。自分達の考えに合わないものは、排除にかかるということか。この年頃の子が他人の悪口を好きなのは結束するためだ。自分と同じことを思っていると安心して仲間意識が芽生え、グループを作る。

もちろん抜け駆けするものには容赦ない、誰にも話さず先輩と二人きりになってしまった私が良い例だ。けれど、その結束した絆がもろいのを私は知っている。だからこそ、嫌になる。

「だってあっちゃん、良いところもあるし」

危険な発言だというのは分かっている。例えば仏教で、仏を馬鹿にしてキリストを信仰するようなものだ。さあ、絶縁宣言来るか？

「あっそ」

リーダー格の子が吐き捨てた。

「中崎先輩とは、本当に何もなかった。信じてもらえないとは思っけどね」

私も負けじと吐き捨てる。絶望的な場面に遭遇すると、怖いものなんてないことがよく分かった。『喧嘩かよ』と面白そうに言う声がどこからか聞こえた。馬鹿らしい。何もかも馬鹿らしい。でも、これから私は休み時間を独りで過ごすことになるのかと考えると泣きたくなる。

私は伏し目がちのナツエの目をじつと見つめていた。自分で何も言えないのなら黙っていればいいものを、仲間に言いつけるなんてずるいやつだ。誰も口を開こうとしない。リーダー格の子は目を泳

がせていた。

「疑うなら本人に聞いてみればいいじゃない。私は、もう言うことはないんだけど」

早くこの不穏な空気から抜け出したい。私からこんな言葉が出るなんて、自分に非がないと思うと強気になれることを学んだ。

「いいよじゃあ」

リーダー格の子がパンダのような目をしょぼしょぼさせながら、私の隣をすり抜け教室から出ていった。冗談好きとナツエも慌てて後を追う。何が『いいよ』なのか分からないが、私は自分の席に戻って教科書を机の中に入れると、勢いよく机に突っ伏した。額がぶつかってじんじんする、しかし気持ちを切り替えるのには最適だ。

今も心はずっしりと重いが、不思議と後悔は残っておらずすっきりとした気持ちで、窓から流れてくる暖かい風が気持ちいいとさえ思った。

グループの子達の声がして私は顔を上げる。教室に戻ってきたんだ、しかし私には目もくれず窓辺でお喋りを始める。まるで私なんか存在しないかのように。

本当に存在を消せたらいいのにね。

また突っ伏すのも不自然なので、携帯電話をいじることにした。寂しさを紛らわすため、独りでも平気だと装うため。

携帯電話OKな高校で本当に良かった。天気予報のサイトをまわってみたり、メールを読み返してみたり。そういえば、昼休みどうしよう。独りきりで弁当を食べるなんて耐えきれぬだろうか。トイ

レ、という単語が頭をよぎった。しかしすぐさま派手な子達が化粧直しをしていたり、五限目に体育があつたら更衣室として使う人もいることがあるのを思い出したのであきらめた。第一、トイレで食べるなんてそれこそ泣きたくなる。

ネット小説を読んでいたらいきなり携帯電話が震えた。届いた新着メールを開くと、送信者はあっちゃんだった。私はあっちゃんの姿を探した。前の扉の前にグループの子と一緒にいるのを見つけた。グループの子は自由気ままに携帯電話をいじったり黒板に落書きをしていたりする。

携帯電話を持ったあっちゃんと目が合うと、深くうなずき目を細めて微笑んだ。不覚にもじんときてしまい、さりげなく目をこする。もう一度画面に目をやった。

『大丈夫？』

短い文面だったけど、嬉しかった。

休み時間、中崎先輩にメールを送ってみようと携帯電話を開くと知らないアドレスから新着メールが届いていた。誰からだろうと不信に思いながらもメールを開く。中崎先輩からアドレス変更の知らせだった。それならメールが送りやすい、アドレスをクリックして返信する。

唇を触りながら何と入力するか悩み、結局思い付いたことをそのまま打った。グループからはじかれちゃったんですけど、どうすればいいですかね？ こんな感じ。普通ならこんなこと相談しない、でも先輩なら良いと思った。頭に乗せられた大きな手の感触は今でも覚えてる。少しだけときどきしながら送信をした。

また意味もなく適当にサイトをまわっている内にメールが返ってきたので唇をぎゅっとむすぶ。内容は、先輩らしかった。

『負けるな。悔いのないように、自分の思った通りに行動を起こすんだ。月岡さんは独りじゃないから』

でも、例え今私が泣き出したとしても先輩は助けには来てくれな
いんだよね。一つ下の階の恋人でも何でもない先輩は近いよう
でずっと遠い存在だ。他の場所で他の時間を歩んでいるのだから。

周りを見渡すと、女の子のほとんどがグループで固まってけたたましい笑い声を発している。中には、それじゃあ一緒にいる意味
なくない？ というような会話の少ないそれぞれが好き勝手なことを
しているグループもあるけれど。あっちゃんのグループが代表的だ。

それに対して男の子はグループというものがあまりなく、席につ
いたまま音楽を聴いている人や近くの席の男の子とお菓子を食べて
いる人なんかがいる。男の子がうらやましい。

独りでいるのが苦しいんじゃない、独りなのをみんなに見られる
ことが苦しいんだ。決して自分から孤独を選んだわけじゃないから、
私は空気に圧迫されてゆく。自分が少しずつ死んでゆく。

私は携帯電話に付いたイルカのストラップを握りしめた。私と美
咲をつなげる唯一のもの。そして、中崎くんも持っていたストラッ
プ。桃色の方を買った美咲は、今も携帯電話に付けているのだらう
か。何となく付けていない気がした。

独りでいると、自分がいつもよりしっかりした存在に感じた。グ

ループの中にいるときは、会話が途切れるのが嫌だから必死にどうでもいいことを喋って、つまらない話にも笑い声をあげて。そういえば、今までどんな話をしたのかほとんど覚えていない。けれど一緒にいるときは確かに楽しかった。ふざけ合ったり、割り勘で好み焼きを食べたり、みんなといると美咲のことの中崎くんのことも全部忘れられた。

やっぱり、このままじゃいけない。今日中にグループときちんと話そうと思った。

悔いを残したくないから。

しかし、なかなか勇気が出ない。席を立つタイミングを見計らっている内にチャイムが鳴ってしまふ。その繰り返しだ。何て言えば分かってくれるのか、まずはそれを考えてからだ。机の上に置いた腕に顔を寄せ、横を向いてグループを観察する。私がいなくても楽しそう、けれどわざとこちらを見ないようにしているのだと分かった。

答えを出せないままついに昼休みが来てしまった。自分のグループとは一緒に食べられるわけないし、他のグループに混ざるというのも到底無理な話だ。だからって独りで食べるなんて、みんなの視線が痛い、痛すぎる。私は財布まで手に持ちジュースを買いに行くの装って教室を出た。私の行くところは、卓球部員しか通らない管理棟一階にある部室しかなかった。

第15話 対面。

何も考えずになだれるように階段を降り、静まり返った一階の廊下に出る。卓球室と書かれた紙の端がめくれて今にもはがれそうだった。私は戸を開ける。

すると大きな物音と共に短い悲鳴が部室の中からあがった。柵の前に座る人物は目を丸くして私を見ていた。私も、驚きを隠さずにはいらなかった。

「美咲……」

腰をさすっているところを見ると、誰も来るはずがないのに突然戸が開いたため、びっくりして思いつきり柵に当たった音だったらしい。美咲は、

「何でいるの……」

とまだ驚きの覚めない顔で言った。

「いや、こっちの台詞だよ。何で？」

見ると隣には赤い格子模様の手提げから何かを桃色のハンカチで包んだものが半分顔を出していた。もしかして、と脈が速くなった。

「ねえ、とりあえず入って良い？」

こくりとうなずいたので中に入って戸を閉める。美咲は当惑した目つきで私を見たあと手提げに視線を向けた。何か言ってくれない

とここから動けない、私は目を伏せて立ち尽くしていた。しかも窓も戸も開いていない閉じられた空間だ、重々しい空気が漂っていて息がうまく吸えない。たまらず私は口を開いた。

「私さあ、何か誤解みたいなのされてグループからはじかれちゃったんだよね。だから教室いるのしんどくてここに来たの。せめてみんなが昼ご飯を食べ終わる頃までここにいさせて」

笑ってみせようとしたけれど、頬の筋肉がこわばっていたため、引きつった笑顔になってしまっただろう。

「いいよ。あたしは、弁当食べにここに来たんだ」

怒ったように横を向きながら言った。

「……いつから」

「最近」

そっけなく答えるのを見ると、よほど無理をしているのだろうと胸が痛くなった。私は美咲がいるところのかなり手前で立ち止まり、棚を背にして卓球台を眺めた。

「あ、気にしないで弁当食べていいよ」

ちらりと美咲に目をやった。私は棚に左腕を寄せ、どうしたら食べやすい環境を作れるか考えた。私がいる時点で食べにくさはかなりのものだろうが。布のこすれる音がした。そつと美咲に視線を移すと、包んだハンカチをほどこき、白い弁当箱のふたを開けていた。と、顔を上げる。髪の毛の下から黒い瞳がのぞいていた。

「あ、ごめん」

私は慌てて目をそらす。

「食べる？」

え、と私は聞き返した。

「食べない？ あたしこんなに入らないし」

棚から腕を離し弁当箱の中身をのぞくと、一口コロッケ、一口スパゲティ、一口ハンバーグ……と冷凍食品が勢ぞろいしていた。美咲は手提げから白い袋を引っ張り出した。袋を下敷きにして、コンビニで買ったものだろう、中に入っていたおにぎりと焼きそばパン、メロンパン、プリンを取り出す。私は啞然とした。

「そんなに食べる気だったの……？」

美咲はそれには答えず、

「メロンパンとプリン食べていいから」

よく見ると美咲の長いまつげがせわしく動き、その度前髪が揺れていた。だから私は素直に好意を受け入れた。

「ありがとう」

美咲の唇がぴくりと動く。まばたきの回数もそうだが、かなり緊張しているのだろう。考えてみれば当たり前だ、ダブルスの練習の

ときに多少言葉を交わすとはいえ、個人的にこうやって向き合つのは久しぶりなのだから。

なのに私は普通に話しかけていることが、自分でも不思議だった。

私は美咲から少し離れた場所に座り、メロンパンを手取る。メロンパンを勧めてくれたことからして美咲、覚えてくれていたのかも。私がメロンパン好きだってこと。私は袋を破ると大きく口を開けてかじりついた。美咲も細い指でおにぎりのパッケージを開け、かじりつく。

きつと他人から見たら異様な光景だろう。黙って食べる二人、ものを噛み砕く音だけしかない部室。私はくちや、という音をたてないようにして静かにメロンパンを噛みちぎった。弁当箱からはソースの匂いがしていた。

私達は一言も交わさない。私の場合、話すことが思いつかなかった。ここで弁当を食べている理由なんて訊けるわけないし。それに自分から話しかけるのはやっぱり気が引ける。ただ、前と違って私と一緒にいるのが嫌なんじゃないかとか、そういう気持ちはなくなっていた。

メロンパンを食べ終わると、

「本当にいいの？」

と尋ね、うなずいたのを確認してからプリンのおたをはがす。そしてちやちなプラスチック製の白いスプーンですくい口に入れた。つるつるとしていて、とても甘い。美咲は空っぽになった弁当箱のおたをしめ、ハンカチで包み直していた。左手の薬指には細い銀色の指輪がはめてある。彼氏とおそろいなんだろうな。そう思うと急に寂しさを感じた。スプーンは下に入ったほろ苦いカラメルソー

スまで達した。

プルル、と携帯電話を買ったときに初期設定されているような音が近くで鳴った。美咲がスカートのポケットに手を入れて取り出したオレンジ色の携帯電話には、やはりイルカのストラップはぶら下がっていなかった。

予想していたことだけど、直に目の当たりにしてしまうと胸がずきりと痛む。美咲は私を少しだけ見てから電話に出た。

「もしもし」

部室は本当に静かだから、電話の向こうの声が私の耳にも届く。

『あー、俺。今どこにいる？』

「学校だけど……」

と言い、立ち上がってほこりのつもった窓の近くまで歩いた。私には聞かれないのだろう。だから私も意識をそらすように自分の携帯電話をいじるが、受話器から漏れた声が否応なしに耳に入ってくる。

「何の用事？ 大事な用事じゃないなら後にしてほしいんだけど」

『大事な話だよ』

低い男の人の声。彼氏、だろうか。美咲は落ち着かない様子でふらふらと移動した。ここまで遠ざかれるとさすがに声も聞こえない。ほっとすると共に少しだけ残念だった。

「じゃあ早く言って」

「……え？ 聞こえない、もう一回言って」

焦っているのか、美咲は窓枠を指で叩く。他の人と会話している美咲を見るのは何だか変な感じた。

「……どうして」

美咲の声色が変わった。こちらに背を向けているので表情は分からない。私がいることも忘れたように声を荒げた。

「意味分かんない。そんないきなり電話で言われても。本当、意味分かんないよ……」

私は直感した。でも、もし私の直感が当たっているとしたら困る。その内力が抜けたようにしゃがみ込んだ。私は迷いながらも、

「美咲？」

急いで近寄ると彼女の震える背中を見つめた。こんなとき何て言葉をかけたら良いのか、経験のない私は分からない。青いベストの美咲の背中に優しく手を当ててみた。

「触らないで」

涙声で鋭く言われ、すぐさま手を離す。対応の仕方を間違えたか、自分の不甲斐なさに舌打ちをしたい気分だった。そうだ、昔から落ち込んでいるときの美咲は扱いにくかった。声をかけると拒絶されるし、だからといって放っておくと益々落ち込む。美咲からは嗚咽

が漏れていた。

直感が当たってしまったているのは、もう確実だった。

美咲の前にまわると、ちょうどつむじが見えていて髪の毛の根元が黒かった。例え煙たがられたとしても、声をかけずにはいられなかった。

「元気出して？」

肩の震えが止まった。直後、顔を上げる。そしていきなり肩に衝撃を受け、私はしりもちをついた。一瞬何が起きたのか分からず、突き出している腕を見て美咲に突き飛ばされたのだと知った。

声も出なかった。美咲の赤い瞳には涙が溜まって光っている。しかし呆然としていると、

「最低！ 何も分かっていないくせに！」

ナイフのように鋭い言葉が私の心をえぐった。息が止まりそうになる。

美咲が部室を飛び出してから、しばらくの間は身動き一つできなかった。

散乱したままのおにぎりのパッケージやパンの包みを見つめる。手提げは置きっぱなしだから、その内戻ってくるだろう。鉢合わせ

は気まずいのでごみをコンビニの袋に詰め込むと黒板の横にある灰色のごみ箱に捨て、私は部室を後にした。

第16話 9人・1人。

美咲が部活に来なくなつて、もう一週間経つ。大会までの日にちもあまりないというのに。無断欠席する学年部長に対して、みんなは冷たかつた。

「この時期に学年部長さんがサボるなんてどういうこと？」

「しかも美咲学校には来てるよ。今日廊下で会つて部活のこと言つたらシカトされたし」

口々に不満を口にする一年部員達。私は聞こえないふりをして卓球を続けた。あの日の出来事を思い出す度、美咲に押された肩が痛いように感じる。腹が立つわけじゃない、美咲が変わってしまったことが哀しかった。美咲に浴びせられた言葉が与えたダメージは大きく、おまけにまだグループにははじかれたままだし、心に空いた穴を埋めるものは何も見つからなかった。

ナツエと縁切りをしている今、卓球の相手をしてくれるのはあつちゃんだけだった。

「あ、ごめん」

あつちゃんの打ったボールがあらぬ方向に飛び、私は苦笑しながら小走りで拾いに行った。

「あつちゃんはさ、少しラケットの向きが上過ぎるんだと思うよ」

「あー、だから変なところに飛んじゃうのか」

あっちゃんらはラケットの角度を調整し数回素振りをした後、サーブを打った。しかしボールは台をバウンドせずに飛んできた。

「うーん」

とうなつて唇を尖らせる。

「今のはラケットを振る場所が高すぎたからだと思うよ」

あまり言つと『偉そうに』と思われるだろうか。しかし、あっちゃんらは突然笑い出し、

「希里つて美咲ちゃんみたいだね」

と言った。そういえば、アドバイスをするのは美咲の役目だと思つてしたことがなかったのに、何故私はしてしまっているのだろう。自分でも不思議だった。

「ねえ、みんな卓球はちよつと中断して集まれよ」

そう言つたのは卓球が一番下手な部員だった。私達と隣の台でプレーしていた部員は打つのを止め、棚の前の輪の中に入った。一人少ないことを除けば、あっちゃんが部活を辞めると言い出して説得したときと似ていた。みんなを集めた部員は言つた。

「今話していたんだけどさ、もし美咲が部活に出てきたらちよつとやっちゃわない？」

「やるって、何を」

あっちゃんが訊いた。

「こらしめるってことだよ。だって美咲、前からちよつとウザいな
ーって思ってたし」

「そうそう」

相槌を打ったのは、前に美咲とジャスコで一緒にいた部員だった。
こつこつと私は何度も目にしてきていて、その度、つくづく人間
というものが嫌になる。今日まで味方だった人が、明日敵になるか
どうかなんて誰にも分からない。

部員の一人が、

「どこら辺がウザいって感じてた？」

と訊くと、練習しろなどとうるさい、何でもかんでも仕切ろうと
するのが鼻につく、しまいには夜遊びに誘っても断られることまで
を彼女達は挙げた。

「とりあえずうちらが何か良い案考えておくから、美咲が出てきて
も何食わぬ顔して接しときなよ」

と言い、とりあえず会議は終わった。私は、くだらないとは思
わなかった。ふとごみ箱に目をやると、あの日私が捨てたコンビニ
の袋があった。美咲の言葉が鮮明によみがえる。その都度私は思わ
ずにはいらなかった。

美咲と出会わなければ良かったのに。

今日の活動場所は体育館だ。顧問は美咲が来ていないのを見て眉をひそめた。

「大会まであと二週間なのに何を考えているんだ？ 田島は」

大きなため息をつくと私にこう言った。

「大会の十日前になっても来なかったら、田島の変わりに他のやつとペアを組ませるからな」

何でだろう、望んでいたことのはずなのに全然嬉しくない。そればかりか焦る気持ちが沸いてきた。

顧問が他の部員に指導している内に美咲にメールを送った。アドレス変更のメールだけは最近送ったから、すぐに私からだと分かるだろう。しかし、送ってすぐに携帯電話が振動し、来たのはエラー通知で私はがっくりした。アドレスを変えられてしまっている。どうして部活に来ないの？ あんなに卓球が好きだったのに。私と顔を合わせたくないから？ それも有り得るかもしれない。本当に、変わってしまったんだね。

私はみんなの足下を眺める。大きくなるぶし、汚れた体育館履きどれもが慌ただしく動いていた。その時、体育館に真っ直ぐ向かう足を発見し顔を上げてみると、中崎先輩だった。周りをきよるきよるしながら歩み寄って声をかけると、先輩は肩をびくりとさせた。

「先輩、拳動不審ですよ」

「いや、一年生から呼び出されていてさ、顧問に見つかったらマズいだろ」

「へえ、女の子ですか？」

「月岡さんの友達だよ」

私はぎよつとした。とつさにナツエを捜すが、いない、どこにも見当たらない。

「俺が弘樹のことについてしつこく聞き出したことにしておくよ。本当のことを言ったら益々疑われるだろ？ 嫌かな」

普通、嫌なのは先輩の方だろう。自分の弟が自殺したことを話さなければいけないということだし、しつこく聞き出したなんてシナリオじゃ先輩の印象が悪くなってしまう。

「じゃ」

止める間もなく先輩は行ってしまった。

卓球をしている間は何もかも忘れられる。私はあっちゃん打つボールを返すことだけに集中していた。すると、あっちゃんの打ったボールは台にバウンドせず、男卓がやっている方まで転がっていた。

「ごめんなさいと卓球台に顔を伏せるあっちゃんを見て微笑みながら、私はボールを取りに行く。身体をかがめてボールを拾い、ふと先輩はもう戻ってきたかと辺りを見渡すと、彼はラケットを磨いている最中だった。穏やかな顔をしていた。

「分かってくれたと思うよ」

生徒玄関で先輩は言った。

「少なくとも誤解は解けたはずだ」

もう独りで休み時間を過ごさなくてもいいのだろうか。また、グループの子達と話せるのだろうか。

「ありがとうございます」

私は頭を下げた。

「それにしても参っちゃうよな。今日の昼休みに来て、いきなり『月岡希里とどういう関係なんですか』だもんな」

先輩は頭をかきながら笑った。

「長い髪の女の子、いましたよね。その子は卓球部なんですけど、先輩のこと好きらしいです」

「ああ、いたいた。でも俺はああいう女子とは無理だな」

「どうしてですか？」

「だって、ずるいもん。他の人は色々訊いてくるのに、その人だけは一言も喋らなかった。自分で何にも言えないのに、ずるいよ」

私もそう思う。向こうから部員が歩いてくるのが見えたので思わず私は顔をしかめた。それに気付いたのか、先輩は早口で、

「あ、こうやって話しているのを他人に見られたら、また疑われちゃうよな。じゃ、また明日」

と、自分の学年のげた箱へ向かった。遠ざかる背中に、心の中で語りかける。

ありがとう。

心に空いた穴が、少しだけふさいだような気がした。

第17話 回復。

「希里、ごめんね！」

朝、教室に入るなりグループの子達が寄ってきた。

「本人に確かめたんだけど、うちの誤解だったよ。マジ悪かった」
「希里ちんのこと信じなくてごめんね」

ナツエは決して私と目を合わそうとしない。何も言わず、またみんなの後ろに隠れている。自分の席まで歩くとグループの子達も付いてきて、完全に私のご機嫌をうかがっている様子だった。昨日まではこちらを見ようとすらしなかったのに。態度が豹変し過ぎでちよつと笑える。机を囲むようにして立つ彼女達。私は名前を呼んでやった。

「ナツエ」

するとナツエはびくりとして私と視線を合わせた。怯えた瞳、何故そんなにびくびくしているのだろう。結局、後ろめたいのだろうな。

「……ごめんね」

ともすれば教室の喧騒にかき消されそうな小さな声だった。けれどその言葉は私の耳にきちんと届き、今まで自分から何もできなかったナツエが謝るのは相当な勇気がいったのだろうと考えると、少

しばらく持っていた憎しみなんてどうでも良くなった。

「ううん」

「あっそうだ、今週の土曜日みんなで遊びに行こうよ」

リーダー格の子が机を叩きながら提案する。

「いいねー、行こう行こう」

「どこ行こうか？」

ナツエは口を開いたり閉じたり、口を挟んでいいのか迷っている様子だった。だから私は話をふる。

「ナツエは、どこか行きたいところある？」

ナツエは一瞬驚いた顔になり、しかしすぐに照れたような笑みを浮かべて首をかしげた。肩にかかった黒い髪がさらりと揺れて、シヤツの白を目立たせる。

「うんと……渋谷」

その言葉に私は机にしまおうとしていた教科書を落としてしまった。渋谷と聞いて真っ先に頭に浮かぶのは、今時のファッションに身を包んだ十代の女の子達。ナツエのイメージとはかけ離れている。私も人のことはいえないが。

「まさか、なっちゃんから渋谷に行きたいなんて言うとは思わなかった。もしかして熱でもあるの？」

冗談好きが笑う。

「私は正常だってばー。まだ一度も行ったことないから、いつか行きたいと思ってたんだ」

リーダー格の子が、

「うちはよく行くから案内できるよ」

「じゃあ本当に行こっか？ 私も百年ほど行ってなかったし」

「ちょ、何歳だよ」

すかさず突っ込みをいれられる。

「希里は渋谷で大丈夫？」

大丈夫だよ、と答えた直後チャイムが鳴った。

「あ、じゃままた後でね」

彼女達は手を振ってそれぞれの席に向かった。椅子を動かす音や話し声、独りのときは耳をふさぎたくなるようだったのに今は平気だった。やっぱり私には、グループが必要なんだ。たまに疲れたり、汚いものにも思えても、今のポジションにいる限り楽しんでやろうじゃないか。私はまっすぐ前を向き、背筋を伸ばして背もたれに寄りかかった。

そっいえば。

美咲は、今も部室で弁当を食べているのだろうか。

何があつたのだろう。クラスに友達はいないのだろうか。女卓に美咲と同じクラスの人はいないし、誰なら知っているのだろうか。そう考えを巡らせている内、ぱつとある人物が浮かび上がった。

山田さん。

美咲と同じクラスだった。

朝読書の時間が終わると、後ろの棚に学級文庫の本を返したあつちゃんが私の隣で立ち止まり、軽く肩を叩いて、

「良かったね」

と言った。私が独りだったときに、教室ではまったく声をかけられなかったが、他のグループに所属しているのだから仕様がなと思う。それに、普段より部活で話しかけてくれることから、心配してくれているのは分かっていった。

「待つて」

自分の席に戻ろうとしていたあつちゃんは振り向いた。

「あつちゃんは、美咲のこと嫌い？」

話がいきなりすぎたのだろうか。あつちゃんは鳩が豆鉄砲をくらったような顔になったが、

「嫌いじゃないよ」

とはつきり言った。その答えに安心してゐる自分に気づき、やはり私は実のところ美咲を忘れられないのだろぅと感じる。あっちゃんが背を向け歩き出したのでほぅと息をついた。

もし、『希里は？』などと訊かれたら私は答えられなかつただろぅから。

「希里ー！」

声のした方を見ると、グループの子達が私に向かって手招きをしていた。

三十八人もの生徒が教室に収まっているのに、彼女達は真つ白な背景に赤いペンで描かれた三つの丸のよう。その丸は互いに重ね合つていて、より濃い赤色になっている、何故だかそんな感じがした。私は席を立ちグループの元へ向かうと、みんなは笑顔で迎えてくれた。人に求められるつて、こんなにも嬉しいことなんだ。独りだつたあの十日間は無駄ではなかつたような気がする。

失つてみて初めて、どれほど自分にとって大切なものなのか気付かされた。これからは結束するための目的あつちゃんの悪口を言うことはない、何となくそう感じた。

「そうだ、みんなで写真撮ろぅよ」

リーダー格の子が色付きリップクリームを厚い唇に塗りながら言う。

「復活記念にさ」

窓辺に並ぶと、後ろから差し込む陽光が背中を照りつける。携帯

電話を自分達に向けて構え、

「じゃあ撮るよ」

隣のナツエの腕が接触していた。

何でこんなに人と触れるのって嬉しいんだろう。レンズに笑顔を向けるとシャッター音がした。すぐに撮れた写真を確認めると、多少逆光で黒っぽくなってはいるもののしっかりと四人は写っている。身長も顔立ちも違うが、プリクラを撮るときにすました笑顔とは少し違う、三日月の形になった目と白い歯をみんな見せていた。

「良かった」

というナツエのつぶやきはすごく私の身に染みた。

みんなと友達で良かった。

そして授業中、こっそり山田さんにメールを送る。普通なら私からメールを送ることは有り得ない。けれど私は美咲のことが気になつてしまい、後悔をするのは嫌だったからだ。それにもし嫌なことを言われても、私には友達がいる。

『聞きたいことがあるから、今日の放課後会わない?』

美咲の言葉で空いた穴は今も完全にはふさがっていない。でも、だからといって美咲がこのまま部活にも来なく、大会、そして夏休みが過ぎてゆくのはそんなのきつと良いはずがない。

山田さんのことも、このまま嫌な思い出として終わりがたくなかった。

第18話 二人きり。

顧問が出張していることもあり、今日だけは部活がない。私は誰もいなくなった教室で、顔を下敷きで仰ぎながら窓の外を眺めていた。デイズニーのキャラクターが描かれた下敷きからくる涼しい風が、髪の毛をなびかせる。窓から顔を出し、新鮮な空気を肺に溜め込んで空を仰いだ。太陽はまぶしくて、どこまでも青い空が広がり、強張った心がほぐれてくる。

いきなりガラガラっと戸が開く音がして私は振り返った。戸の向こうに、まんまるな目をきよろきよろとさせている山田さんの姿があった。

「話ってなあに？」

彼女は戸を閉めると笑顔で訊いてきたので、私は窓から離れて机に手をつきながら歩み寄った。

「美咲のことなの」

やけに廊下は静かで、思った以上に私の声は教室に響いた。

「美咲？」

きょとんとした顔になる。

「美咲、クラスではどんな様子？」

私はロッカーに寄りかかる。なるべく柔らかい口調で質問しよう
と思っていたのに、何だか深刻な話をするかのようなトーンになっ
てしまった。山田さんは、ああ、とすべてを合点したかのような顔
つきになり、

「独りぼっちだよ」

口元にはうつすらと笑みが浮かんでいた。

「いつからなの、何で独りぼっちなの」

私は畳みかけた。ロッカーの冷たさがYシャツごしに伝わってく
る。

「うーん、二、三週間前くらいからじゃないかなあ？ 何でって、
あの性格だもん」

「あの性格……」

黒板の深緑色を見つめながら反芻した。美咲はみんなから好かれ
ていると思ったのに、部員だけでなくクラスメイトの中でも嫌って
いる人がいるなんて。どんどん美咲という人が分からなくなっ
てゆく。

「私は、そんなに悪いところがあるように思えないんだけど。どこ
ら辺が嫌いなのか？」

山田さんは腕組みをしながら考えている様子だった。黙っていれ
ば、本当に可愛いのだけれど。

「何か、自分のことが一番優れてると思ってる感じとか。ていうか、すべてだね」

そう言っただけで笑ったが、私は笑えない。確かに高校に入ってから美咲は偉そうに振る舞っているような感じを受けるかもしれない。だけど……。

「それはきっと、自分のすることに自信を持っているからだよ」

私は自分に自信がないから美咲がうらやましい。

「やだあ、それってナルシストじゃん」

山田さんは眉を上げた。そうじゃない、美咲は自分のすることとちゃんと責任を持つているんだ。悪いことをしたら謝るし、人を困らせたりしないよう人一倍慎重に発言をしている……と思う。やはり私は自信を持ってない。

「それよりもさ、あの人彼氏にふられたんだってね」

山田さんは大げさに手を動かし、せわしなく瞳を動かした。うつすらと笑みを浮かべていて、他人の不幸を喜ぶなんて、と軽蔑しながらも私はあの日の部室のことを思い出していた。『最低』と言われたあの日のことを。

私はもう親友じゃないのだから、これ以上関わらない方が美咲のためなのかも。しかし、次の言葉を聞いた瞬間、やはり私は美咲のことを忘れることはできないと思った。

「あの人のこと、いじめちゃおうと思うんだ」

私はしばらくの間固まったままだった。校庭で活動中のサッカー部員の声が鼓膜に届く。背中が汗ばんでゆく。

「何言ってるの……？」

ようやく出た声は、自分でも驚くほど情けない声だった。女卓が言った『やつちゃわない？』はまだまだ生ぬるい言葉だけれど、山田さんが口にしたのは本格的な行為、『いじめ』。中崎くんはそれに殺されたんだ。

「うち、同じクラスだし嫌っている人は他にもいるからできると思うんだ。希里ちゃんの上履きにがびようでも入れる？」

この子は何を言っているんだ？ 中崎くんが死んだときあんなに泣いていたくせに、何も学んでいないのかとあきれて物が言えない。「何か言つてよー。もしかして、あの人のこと好きなの？」

山田さんが私のYシャツを引っ張った。これほど人を嫌悪したのは初めてかもしれない、こんな人には触れてすらほしくなかった。

「信じられない」

そんな言葉が自然と口からこぼれた。

「信じられない。中崎くんのがあんなったのに、何も分かってないの？ そんなことして人を傷つけて何が楽しいの？」

山田さんは思わぬ反撃に驚いて、口を半開きにしている。私はとくと、言っている内に不思議な自信が湧いてきて更に続けた。

「中三のとき、友達のいなかった山田さんを救ったのは美咲じゃない。忘れたとは言わせないから」

「希里ちゃん、どうしたの？ そんなむきにならないですよ」

山田さんはおろおろした。

「山田さん、中崎くんのことどう思ってるの」

何を吹き込んだのかは知らないが、美咲が中崎くんをいじめるようになったのも、仲がおかしくなったのも、山田さんが根本的な原因なんだ。私はロッカーから身体を離し、代わりに手を強く押し当てると、背中が密着していた部分が温かくなっていた。

「うちは死ぬほど嫌いだった」

山田さんは目を伏せ、私が彼女を凝視すればするほど顔はうつむいていった。

逃げるなよ。

「なら、死ねば？」

本人にこんなことを言ったのは、初めてのことだっただろう。山田さんはばつと顔を上ると、戸惑いの瞳で私を見つめ、自分はよっぽど憎悪のこもった瞳でにらんでいたのかもしれない、みるみるうちに目がうるみを帯びた。

「泣かないでよ。一つ言っとく、山田さんが美咲をいじめて自殺す

るようなことがあったら、私は一生許さないから」

山田さんの鼻の鳴る音がした。泣くなと言われると余計泣きたくなってしまうのだろう、今にも涙がこぼれ落ちそうだった。いじめなんかに比べたら、美咲に言われたことなんてちっぽけなものだ。皮肉にも山田さんの口走った言葉のおかげで心の穴がどんどんふさがってゆく。

どんなことをされても、どんなことを言われても、私はやっぱり美咲が好き。

声が震えるのを抑えるように、静かに山田さんが言った。

「何でそんなにあの人の肩を持つの？ あの人は、美咲は、希里ちゃんのことを裏切ったんだよ。それでうちを選んだんだよ」

分かっているじゃないか。

「裏切ったのは私の方だよ」

だって、私が美咲を信じきれなかったから。山田さんはついに涙を一滴こぼし、私のつぶやきを無視して語り出した。

「うち、希里ちゃんにだけは本音で話せたんだ。美咲は何ていうか、怖かったの。嫌われないようめちゃくちゃ気を使った。それなのに希里ちゃん、うちの元からいなくなっちゃうだもん。うち、昔から友達いなかったから、どうしたらいいのかわからなかったんだよ……」

最後の方はしゃくりあげていた。突然の告白に私は動揺した。何

故山田さんがこんな嫌な性格なのかなんて考えたこともなかった。

悪口を言うのは上辺だけの付き合いの子達が使うつながらのための唯一の手段。だから、山田さんは中崎くんの悪口をあんなにも言っていたというのか。しつこくしてきたのも、私が離れていけないために必死だったのではないか。

顔を歪めて嗚咽を漏らしている山田さんを眺めた。この子はどんな環境で育ってきたのだろう。もしかしたら、あまり幸せではなかったのかもしれない。そう考えていると、山田さんへの激しい感情がしぼんでいった。気づかない内に私、山田さんを傷つけていたんだ。さすがに謝る気持ちは湧いてこないが、友達をつなぎ止めようとして空回りしている山田さんが何だか可哀想に思えた。

「山田さんは間違っていたと思う」

でも、私も正しかったとは言いきれない。事実無根の悪口まで言ってしまったていたし、もつと客観的に見ていれば美咲との仲が壊れることもなかっただろう。

教室の前を女の子数人の笑い声が通り過ぎる。ここだけは、他とは違う空間のように思えた。私がこんなことを他人に言うことができるなんて思わなかったし、山田さんが泣き出すとも思わなかった。

美咲だけじゃない、きっと私も変わったんだ。

口の中が乾いている。大分落ち着いてきた山田さんの顔を見ていたら、いつか忘れたけれど一緒にマクドナルドに行ったとき、ポテトをおごってもらったことがあるのを思い出した。そのときは感謝なんてしなかった、だって嫌いだから。でも、もし、山田さんが死んだりしたならば私は泣くだろうか？ もうどうでも良いか。やつ

ぱり私は山田さんが嫌いだし、許せないし。

でも、これからもどこかで生きていてほしいと思った。

心に余裕を持てるようになったのは、山田さんのせいで失うものなんてもうないように思えたからだ。

「とりあえず、美咲をいじめたって何の意味もないと私は思うから。もういいよ、帰って」

私はそう言い放つと、自分の席に向かって通学バッグを肩にかけた。後ろは振り向かず、山田さんを残して前の戸から教室を出る。その時、

「バイバイ」

と小さな声が聞こえた。

山田さんと話すのは今日で終わりにしよう。新しい友達もできただろうし、これから私は別々の人生を歩むだろう。今日を境に変わってほしいとも思った。

もう、一緒にいた過去は過ぎ去ったから。

外に出ると夏の太陽が私をじりじりと焼き付けた。制服姿の人達が自転車で私の横を通り過ぎ、校門の外へ消えてゆく。駐輪場に並んだたくさんさんの自転車。銀色の車体が、日光を反射して輝いていた。

第19話 報告

部活動中、いきなり開かれた部室の戸にみんなの視線が向けられた。立っていたのは、あんなに長かった前髪が眉辺りまで短くなっている美咲だった。ばつの悪そうな顔をしている。

「美咲、久しぶりじゃん。寂しかったよお」

何人かが美咲に群がる。白々しい、と思った。『こらしめよう』などと言っていたのはどこの誰だったか。

「ごめんね」

美咲は部室を見渡してそう言うと、私の方へ歩いてきた。しかし棚の前でペットボトルに入った麦茶を座って飲んでいる私のことは一度も見ようとせず、棚に入った自分のラケットケースを手にとった。まるで、私と部室で昼休みを過ごしたことなんてなかったかのようにだ。

「そつえば先生怒ってたよ。こんな時期に休むなんて、って」

「それはやばいな」

美咲が笑った。もう恋人に別れを告げられたことは吹っ切れたのだろうか。無理して明るく振る舞っているだけかもしれない。

「あと十一日しかないんだ」

黒板を見てつぶやいた。赤、青、黄色など、色とりどりのチョークを使つて『大会まであと11日』と書いてある。部員が書いたものだ。明後日の体育館で部活をやるときに美咲が来ていなければ、ダブルス・団体戦共に出ることができなかったのだから、まさにギリギリセーフだ。

「じゃ、やるつか」

私に声をかけたのかと思つて美咲に目を向けると、頭にタオルを乗せた他の部員が彼女の前に立っていた。

楽しそうに会話を数言交わし、

「ちよつとトイレに行つてくる」

と部員が立ち去ると美咲は視線を感じたのか、私の方を向いたので目が合ってしまった。先に目をそらしたのは私の方だった。後ろめたいのはむしろ美咲の方だろうが、私だってもう少し気持ちを察するべきだったと思う。

頭の中ではダブルスの練習はしなくて良いのかと心配だったが、美咲は他の部員と打ち合っている。もう、勝てなくてもいいや。ごみ箱と美咲の顔を交互に見て、私は投げやりな気持ちにならざるをえなかった。

「希里」

目の前にナツエがいた。渋谷に行ったときに買った緑色のヘアピンを頭に付けている。

「何？」

「ちょっと体育館まで付き合ってくれない？」

「どうして」

「お姉ちゃんに呼び出されてるんだよねえ」

ナツエが言う『お姉ちゃん』とは部長のことだ。そう、全然似ていない二人は姉妹だった。

「何で呼び出されているの」

「私と三年生を試合させたいんだって。私のラケットってみんなと違うじゃん。ラバーが。だから同じラバーを使っている人と大会で当たった場合に備えて、予行みたいなのをさせたいんだって」

確かにナツエは強い。だけど先輩の中には信じられないほど上手い人もいるし、何よりも、

「顧問に見つかったら怒られるよ」

「大丈夫、今日はいないよ。お姉ちゃんが言ってた」

ナツエは胸を張って答える。何故私もついて行かなければならいいのか不明だが、きっと一人で体育館まで行きたくないという単純な理由なのだろう。私は了解した。私達は学年部長には何も言わず部室を出ていく。部室よりは廊下の方が幾分か涼しかった。

「希里つてさ、田島さんと喧嘩してる？」

顔を傾けて尋ねてきた。私は苦笑いを浮かべ、

「喧嘩じゃないけど、まあ、色々あって」

と答えた。すると、

「そっか」

とだけ言い、それっきり黙り込んだ。

教室に体育館履きを取りに行き、また二階まで戻ると渡り廊下を通りまた階段を上る。ナツエに勧められるまま私まで体育館履きを手にとっていた。

「いいじゃん、誰かと話していれば」

ナツエは言った。誰とだよ、と訝しげに訊くと

「中崎先輩と」

と言うので私は階段を踏み外しそうになった。

「何言ってるの、誤解だよ」

「分かってるって。もう先輩のこと好きじゃないし。そうじゃなくて、先輩の方が希里のこと好きなんだと思うよ。話してあげたらいじゃん」

軽々しく話す。これは本心なのだろうか。それに、中崎先輩が私のことを云々いうのもそれはそれで誤解だ。

「それも違っって……」

「違わない。あつ、本当に私は好きじゃないからね。他に好きな人ができたの」

大げさにずっとこけてみせると、ナツエはあははと笑った。

「伊田先輩のこと、好きになっちゃった」

どこかで聞いたことのある名字だ。確か……。あつ、と思わず声を出した。朝練があつたあの日、あるなんて知らされていなかった私は、学校に着いてからどうだった？ と訊いた。するとナツエが答えた。中崎先輩と伊田先輩が隣の卓球台でやってたよ、というよなことを。ふうん、ナツエって年上が好きなんだ。いや、そこに感心したって仕方がない。

「何で中崎先輩が私を好きだと思うの？」

「だって、中崎先輩が希里のことを責めたっていうのは嘘なんですよ。嘘じゃないとしても、必死だったもん。『だから月岡さんと仲良くしてやってくれ』って」

やけに優しい声色で答えた。先輩が私のグループの子達に呼び出されたときのことを言っているのだろっ。あ、もしかしたら彼女達私が私の元へ戻ってきたのは、中崎くんのことを聞いたことで私に同情したというのもあるかもしれない。

「中崎くんの話聞いてどう思った？」

「中崎くんって……弟の方のこと？」

ナツエの瞳に戸惑いの色が現れた。

「そう」

ナツエは体育館履きが入った袋の長い紐を、手で巻き上げて短く持つ。そして困ったような笑みを浮かべたまま、なかなか口を開こうとはしなかった。

「あれは、本当の話。私達のせいで自殺したの」

この話を、高校の友達に自分から話すのは初めてだった。別に、同情してもらいたいわけじゃない。ただ、他の人が聞いたらどう思うのだろう？　ただ単に知りたかった。

「可哀想だなんて思うよ。でもいじめを止めるなんて、誰でもなかなかできないよ。覚えてくれていてだけでもさ、何て言うか、生きている人ができる一つのことなんじゃないかな」

言ったあと恥ずかしそうに目を伏せた。

覚えてくれているだけで。

それだけで良いのだろうか。階段の一步一步を踏みしめながら私は考えた。階段が途切れると、開かれた扉から溢れる明かりが私の視界に入った。体育館に入る寸前、

「ありがとね」

と私は言った。

「こっちこそ、ありがとう」

「何だよお、かしこまっちゃって」

ナツエの肩を軽く小突く。笑い声が響いた。

先に帰ってていいよ、と言い残してナツエは試合をしている部長の元へ走り寄っていった。私は壁に手をつけて入り口から顔を覗かせ、中崎先輩を捜す。もし、誰かと喋っていたり卓球をしていたりしたら諦めて部屋に帰ろうと考えていた。

しかし、先輩は端に座って首にタオルをかけ、どこかの祭りで入手したかのような小さなうちわで仰いでいるところだった。声をかけようとしたが、名前を呼んだら目立ってしまうかもしれないし、だからといって入ってゆくのは余計に目立つ。私はひたすら視線を送って気が付いてくれるのを待った。

幸運にも、先輩がこちらに目を向けた。私の姿をとらえると、驚いた表情になってうちわの動きが止まった。首からタオルを取り後ろに放り投げると、立ち上がってこちらへ歩いてくる。

「どうしたの？」

先輩はうちわで私に風を送った。かすかな汗の匂いが漂ってきて、風は私の前髪をさらう。

「友達の付き合いで来ただけなんですけど、ついでにちょっと訊きたいことがあったので。今、いいですか」

「いいよ。どこにする。食堂の前？」

思わず私は笑った。先輩の手の感触を思い出してちょっと幸せになる。

「それは駄目か、また疑われちゃうもんな」

「でも、もう中崎先輩のこと好きじゃないらしいですよ」

言いながら私は階段を降り、廊下が見える階段の一番上の段に腰を下ろした。ここでも人に見られる可能性はあるが、これなら私達も誰かに見られていることにすぐに気が付く。知らない間に見られているというのは、なんとも嫌な感じがするものだ。

「弘樹くんのことを覚えているっていうだけでも、何かしていることになるんですか」

「いきなり何だよ」

先輩は眉を上げて笑みをこぼした。

「先輩を呼び出したグループの子に言われたんです。あ、そういえば仲直りできました」

大事な報告を忘れていた。先輩には感謝しているけど、お礼を口にするのは恥ずかしくてできなかった。

「ホントか？ 良かったなあ！」

ぱあっと満面の笑みが広がり、自分のことのように喜んで肩を強く叩いてきた。

「ちょっと、先輩痛いつて」

それよりも、先輩に触れられると背中がこそばゆくなる。ただの恥ずかしさとは違う、奇妙な感覚。横顔を見ているうち、あの高い鼻のラインを指でなぞりたい欲望が沸いてくる。

「確かにそうかもな」

と先輩が先ほどの質問に答え出したので、私は膝の上でぎゅっと両手を結び耳を傾ける。

「覚えてくれてるだけでも、弘樹は充分嬉しいと思う。忘れられることが一番怖いだろうから」

そうなのか。しかしそれですつきりするわけがない、ずっと私は自分の犯した罪に苦しんできた。登場回数は少なくなったものの、夢だつて未だに見る。

「死んだやつより、生きているやつの方が大事なんだよ」

先輩はいつもドキッとさせるようなことを言う。私に言ったのだろうけれど、先輩の気持ちを言うているようにも聞こえてしまい私は落ち着かない。何よりも、隠された意味があるんじゃないかと勘ぐりたくなった。私は足を組んで廊下にはられたポスターを見ながら、

「私って、もう美咲に構わないほうがいいのかなあ」

とつぶやいた。突き飛ばされた身体、彼女の涙、『何も分かつて

いなくせに』。私にできることなんて何もないのかもしれない。
ボールのバウンドする音が聞こえる。

「田島さんと何があつたかは知らないけど、すべてが本物だとは限らないと思うよ」

「あれは本音です」

あれ、なんて言つたつて先輩は分からないよな。私は両手を床について、淡い光を発している蛍光灯を見つめた。

「前に私、山田さんのこと話しましたよね。この前その人と喋ったんです。そしたら泣いちゃって」

先輩の瞳がこちらを向いているのには気付いていたが、あえて目を合わせないようにした。

「それで色々と言って、話を聞いて。そしたら、何でかよく分からないけど、すっきりしました」

「人生さ、無駄なことなんて一つもないんだと思うな」

そう言つと手に持っていたうちわを階段に滑らせた。うちわはかたかたという音と共に滑り、廊下に出たところで止まる。突然の理解不能な行動に驚いていた私をよそに、先輩は手について立ち上がりうちわを拾った。

「来いよ」

仕方なくお尻をはたいて立ち上がり、階段を降りる。

「足下、見るよ」

足下？ 私は視線を下に向けた。すると端のほこりがたまった場所に、小さな花が落ちていた。とはいっても造花だ、赤い花が先っぽに付いていて、茎がまっすぐに伸びている安全ピンの付いた代物。私は手にとり、誰かに踏まれたように変形している造花を見つめた。これをどこかで見たことのあるような気がする。

「入学式」

先輩がつぶやいた。

「あっ！」

思い出した。これは、三ヶ月前くらいの入学式の日、先輩達が新入生の胸にさしてくれたものだ。しかし式が済んだら用はない、その日の内に捨ててしまったと思う。こんなところで再会を果たすなんて。部屋の片付けをしていて、たまたま子どもの頃に遊んだものが見つかったときと同じような気持ちだ。

「だから、無駄なことは一つもないって言っただろ？ 俺がうちわを滑らせなければ、この花には気づかなかったよ」

先輩、実は仕組んでいたのではないか？ 疑わしい。しかし私の手は、しっかりと造花を胸の前で握っていた。

第20話 過去の手紙

部室に戻ると、私はすぐにいつもと違う『何か』を感じ取った。

二人の部員が煙草を吸っているせいもあるのかもしれないが、それだけではない。美咲に向けるみんなの目が冷たかった。あつちゃんが悪戯するような瞳で私を見つめている。

それよりも、煙草というのはまずいでしょ。吸っている人が結構いるのは知っていたが、部室では吸わないでほしい。副流煙、という言葉を知らないのだろうか。部員が口にくわえると先がぼつと赤くなり、紫煙をくゆらしている。

「だから、部室では煙草吸わないでよ。煙いし」

本当に美咲は煙たそうだ。煙で目がうるんでいる。それならもう少し喫煙している子達から離れればいいと思うが、何よりも彼女の正義感からだろう。

「あたし、何か気にさわること言った？」

私はやつと気が付いた。そういうことか。彼女達は美咲を『こらしめている』最中なのだろう。それにしては、何とも下らなく、小さなこらしめだろうか。

「だから止めてって」

美咲は何度か手を伸ばして煙草を取り上げようと試みるが、煙草が動く度びくりとして引つ込める。先端には火がついているのだから怖いのは当たり前だ。特に吸ったことのない人にとっては。

「何だよ、良い子ぶっちゃってさ。もう彼氏とはやっちゃったんでしょ？ あっ、彼氏じゃなかった、元彼だあ」

下品にげらげらと笑った。指に挟んだ煙草の灰が今にも落ちそう
だ。美咲はうつむいて、手に握りこぶしを作った。あっちゃんが私
の方へ歩いて来て腕に巻き付く。これはやばい雰囲気だってことは
私も分かっている。だから私は意を決して煙草を吸っている部員に
言った。

「有沢さん達、先生に見つかったらやばいよ」

私の言いたいことはそうじゃないのだけど。とにかく、これ以上
美咲には話しかけないで。

「先生なんてほとんどここら辺には来ないじゃん」

ごもつともだ。

そう言いつつも、灰が落ちるとさすがにまずいと思ったのか、二
人は目配せしたあと部室を出て行った。トイレで吸うつもり、らし
い。みんなは安堵の息をついた。部員達がイメージしていた『こら
しめる』とは、もつと優しいものだったのだろう。そんなに傷つけ
ることのない、例えば来たメールを返さないとか、ボールを拾って
あげないとか。

ガン、と大きな音がした。

あっちゃんの手がびくつと跳ねる。音のした方に目をやると、美咲
の片足がロッカーに密着していて、今の音は彼女がロッカーを蹴つ
た音だと分かった。私は何も言葉をかけられなかった。やはりこう
いうときの美咲の扱い方は難しい。ただ一つ、私は口を出さない方

がいいだろうと思った。前回でこりこりだ。

「彼氏と別れたって本当？」

馬鹿、そんなことは今訊いたら絶対にいけないだろう。質問したのは噂好きだと有名な女の子だ。案の定、美咲は顔を上げてその子をにらんだ。ひるんでしまったようで、もうあとは何も言えない。

「何してるのお」

「もめ事はいかんぞ」

冗談めいた口調で煙草を吸っていた二人が戻ってきた。美咲は噂好きの子から視線をそらし、大きな声で、

「早く部活やろう」

と言った。サボっていたくせに、というみんなの声が聞こえてくるようだった。煙草を吸っていた子の一人は余裕そうな表情で何やらうなずいている。

「ねえ、大会も近いんだし明日朝練やろうよ」

明るいい声で提案したのは、美咲と一番仲のよい部員。空気が緊迫した。しかし、何も知らない美咲は、

「そうだね。やるっか」

と言った。何か、意図があるに違いない。それはみんなも感じていたことだろう。

ナツエも体育館から戻ってきて、美咲がトイレに行った直後先ほどの部員は真顔で言った。

「朝練の話なんだけど、みんなは行くなよ」

ごくりと私は息をのんだ。

「朝早くに来たのに誰も来なかったら面白いじゃん。だから、みんなは絶対行ったら駄目だからね」

「それ、ナイスアイディア。約束だからな」

と煙草を吸っていた部員が念を押す。部室で部員が来るのをずっと待っている美咲の姿を想像し、できることなら断りたかった。しかし、断れるような雰囲気ではない。あっちゃんもナツエも黙ってうなずいていた。

戻ってきた美咲が何時から朝練やる？ などと言う度私はいたたまれない気持ちになる。本当に、みんなは来ないつもりだろう。私だって、結局そうしてしまうに決まっている。美咲と二人きりなんて非常に気まずいし。

何食わぬ顔で美咲と話す部員達。

「じゃ、また明日の朝ねー」

と私達に言い、美咲は部活を出て行く。みんなは忍び笑いをした。小さなことに思えても、美咲は絶対に傷つく。私はどうしたらいい？

そんなことを何度も考えながら私は帰宅した。夕食はオムライスで、私はかぶりついた。食べ終わるのはいつにもまして早く、母も目を丸くした。

自分の部屋に戻り、私は勉強机の上に出しっぱなしのプリクラ帳を寝転がったまま開いた。

一番始めのページには、まだ小学生のような二人のぎこちない笑顔がある。私は青いボーダーのＴシャツ、美咲は赤いトレーナー。この日、私は生まれて初めてプリクラを撮った。次のページを開いても、またしても美咲とのツーショット。指でハート型を作っている。まだ三年前に撮ったもののに、ひどく遠いことのようにだった。

どんどんページを開いていくと、山田さんが写っているプリクラがあった。私と美咲と、山田さん。彼女の首元のところには、一本の傷が走っていた。私がはさみを握ってつけたものだ。今思うと、自分がひどく情けない。

これが、美咲と撮った最後のプリクラ。

次のページを開くと私と、そして私のグループの子達が写っていた。しばらくそのメンバーのプリクラが続くと、あとは白紙。真っ白なページを送った。最後のページを開いた瞬間、いきなり私の視界を白いものが覆った。

見てみると、それは小さく折られた手紙だった。何故、プリクラ帳に手紙なんかが挟まっているのだろう？ 宛名は『希里へ』。差出人の名前を見なくても漢字だけがやけに大きいその文字ですぐに分かった。

中学生の頃、手紙交換をするのが女の子の間で流行っていた。可愛いメモ帳に色とりどりのペンで他愛のない内容を綴り、複雑な折り方をして教室で友達に渡す。私と美咲も毎日のように手紙交換をしていた。美咲からもらった手紙は前まではすべてとっておいた。しかし卒業と同時に捨ててしまい、手元には一通も残っていない……はずだった。

私は起き上がり、口を固く結んで手紙を開く。

『希里へ

ハロー あんなに長い手紙ありがとう！ 嬉しくて涙ポロポロ出ちゃったよ（笑）ていうか、宿題終わらないよお（泣）かなり難しいし。明日希里の写させてもらおうかな……いやいや、そんなのはいけないよね。もう少し頑張ってみます。

今日部活で先生に言われたことなんて気にするなよ！ 希里はすつごく努力してるもん。素質だってあるよ！ あたしが保証する（あたしじゃ意味ないか）。

いつも思うんだけど、希里ってめちゃくちゃカワイイよね（^^）あたしが男子だったらほれるよ（笑）あたしたち、かなり気が合うと思うんだよね。ホントーに大好きだよ！ 何があっても、あたしは希里の味方だから。

希里と出会えて本当に良かったなって思うな。

何かラブレターみたいになっちゃったね（笑）じゃあ、また明日！

FROM 美咲』

涙を抑えずにはいらなかった。目からぽとりと水滴が落ち、ピンク色の文字が書き連ねられた手紙に染みをつくった。何で、美咲と出会わなければ良かったなんて思ったんだろ。美咲とはたくさん思い出があるのに。卓球の顧問に怒られたときは慰めてくれた

り、自分の描いたポスターが賞に選ばれたときは我が身のことのよ
うに喜んでくれたり、数え切れないほど笑い合ったり。

私は幸せだったと思う。美咲には、たくさんのもをもらったか
ら。もしも出会ってなかったら、卓球部に入ることなかっただろ
うし、何よりもあんなに楽しくはなかったと思う。

美咲と出会えて良かった。

人はみんな変わってゆく。きっと、美咲と親友じゃなくなったの
は山田さんのせいじゃないんだ。美咲と過ごした日々は楽しかった。
それで、いいじゃないか。私が今やらなければいけないことは、美
咲を求めることでも逃げることもない。

私は枕元に置いたティッシュで目を拭きながら、またプリクラ帳
に手紙を挟み元の場所に戻した。私にはある決意が芽生えていた。

明日の朝、早く起きよう。

私は、美咲が好きだから。それが、今私がやれる唯一のこと。

第21話 神聖な朝

早朝の学校は静かだった。生徒の喋り声や物音の聞こえない校舎内は、いつより空気が綺麗に感じた。私はその空気を肺にいっぱい取り込んで、誰もいない教室を出た。自分の足音が廊下に響く。少しだけ遅刻だった。しかしそれも意図してやったこと、私よりは美咲が先に着いた方が良くと思ったからだ。制服のまま階段を降りる。一階に着くと、ボールの弾む音が耳に入った。まさか、美咲以外に誰か来ているのだろうか。私は息をひそめながら忍び足で部室まで歩く。外からは中の様子が分からない。戸に耳をくつつけると、ガタンと音が鳴ってしまった。

「誰？」

中から声が飛んできた。私は戸に手をかける。

部室にはやはり美咲しかいなかった。彼女が立つ台の向こう側にはボールがたくさん落ちていて、独りで練習していたのだと分かった。

「おはよう」

とりあえずそう声をかける。でも美咲は答えずに、私の顔を見て固まっていた。無理もない、この部室で一悶着あってからは一度も会話を交わしていないのだから。

「他の部員なら来ないよ」

と告げると、意外にも美咲はすんなりと受け入れた。

「だろうね」

「どうして？」

「あの人が自分から朝練やろうなんて言うのはおかしいと思ったし、それにみんな態度がおかしかったから。約束の時間が過ぎても誰も来ないし」

「私は来たよ」

美咲は目を伏せた。返す言葉を考えているのだろう。だから私は付け足した。

「一緒に、朝練やろう？」

「ごめん」

「え？」

「言い過ぎた。でも、月岡さんにはやっぱり分からないと思う」

あの日のことだと分かった。前髪が短くなったから顔がよく見える。美咲は目をはらしていた。部員にあまり好かれていないと気付いていたためか、それともクラスでの孤立のせいなのかは分からない。ただ、美咲は昨晚泣いたのだろうということだけは見て取れた。確かに私には分からないかもしれない。もしかしたら私のああいふ言葉がずっと前から疎んじられていたのかと思うと、少し怖かった。

「……一緒に、朝練やろう？」

私は無理に笑いながら再び言った。あの日のことには、もう私は触れない方がいい。私は、卓球をしにきたんだ。

「うん」

美咲は小さくうなずいた。そしてボールを拾い出したので、私も手伝おうとしたら、

「いい」

と断られてしまった。気を取り直し、ラケットケースから自分のラケットを取り出てスカートのしわを伸ばしながら卓球台の前に立つ。無造作に床にある箱に拾ったボールを入れ、すべてを拾い終わると私に向き直った。美咲とプレーをするのはかなり久しぶりだ。

「いい？」

私は首を縦に振った。ラケットを構え、美咲の左手に乗ったボールを見つめる。回転のかかっているボールが飛んできて、私がラケットを振ると跳ね返り、ネットを越え、それを美咲が打ち返す。ボールの音が部屋に響いていた。普段ならボールが遠くに飛んでしまったり相手にぶつかったりしてしまったりときくらしいのに、私と美咲は失敗するだけでも謝った。気を使いすぎている。

それでも、私は楽しかった。打ち返す度私のスカートが舞い上がるが、押さえる余裕なんてなかった。それに、美咲になら見られて恥ずかしくない。お腹のところでこぶしをつくっている美咲の左手はとても細く、打ち返すと少し揺れる。そんなところを見ているもんだから、私は空振りをしてしまった。

「ごめん」

赤くなりながら棚に当たって跳ね返ったボールを取りに行く。同時に美咲も取りに行き、先に拾うと私に手渡した。

「はい」

「ありがとう」

手渡す際に触れた手はとても冷たかった。恥ずかしそうに目をそらす美咲。

「冷え性？」

「うん」

「よくさ、手が冷たい人は心が温かいって言うよね」

言ってから口にしない方が良かったかと後悔した。気まずい空気が流れているので私は笑って、

「あ、だから私手が温かいのか」

「月岡さんは温かいよ。心」

美咲はそう言うと、背を向けて台の前に戻った。ぶっきらぼうな言葉、だけど私は嬉しくてまた泣きそうになった。

「ダブルスさ、明日から練習しよっか」

打ちながら美咲は言った。私は嬉しくなって元気よくうなづく。

「うん！」

「大会、勝とうね」

「もちろん」

明日からは、緊張せずにダブルスの試合ができるようになるだろう。朝練に来て本当に良かった、そう思う。しかし、大会が終わって六日後に迎える夏休み、それが過ぎても美咲は部室で独り弁当を食べる日が続くのだろうか。しかし私には何もできない。

「部活のことは大丈夫だと思うよ」

口にしたら何も分かっていなくせにとまた思われてしまうかもしれない。でも、私は言わずにはいられなかった。

「みんな、また普通に接してくると思うよ」

「本当？」

「うん」

「なら、良かった」

美咲は微笑んだ。

「もしあたしがいることでみんなが嫌な思いしているなら、部活休

まないといけないうちで思ったから」

そう言って笑った。またしても他人のことを考えているのか。ここは怒るのが普通の反応だろう。それにしても、卓球は人を饒舌にするのだなと思った。

人の声が聞こえてきた。私は卓球を中断して壁掛け時計に目をやったが、三時のところで針が止まっている。電池が切れているのだろう。だから窓の鍵を開け外を覗くと、茂みの向こうから制服に身を包んだ三人の女子生徒が歩いてくるのが見えた。朝の静けさは微塵もなく、外も登校してきたときより明るくなっていた。

「もう登校する時間なのかも」

私は窓を閉めた。

「終わりにしようか」

言いながら美咲はボールの入った箱を棚に戻し、

「月岡さんが来たこと、みんなには言わないから」

何で美咲は私の気持ちが分かるのだろう。確かに、なるべくなら黙っていてほしいと思っていた。

「ありがとう」

聞こえているのだろうか返事は返ってこなかった。美咲は戸を開けると振り向いた。

「教室に帰ろう」

「うん」

窓から離れて戸をすり抜けると、美咲はぴたりと閉めた。

そして私達は、大会までの時間の大部分をダブルスの練習に費やした。

第22話 大会。

まだ学校に來ている人が少ない頃、駐輪場の前には三十人近くの人が集まっていた。自転車を止め駐輪場を出ると、私の姿に気づいた人が手を振ってきた。あの体型からしてあっちゃんだ。近付いていくにつれ、私は驚かずにはいられなかった。あっちゃんの隣にはナツエがいたのだ。だからつい、

「どうしたの？」

とあっちゃんとナツエを交互に見ながら訊いてしまった。

「いやー、ひよんなことから気が合っちゃって」

「ひよんなことって何だよ」

「……些細なこと？」

「いや、意味は訊いてないって」

あっちゃんとナツエは笑った。

「希里が来るの遅いからナツエちゃんに訊いたら、何故か好きな歌手の話になって。ナツエちゃんもB・Zが好きなんだって！」

へえ、そうなんだ。あっちゃんもB・Zが好きだから、意気投合してしまっただけか。何の曲が好きかなどと話し出した二人はほっというて他の部員達を見渡すと、普段と変わらず派手な部員達と喋っ

ている美咲の姿があった。

あの子達はずるい。『こらしめよう』と言い出した癖に、また仲良くしちゃって。誰が計画したか大体感づいているのに、また普通に接している美咲はすごいな。

次に目に入った中崎先輩は他の部員と喋っていた。青色のユニフォームの尖った襟が、誰よりも似合っている。中崎くんも私達の試合を見てくれているといいな。雲一つない空を見ながら思った。

「点呼とるからミーティングのときに並べー」

こちらに歩いてきながら顧問は声を飛ばした。言われた通りに私達は並び、点呼を受けて来るはずの人が全員そろっていることを確認すると、出発の合図をした。ちなみに、自転車通学でない人は現地集合となっている。

そろそろと駐輪場に入ってゆく。爪先しか足が地面に付かない自分の自転車も、みんなの自転車と比べると一回り小さかった。部長が先頭になり、部員達は発進する。

信号が青から赤に変わっても置いてかれないよう突き進む部員がいるので、何度クラクションを鳴らされたことか。それでもみんなと大会場所まで走るのは何だか楽しかった。

西スポーツセンターに着くと、他の学校の生徒が入り口に入っていくところだった。みんな身体が大きくて、私は勝つ自信がない。弁当の中身がぐちゃぐちゃにならないようにそつと前かごから通学バッグを取り出し、顧問の元へ集まる。顧問の話が終わると、私達は中に入ってしまった。

中は大きな体育館のようで、たくさんの卓球台が二列に並んでい

た。他の学校の生徒達の喧騒が響いている。

「やばい、緊張してきた」

ナツエがつぶやいた。

「私も」

「あっちゃんは出ないでしょ」

と私が突っ込む。男の子は向こう側の台で試合をするのでぞろぞろと移動してゆく。先輩は振り返り、誰かを捜している様子だった。もしかして私を捜しているのだろうか。しかし先輩は諦めた様子で前を向いてしまった。

端に通学バッグを置くとラケットを磨きだした。勝てるように願いを込めながら、スプレーをかけてスポンジで泡をゆっくり伸ばす。練習をしている他校の生徒を眺めると、あれは何て言う打ち方だろう、ボールがまるで生き物のようにふわりとネットを越えた。

うーん、弱小校だと有名のうちの高校が勝ち進む可能性は、やっぱり低い。

開会式が始まった。選手宣誓やこの学校の顧問が分からない人の長ったらしい話にはあまり耳をかたむけず、斜め前にいる他校の女の子の長い三つ編みを見つめていた。腰の下まであり、あれだけ長いと学校でも目立つだろうな、なんて。

やっと開会式が終わると私達の学校はすぐに試合だ。いよいよ本格的に緊張してくる、まずは団体戦だ。一年女卓はラケットを手に持つと、たくさんの卓球台をぐるりと囲むように立ったフェンスを

一ヶ所どかし、そこから入って台の前に一列に並んだ。

「頑張つてね」

あつちゃんの声に、私はうんとうなずいた。

黒いユニフォームを着た相手の選手はがたいの良い人ばかりで、先ほどの三つ編み少女もいた。眼鏡をかけた女の子が選手の名前を呼んでゆく。私の名前も呼ばれて返事をしたが、声が少し裏返ってしまった。美咲はさすがだ、いつもと変わらぬ表情で返事をしている。いや、それとも私の緊張のし過ぎだろうか。

対戦相手は、奇遇にも三つ編み少女だった。卓球台の前に立つと、

「よろしくお願いします」

感情のない声で言われ、私も慌てて頭を下げた。練習を何本かすると、相手が何のラバーを使っているか見る権利はお互いにあるので、ラケットを交換する。私はほっとした。自分と同じラバーだ。

ラケットを返すとジャンケンをしてサーブの順番を決める。改めであいさつを交わし、私は手の上に乗ったボールを一直線に見つめ、サーブを打った。

先に点を取ったのは私だった。

「ラッキー！　どんどんリードだよ、希里」

後ろから声が飛んでくる。まるで応援合戦のように、負けじと相手の学校の子が、挽回できるよ、ユミ！　と声をはる。

先制点を取れて少し気を抜いていたのが間違いだったのかもしれない、その後立て続けにユミという名前らしい三つ編み少女に点が入ってゆく。三つ編みが激しく揺れていた。焦れば焦るほどミスは多くなり、何点か取れたものの私はあっさりと負けてしまった。二セット目も、三セット目も。

しかしそれほど悔しくなかったのは、実力があまりにも違いすぎたのと、何よりもうちの学校のほとんどの子が負けてしまっていたからだ。相手に勝ったのは、ナツエだけ。他の学校とも戦ったが、結果は同じだった。そうしてあっけなく、団体戦は三試合目で予選落ちが決まった。

県大会には、行けなかった。

しかし実のところ、私はまだ落ち込んでなんかない。だって、まだダブルス戦が残っているから。

「負けちゃったねー」

通学バッグを運びながらナツエは哀しそうに言った。

「でも、ナツエだってダブルス出るし、落ち込むのはまだ早いよ」

「そうそう！ それに、試合に出てすらいらない私はどうなるんだよ」

あっちゃんにはわざとらしく頬を膨らます。

「応援よろしくね」

私達は観戦席まで移動し、上の方の白い椅子に座ると弁当を取り出した。包みを開けたナツエが、

「あ」

と声を出す。

「どうしたの」

「何か紙切れ貼ってある」

見ると、黄緑色のふたに『ファイト！ ママより』と書いてある紙が貼ってあった。

「ナツエのママ良い人だねー」

「私の弁当箱にはそんなのまったく入っていないんですけど」

まあ、私の母はそういうことをする人でないということは分かっているけど。照れくさそうに頬をかくナツエだったが、本当は嬉しいんだろうなと思った。

弁当を食べ終わって一休みすると、美咲と合流した。ダブルスで試合をするのからこれだと意味がないかもしれないが、時間が許す限り二人で打ち合った。体育館の何倍も広いこの場所は、自分がちよつとばかり持っていたプライドや自信も全部吸い取ってしまう。

そして、試合の時間がきた。

「田島・月岡組」

「はい」

美咲と声が重なった。卓球は孤独なスポーツだと思うが、この瞬間私は美咲との一体感を感じ、不安が和らいだ。

目立つ黄色のユニフォームを着た対戦相手と向き合い、少しだけ練習をする。この時から、薄々おかしいとは思っていたのだけど。

二人とも赤い面の方で打ち返していることを目に焼き付け、美咲は肉付きの良い女の子と、私はきつね目の女の子とラケット交換をし。
私は絶望的な気分になった。

粒高ラバー。

表面に凹凸があるそのラバーは、ボールを打ち返すと不規則な揺れ方をして飛んでゆく。私の苦手なラバーだった。

もちろん顔には出さないようにして私はラケットをきつね目の子に返す。

「あの子、粒高ラバーだよ」

美咲に耳打ちする。

「あたしが交換した子も粒高ラバーだった。きついなー、これは」

ジャンケンをして、

「よろしくお願いします」

とお互いが言う、美咲が相手には見えないよう、台の影で人差し指を下に向ける。下回転サーブを繰り出すという合図だ、私はうなずいた。

美咲が予告通り下回転サーブを打ち、私は素早く美咲と入れ替わ

りボールの行方をじっと見つめ、こちらに飛んでくると慎重に打ち返した。

回転のかかっていないサーブが来たとき、私は何か仕掛けようかと迷ったが、点を落としたくないので無難にバックハンドで打ち返した。なのに、ボールはネットを越えてくれなかった。そうだ、相手は粒高ラバーだったんだ。

「どんまい！ 三本挽回」

あれは誰の声だろうか。私達を応援している人がいる。しかしどんまいと言われる度に焦る気持ちは高まって、点も取られるばかりだから余計プレッシャーが重くのしかかり、美咲のスマッシュもここごとく失敗した。

そしてあまり時間はかからずに一セット目、二セット目と負け……。次に負けたら、本当に終わりだった。あんなに練習したのに、このままでは終わりたくないと思った。

美咲の顔は険しかった。いつもとは違い、髪を一つに束ねている彼女。目の下にはひどいくまができていて、はみ出しすぎた後れ毛のせいもあるかもしれないが、すごく疲れているように見える。

そして何かに真剣になっっているとき、人は他のことを忘れてしまふのかもしれない。

「あの人達強すぎだし……。かなり、やばいね」

美咲から話しかけてくるなんて。内心びっくりしながらも、

「うん」

と返した。

「最後になるかもしれないし、もうやるだけやろっか」

最後？ 少し引っかったが、今回の大会最後の試合という意味なのだろう、そうだね、やるだけやった方が良くかもしれない。後悔しないように。

私がサーブを打つとき、卓球台の影で美咲は右を指差した。失点しないよう慎重になりすぎて、まだ一回も横回転サーブを打っていなかった。きつね目の子は横回転と気づかなかったのか、普通に打ち返してしまったためボールは横にそれて床に落下した。

「よしっ」

またしても美咲と声が重なり、試合中ということも一瞬忘れ笑い合った。

「ありがとうございました」

私は頭を下げた。悔しくないと言ったら嘘になる。でも、不思議とすつきとした気持ちだった。関東大会常連校と戦って、三セット目をジュースに持っていきただけでもすごいことだと思う。

「終わったね」

喜ぶ対戦相手を見ながら私はつぶやいた。

「うん、終わったね」

「でも、楽しかったな。あんなに強い人達と今まで試合したことなかったし」

「確かにね」

「お疲れ」

とあっちゃんは一言言い、あずけてあつた愛用のタオルを私の頭に乗せた。美咲の方かというと、数人の部員に囲まれて肩を叩かれている。

私達が一つになったのは、ダブルスの試合をしているときだけだった。時間にすれば短いが、やはり私は思うのだ。美咲と一緒にだったから、緊迫した試合の三試合目はあんなにも楽しかった、と。

トイレに行く途中、さりげなく中崎先輩の姿を捜すと、彼は試合中だった。カットと言い、台から結構離れた場所でボールに下回転をかけている。ラケットを持った腕とか、真剣な瞳とか、私の知らない別の姿だった。振り返って試合会場全体を見渡す。美咲も先輩も大勢の人の中では小さな存在だった。

そうして、夏の大会は終わりを告げた。

第23話 中崎くん。

大会が終わった次の日でも、もちろん部活はある。部室の開いた窓からは生ぬるい風が入ってくる。

「じゃあ、今日は団体戦でもやる?」

美咲が提案した。

「賛成!」

一番最初に手を上げたのはあっちゃんだった。次々と賛成の声が上がると。

そして私達は二つのグループに分かれた。美咲と同じグループになり、私はこのときから決心していた。私のグループの一番は自分だ。対戦相手のあっちゃんは、

「希里とじゃ絶対負けるー」

と泣き真似をしてみせてみんなを笑わせた。声援は相変わらず聞こえないが、しかし私は別に気にしない。点を取る度大げさに喜ぶと、何故だか分からないが、

「温美にだけは負けるな」

などとちよつとだけ冗談混じりで、声援がちらほら飛んできた。ああ、そっか。応援しやすい環境というものがあるのかもしれない。私はあまりにも真面目にやりすぎていた。楽しく、やろっじゃない

か。

結果、あっちゃんはぼろ負けだった。

団体戦を締めくくるのは、美咲とナツエだ。現在四対四の引き分
けで、この試合でグループの勝ち負けが決まる。グループの組み合
わせは違うものの、以前あっちゃんが部活を辞めると言い出した日
にやった団体戦と、まったく同じ光景だ。二人の試合が始まり、あ
っちゃんはナツエの応援をしている。私は一人でうなずくと柵の前
から立ち上がり、卓球台に近寄った。そして美咲と一緒に過ごした
日々を頭に思い浮かべながら、すうつと息を吸う。

「美咲、どんどんリードだよ！」

サーブを打とうとしていた美咲は驚き顔でこちらに視線を移した。
声を出したのが私だと気づいたらしく、

「希里……だったんだ」

という言葉をごぼした。私だって驚かすにはいられなかった。

美咲、今私のこと名前で呼んだ。

多分、無意識の内にそう呼んでしまったのだろう。思えば、三年
近く『希里』と呼び続けていたのだから頭の中に染み着いてしまっ
てるのは当然のことだった。美咲は『月岡さん』と呼ぶのになん
かの注意をはらっていたんだろうな。

親友には戻れなくてもいい。でも、もう、私のことを避けたりは

しないよね。きっと。

「どうしたの？」

中崎先輩はきよとした顔で私を見ていた。い、部活が終わったあとにメールで先輩を呼び出すなんて初めてのことだったから。生徒玄関から出てきた女の子達は、好奇の視線を水飲み場にいる私達に向けていた。外はまだ明るく、立っているだけなのにうつすらと汗をかくのだから、やはり夏だ。

「いきなりで、ごめんなさい」

私はYシャツの襟を正しながら言った。

「でも、今日じゃないと決心が揺らいでしまいそうなんです」

「今日、何かあったの？」

先輩は目を丸くしている。

「美咲に、久しぶりに下の名前で呼ばれました。それだけなんですけど、前から考えていることだったので。今日がいいんです」

私はまっすぐ茶色い瞳を見つめた。足を動かすとガリツとコンクリートの地面が音を鳴らした。

「……何？」

先輩はエナメルバッグの紐を握る。こんなこと言ったら、図々しいかもしれない。けれど、私はそろそろ区切りをつけなければいけないんだ。

後悔をしないために。

「弘樹くんにあいさつをしたいんです」

先輩はまばたき一つせず、しばらくの間停止していた。やっぱり、駄目だろうか。私は加害者なんだから。車が道路を走る音、生徒が交わすバイバイというあいさつ、制服姿のみんな。すべてが今は遠いものを感じる。

意外にも、あっさりと先輩は言った。

「良いよ」

そして、こう続ける。

「弘樹もそれを望んでいると思うよ。もちろん、俺も」

「良いんですか？」

「良いんだよ。俺も、弘樹も恨んでないし、月岡さんが来てくれるのを願っていた」

先輩は手を伸ばしてきた。とつさに目をつぶりそうになるが、何をするのか分かったので喉元に視線を固定する。ごつごつとしているが優しい手の感触を頭に感じた。先輩は背を向けるとスニーカーを引きずるように歩き出した。私は周りには目もくれず、黄ばんだ

Yシャツの背中を追う。肩甲骨がはつきりと分かった。

鍵を開け自転車に乗り駐輪場から出ると、前方で先輩が大きな自転車にまたがって私を待っていた。ちらりと後ろを振り向くとゆっくりと発進した。

見慣れたいつもの景色が流れる。たくさんの木が生えている広い公園や、セブンイレブンを通り過ぎる間、私は考えていた。

中崎くんは、何て語りかければいいのかだろう？　ごめんなさいは何か違うような気がする。第一、家族の人が家にいたらちよつと気まずい。

「家族の人は家にいるんですか？」

車の走る音に負けないよう、いつもより大きな声で訊いた。もしいるとしても、もう私の中に行かないという選択肢はないのだが。

「仕事が遅いからまだいないよ。帰ってくるのは大体九時頃さ」

共働きなんてさほど珍しくはないが、それにしても結構帰りが遅いんだな。だから中崎くん、お兄さんのことがあんなに好きだったのかもしれない。

しばらく走ると私の知らない道に入った。高いマンションやアパートがそびえ立っていて、そのせいで道は日陰になっていて薄暗い。電灯は点いているものの、点々と立っていて数えるほどしかなかった。

しかし先輩に続いてハンドルを右にきくと、目の前に大通りが姿を現した。信号待ちの車が排気ガスを吐き出している。

「近道したんだ」

私の考えていることが分かったのか、先輩が説明した。止まっている車の間を先輩の自転車がすり抜ける。私はまだ死にたくないの
で左右をよく確認してから、信号は使わずに先輩と同じルートを通
った。

家が並ぶ住宅街を進むと、先輩がいきなり止まったので私は急いでブレーキをかけた。キィッと嫌な音がした。

「ここだ」

先輩の左側には、どこにでもあるごく普通のマンションが立っていた。私はマンションの外壁に自転車を止める。先輩は短時間だからここでも大丈夫だろうと言った。先輩がマンション住人専用の駐輪場に自転車を止めにいつている間、私はマンションを見上げた。人通りは少なく、どこからか蝉の鳴き声が聞こえていた。

あの屋上から、中崎くんは飛び降りたんだ。

足元から恐怖が湧き上がってきた。どうして？ それほどの勇氣があるなら、何でもできたじゃない。先輩に声をかけられるまで、私はその場から動けなかった。

「大丈夫か？ 気分が悪いなら無理するなよ」

心配そうな表情で顔を覗く。

「大丈夫です。もう、逃げたくないんです」

私は何度か空気を吸うと、大丈夫なことを表すために微笑んでみせた。先輩はうなずき私の背中に手を当て、しかしそれが下着の紐の上だと気付いたのか慌てて手を下にずらし、マンションに入つてゆく。

エレベーターに乗ると先輩は三階のボタンを押した。

3と書かれたボタンが点灯し、エレベーターが上昇する。

かすかな機械音の他には何の音もしなくて息苦しい、早く三階に着いてほしいと思った。その間も先輩の熱い手を背中に感じていた。ケージの上昇が停まると、ゆっくりとドアが開く。私の背中を軽く押して先に降りるのをうながし、続いて先輩もエレベーターから降りた。電気の付いていない狭い廊下を進むと、突き当たりに一枚のドアがあった。ゴシック体の『中崎』という表札が、暗がりの中浮き上がっているように見えた。

エナメルバッグを開け、青い輪の形をしたキーホルダーが付いた鍵を引っ張り出す。そして鍵穴に差し込んで回しドアノブを手前に引っ張ると、芳香剤の匂いが漂ってきた。先輩は先に入り手を伸ばして壁にあるスイッチを押す。玄関に明かりが灯った。暗い部屋の中、突き当たりにはリビング、フロアリングの廊下にはいくつかのドアがある。

「入っていいよ」

靴を脱ぎながら先輩が言った。私は後ろのドアを閉めて鍵を閉めると、行儀良く並んだ三足の靴を踏まないよう、片足づつローファ―を脱いだ。誰もいないのは分かっているが、一応、

「お邪魔します」

と声に出す。先輩は玄関の電気を消し手前の左側にあるドアを開けた。私は緊張して直立不動の姿勢になる。ドアの隙間からは、畳の床に置かれた仏壇が見えた。私は通学バッグの持ち手をぎゅっと握る。先輩はドアを全開し、先に入るように促す。クーラーはついていないはずなのに、少しだけ涼しく感じる。私は胸を押さえながら、ドアの中へと入っていった。

蛍光灯は何度か点滅したあと、パツと点いた。淡い色の花が描かれた押し入れが壁の一面にあり、ちょうどドアの正面に黒い仏壇があった。中崎くんの笑顔が遺影に収まっている。私は目をつぶりYシャツの胸の部分を強く握った。

「大丈夫か」

目をつぶってみて気が付いた。中崎先輩の声、中崎くんに似ているんだ。

私はゆっくりと目を開けると、仏壇を直視した。大丈夫、私は冷静でいられる。私は仏壇に歩み寄るとぺたりと座った。正座をして背筋を伸ばす。中崎くんは死んだという事実を改めて感じさせられた。

私は線香の匂いが好きなのかもしれない。線香を供えると心が落ち着いた。手の平を合わせようとしたとき、

「行こう」

と背後に立った先輩に声をかけられた。

「どこにですか」

私は振り向いた。

「弘樹の部屋」

私にとっては仏壇の前で手を合わせることもよりも怖かった。だって、そこで中崎くんは生活していたのだから。

「本物の弘樹を見てほしいんだ」

「本物の弘樹……」

空っぽの気持ちで反芻した。十分の一秒、息が止まったような気がする。それにしても、部屋を亡くなったときのままにしてあるのは成仏の妨げになるんじゃないやなかったつけ。

「分かりました」

行っただけで何が変わるというわけでもないんだけど、来たからには何でもやってやる。それに先輩はそれを望んでいるみたいだし。立ち上がるうと手をつくともう足がしびれていた。崩れ落ちる私を見て先輩が笑った。

「足の裏触ってもいい？」

「絶対に駄目です！」

しばらくすると足のしびれもやわらいだので腰を上げると、足の裏のあとが付いていた。電気を消すと部屋は真っ暗になり、私はつい先輩のエナメルバッグにしがみついた。暗闇は苦手だ。しかも仏壇あるし。先輩はまたまた私の頭に手を乗せた。

廊下に出ると先輩は何の変哲もない木目のついたドアの前に立った。ドアの横にエナメルバッグを置き、月岡さんも置いておけば？と言われたが私は断った。何も持たずに中崎くんの部屋に入るのは何だか心細いのだ。

部屋の中は六畳ほどだろう、灰色のカーペットが敷いてあり勉強机や横に広い三段のタンスなどの他に、漫画本や置き傘、地球儀などが入った棚があった。その棚の前には、紐の長さが調節できる、中学校のときの学校指定の黒いバッグが置いてある。大きな窓には小豆色のカーテンが引かれていた。もちろん生活臭は感じられないが、きつと生前のままなのだろう。

部屋は少しだけかび臭い。勉強机に付いている本棚に中学校の教科書が置いてあるのを見て、中崎くんは中学生で時が止まってしまっているのだと切ない気持ちになった。

先輩が部屋の電気を点ける。そして私の横を通り過ぎると、ペン立てしか乗っていないさっぱりとした勉強机。家族が片付けたのかもしれないが、向かい、引き出しの一番目を開けた。私はわけが分からず蛍光灯の真下で立ち尽くしていた。

「弘樹が死んですぐ、机の中を整理していたら見つけたんだ」

引き出しの中に目をやると、茶色い封筒だけがそこにあった。先輩はその封筒を持つと私に手渡した。良いんですか？と訊くとなずいたので、私は封の閉じられていない封筒から三つ折りにされた一枚の便箋を取り出す。

両手で開くと、黒いボールペンでつぶつたであろう文字の冒頭には、『月岡希里様』と書かれていた。少し雑な文字を目で追う。

『月岡希里様』

こんにちは。隣の席の中崎です。いきなりでびっくりさせたかもしれないけど、最後まで読んでくれたら嬉しいですよ。

実は、同じクラスになってからずっと月岡さんのことが気になっていました。優しいし、数学もていねいに教えてくれるし。俺のことをからかったりもしないしさ。

今さらだけど、髪型も短い方が似合ってます。長くてもいいと思うけど。イルカのストラップ、月岡さんが持っていたので俺も買いました。ストーカーみたいでキモイかもしれないけど。

兄ちゃんの自慢ばかりしていたのは、本当に尊敬してたからなんだけど、だからお兄ちゃまなんてあだ名つけられちゃったんだよね。それだけでいじめられたわけじゃないけどさ。

迷惑な手紙だったらごめん。お返事待ってます。では。

中崎弘樹』

私は言葉を失った。

「弘樹は、月岡さんのことが好きだったんだよ」

お兄ちゃまと呼ばれていたということを先輩は知っていたということも衝撃的ではあった。でも。

まさか、中崎くんが私のことを好きだったなんて。

涙が溢れてきた。中崎くんは、美咲のことじゃなくて私のことを見ていたんだ。どうして？ どうして私へ宛てた手紙なんかを書いたの？ どうして私のことを好きになったの？ どうして、自殺なんかしてしまったの……。私だって、いじめていた一人なのに。

「渡すかどうかずっと迷ってた。これを読んだら自分を責めてしまうかもしれないし、死んだやつにこんなこと言われても困ると思う

て。でも」

先輩は涙声だった。

「今の月岡さんなら、大丈夫だと思ったんだ」

中崎くん　。

私は伝えたいことがあった。謝罪でも、お別れでもない。勉強机を見つめ、中崎くんが椅子に座っている姿を想像しながら口にした。

「ありがとう」

とめどなく涙は流れ続ける。私は中崎先輩の胸に顔を押し当てた。先輩が私の背中をなでる。頭に冷たいものが垂れてきた。先輩も、泣いているらしかった。

「中崎くん、ありがとう」

もう一度口に出し、中崎くんの笑っている顔を思い浮かべた。もう、会えないんだね。

私が初めて流した、本当の涙だった。

第24話 美咲。

ゆっくりと目を開けると朝日がまぶしかった。

小鳥のさえずりが聞こえる。まだアラームは鳴っていない。私は目をこすると、むくりと起き上がった髪を触った。昨日美容院に行き、肩辺りまで髪の毛を切ったから、頭が軽く感じる。短くしたのは中学生以来だった。寝付いたのは相変わらず遅かったが、いつもより熟睡していたのかもしれない、吐き気は感じなかった。

昨晚、私は夢を見た。美咲と中崎くんが登場してきて、学校で一緒に談笑していた。現実には有り得ないことだ。懐かしい中学三年生のときの教室だったが、美咲は現在の姿をしていた。茶色い髪に化粧、でもやっぱりその姿も私の見慣れた美咲なんだよね。中崎くんは変わっていないかったけど、あんなに笑っている姿は初めて見た。思い出すと何だか温かい気持ちになり、思わず口元を緩めた。

ジリジリリ、といきなアラームが鳴ったので少しびっくりした。ボタンを押して止めると、私はベッドの上から元気良く飛び降りた。

リビングに行くと母は目を丸くした。

「あれ、希里いつもより起きるの早いね。どうしたの?」

「別にどうもしないけど」

私は苦笑した。

「あ、そうだ。マーガリンきれているの。だから何食べる?」

「うーん……」

私は手を洗いながら考えた。

「じゃあ、おにぎり食べる」

「オッケー。お母さんが愛を込めて握ってあげるから」

「込めんでいい!」

椅子に座りしばらくすると、お皿に乗ったラップに包まれた二つのおにぎりと麦茶が運ばれてくる。私は麦茶を飲みながらおにぎりを食べた。ちよつと二つ目は寝起きなのできつかったが、塩加減が良くご飯も炊きたてで美味しかったので、食べることが出来た。

お皿を流しに持っていき洗剤で洗っていると、

「自分で後片付けをするなんて珍しいじゃない。彼氏でもできた?」

と馬鹿なことを言い出したので、私は肘で母の腹を突つついた。

学校に行くと、生徒玄関で山田さんに声をかけられた。

「希里ちゃん、髪切ったんだ」

「うん」

ただ、それだけの会話。だけど何だか幸せな気持ちになった。いつかばったり出くわしたら、私からあいさつを試してみよう。そう思

えた。

教室に入るとグループの子達が寄って第一声に言った。

「あれ、希里髪切ったんだ！」

「可愛いー」

「うんうん、似合ってる」

私は照れくさくなった。

「そうかなあ」

「こっちの方が似合ってる」

などとみんなは言いながら私の髪の毛を触る。他人に髪の毛を触られるのは何だか心地よい。

「てか、もうすぐ夏休みだね。みんなでどこか行こうよ」

冗談好きが興奮気味に言った。言われなくてもみんなはそのつもりだろう。

「あつたりまえ！ 海とか行っちゃう？」

「あ、でもうちら部活あるよね」

ナツエが私の方を見た。

「あー、そうだった。でも一日も休みがないほど顧問も鬼じゃないと思うよ」

私が答える。

「そうだよ。楽しみー」

そのとき、いきなり後ろから声をかけられた。

「希里、髪切ったんだね」

あっちゃんと彼女のグループの子達が立っていた。

「月岡さん短い方が似合ってる」

そう言ったのはあまり会話を交わしたことのない子だ。私は嬉しくなっ

「ありがとう」

私は笑顔で言った。

部室に行ってもクラスメイトとほぼ同じ言葉を言われた。

「あ、髪切ったんだ」

「うん」

「似合ってるじゃん。私も早く髪切りに行きたいなー」

「でももったいくない？ 結構長かったのに」

と言った美咲の友達は、最近髪を切ったばかりだか気に入らず、早く伸びてほしいと他の部員にこぼしていたのを小耳に挟んだことがある。そういえば、美咲の姿がない。他は全員そろっているのに。

「美咲ちゃんは？」

先にあっちゃんが訊いた。すると前に煙草を吸っていた部員が答える。

「ああ、美咲ならラケット取りについさっき来たけど。もう来ないと思うよ」

意味が分からなかった。確かに美咲のラケットケースは棚の中から消えている。

「どういうこと？」

と私が聞き返す。

「あれ、知らない？ 美咲、今日で学校辞めたんだよ」

一瞬呼吸が止まった。部員が何か言う前に、私は部室を飛び出していた。

部員は『ついさつき』と言っていた。だから、もしかしたら間に合うかもしれない。生徒玄関に行くために二階まで上がって渡り廊下を走っている途中、部室に置いてきた通学バッグの中に自転車の鍵がしまっていることを思い出し、私は下唇を噛んだ。しかし取りに戻っていたら余計間に合わない。

美咲の家を知っているのだから、訪問すればいいことかもしれないが、私はそこまでする勇気なんてなく、それに、訪問してはいけないような気がしたのだ。

そういえば美咲、大会のとき『最後になるかもしれないし』と言っていたのではないか。どうしてあのとき気づかなかったのだろう。気づいたとしても私は何もできないけど、せめてきちんとお別れのあいさつくらいはしたかった。いや、まだ諦めちゃいけない。人目も気にせず私は階段を駆け下りた。

やっと生徒玄関が見えてきた。私は息をきらしながら自分のクラスのげた箱まで走り、美咲のげた箱を覗くと何も入っていないかった。

茶色いローファーマ、体育の時間に使う黒いスニーカーも、綺麗な上履きも。まるで田島美咲なんていなかったかのように、そこは空っぽだった。

私は上履きを出したまま、土足厳禁の場所にローファーマを置いて足をつ込み、再び駆け出した。ちゃんと履いていなかったので転びそうになりながらも、私は校門へと向かう。

すると、向こう側の道路を走る見覚えのある自転車に乗った後ろ姿が、角を曲がるところだった。今まで私はどんなことがあっても、外で人の名前を呼ぶことはなかった。恥ずかしくてできなかった。しかし、今の私に迷いはなかった。

「美咲！」

私の目の前を一台の車が通り過ぎる。その人物はブレーキをかけると周りをきよきよとしていた。道路を渡り走って近寄る私の足音に気づいたのか、振り向いてやっと自分の姿をとらえた。やっぱり美咲だ。驚愕の瞳に変わる。

「どうして……」

美咲は戸惑っていた。当たり前だよね。私は息を整えて言った。

「部員から聞いたの。だから、あいさつしようと思って」

お別れ、という言葉は避けた。しんみりした気持ちにな리たくないから。

「どうして学校辞めるの？」

「……」

美咲は迷っている様子だった。

「教室で独りだから？」

「……そうだよ」

「でも、部活の友達とかいるじゃん」

「意地悪するなんて、本当の友達じゃないもの」

美咲はこらしめられたことに気付いていたのだ。

「そう……」

独りでいるのがどんなに辛いことかは私も充分分かっていて。私は汗で濡れた髪をかき揚げながら言った。

「忘れないから」

躊躇することなく口にできたのは自分でも驚きだ。辛かったよね。苦しかったよね。きっと、これから辛いことは沢山あるだろう。美咲は哀しげな顔で私を見ていたが、

「うん」

ちよっただけ笑った。

「髪、切ったんだね」

そう言っただけ自分の目尻をこする。目の赤さは酷いものだった。私は張り裂けそうな感情を抑え、にこりと笑ってみせた。

「似合ってる」

私は目をそらした。熱いコンクリートの地面を見つめながら、

「じゃあ、頑張ってるね。バイバイ」

と口にし、背中を向けて歩き出した。

「バイバイ、希里」

後ろを向くと私に向かって手を振っていた。太陽にも負けないほどのまぶしい笑顔。

ああ、あれが美咲なのだ。私と親友だった、大切な女の子。

私も笑顔で手を振り返す。前を向き自転車で走り出しても、姿が見えなくなるまでずっと。私は塀に寄りかかり、ポケットに入れた携帯電話でメールを送った。

『今すぐ、学校の外に出てきて下さい。お願いします、先輩。』

ほどなくして先輩は来てくれた。

「どうしたの」

「美咲が、学校を辞めたんです」

私はうつむいたまま答えた。

「そうなんだ……。何でここにいるの」

「お別れ、告げたんです。美咲、笑顔で手を振ってくれました」

やっぱり私は泣き虫だ。じわりと涙がにじんでくる。先輩は私の頭をそつと触り、

「良いんだよ」

と言った。その途端、抑えていた涙が込み上げてきた。泣き顔を他人に見られるのが嫌だから、私は先輩の胸に顔をうずめた。

「別れて、やっぱり辛いですね」

「当たり前さ。俺だって辛かった」

汗がにじんだ先輩の体育着、私はこの胸を失いたくないと思った。

「今までさ、弘樹の部屋を片付けたら何だかあいつの存在までもがなかったみたいになるんじゃないかと怖くて、そのままにしていたんだ。」

けれど、月岡さんがあの手紙を読んでくれてきつとこれからは弘

樹のことを忘れないでいてくれるだろうと思って、やっと昨日片付けられたんだ。月岡さんとうちやって会話ができるのは、弘樹のおかげだよ。あ、そんなふうにいったら化けて出てきそうだな」

顔を上げると先輩は笑っていた。

「人は、別々の道を歩いていくんだよ。例えば険しい道でも、絶対にその苦しみは無駄にならない。だから、田島さんも生きていけるよ。もちろん、月岡さんだって。だから今は泣いて良いんだよ」

先輩の言葉が心に染み渡る。

私達は、別々の道を歩いてゆく。もう一緒に歩くことはなかったとしても、美咲と一緒に過ごした日々は確かにあったのだから。中崎くんと過ごした日々だってちゃんと存在していたのだから。

これから、何が起きるかは誰にも分からない。けれど。

「髪、切ったんだね。……似合ってる」

先輩が照れ笑いをしながら私の髪を触った。

過去があるから今がある。

生きている限り、未来だって、きっと、ある。

了

第24話 美咲。（後書き）

最後まで読んで下さりありがとうございました。この小説は、何年も前から書きたいと思っていたものです。お読み下さって何かを感じて頂けたなら幸いです。

どうか、皆様に明るい明日がありますように。本当に、ありがとうございました。

霜月 沙羅

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9143a/>

消えない昨日、失う明日。

2011年7月8日22時13分発行